

姫路市

関ノ口遺跡

－ 中播都市計画事業 JR 網干駅前土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －



令和 7 (2025) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

姫路市

関ノ口遺跡

－ 中播都市計画事業 JR 網干駅前土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －



令和7（2025）年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は兵庫県姫路市網干区和久に所在する関ノ口遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、姫路市による中播都市計画事業 JR 網干駅前土地区画整理事業に伴うもので、姫路市長の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
3. 調査の推移は以下のとおりである。

(発掘作業)

令和元(2019)年11月22日～令和2(2020)年2月17日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

工事請負：株式会社広築

(出土品整理作業)

令和4(2022)年4月1日～令和7(2025)年3月25日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4. 空中写真測量は、株式会社かんこう神戸支店に委託して実施した。
5. 遺物写真は、株式会社地域文化財研究所に委託して中本照雄氏が撮影した。
6. 漆附着須恵器碗は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターで保存処理を実施した。
7. 本書の執筆は、第3章第1・2節を藤原怜史・三好元樹、第4章第1節を株式会社古環境研究所、第4章第2節をバリノ・サーヴェイ株式会社、それ以外を三好が行った。編集は整理技術員の尾鷲都美子の補助のもと三好が行った。
8. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
9. 調査成果の測量は、既設の3級基準点を基に基準点を設置して実施した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
10. 本書に用いた方位は座標北を基準とする。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々にご教示・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

池田征弘、高瀬一嘉、高橋照彦、中村弘、福井優、和田晴吾

凡 例

1. 遺物番号は、石器・石製品は番号の前に「S」を付した。
2. 土器類実測図の断面について、須恵器は黒、白磁は70%網フセ、瓦器は20%網フセとした。
3. 土器、石器(S4)の実測図は1/4、石器(S1～3)の実測図は2/3で掲載した。

目 次

第1章 調査の経過	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査	1
第3節 出土品整理・報告書作成	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	12
第3節 遺構	16
第4節 遺物	28
第4章 自然化学分析	
第1節 放射性炭素年代測定 (AMS)	46
第2節 樹種同定	49
第5章 総括	
第1節 関ノ口遺跡第7次調査区の遺跡の変遷	52
第2節 古墳時代の関ノ口遺跡第7次調査区	56

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	4	第6図 第2面 SK332・SK359	20
第2図 調査区配置図	11	第7図 SD45・SA1	24
第3図 北壁土層断面図	13	第8図 弥生時代 石器	31
第4図 東壁土層断面図	14	第9図 木材	51
第5図 南壁土層断面図	15		

表目次

第1表 出土土器観察表	38～45	第4表 樹種同定結果	49
第2表 測定試料及び処理	46	第5表 古墳時代後期の四面廂建物	57
第3表 測定結果	48		

図版目次

図版 1 第4面(弥生時代中期以前)の遺構	図版 13 第1面 SB3
図版 2 第4面 溝・土坑・ピット	図版 14 第1面 SD279・SX280
図版 3 第3面(弥生時代中期下層)の遺構	図版 15 第1面 鋤溝
図版 4 第2面(弥生時代中期上層)の遺構	図版 16 第1面 SB4
図版 5 第2面 SH1	図版 17 第1面 SB5・SK79・SK218・P109・P16
図版 6 第3面 SR389・SR390	図版 18 第1面 SX39・SX33・SK250・SK247
第2面 SD377・SD369・SD352	図版 19 弥生時代中期前葉・後葉 土器
図版 7 第2面 SK308・SK321・	図版 20 弥生時代中期後葉 土器(1)
SK310・SK346・SK358	図版 21 弥生時代中期後葉 土器(2)
図版 8 第1面(古墳時代以降)の遺構	図版 22 弥生時代中期後葉・後期頃 土器
図版 9 第1面 掘立柱建物・横列配置	図版 23 古墳時代・中世 SD46 土器
図版 10 第1面 SB1	図版 24 中世 SD279 土器
図版 11 第1面 SB1・SB3 土層注記	図版 25 中世土器(1)
図版 12 第1面 SB2	図版 26 中世土器(2)

写真図版目次

写真図版1	写真図版4
調査区全景(南から)	調査区東壁土層(西から)
写真図版2	調査区東壁南隅土層(西から)
朝日山と調査区(南西から)	調査区南壁土層(北から)
網干駅前と調査区(北から)	写真図版5
写真図版3	調査区南壁東半土層(北西から)
調査区北壁西半土層(南から)	調査区南壁西半土層(北東から)
調査区北壁東半土層(南西から)	調査区南壁中央部土層(北から)
調査区北壁中央部土層(南から)	

写真図版 6

第4面 調査区全景（南から）
SD415 土層断面（南西から）
SK465 土層断面（南西から）
SK440 土層断面（北東から）
P446 土層断面（西から）

写真図版 7

P448 土層断面（北から）
P411 土層断面（南から）
P433・432 土層断面（南西から）
P412 土層断面（北西から）
P459 土層断面（北から）
P414 土層断面（南から）
P426 土層断面（西から）
P466 土層断面（南西から）

写真図版 8

P442 土層断面（北から）
P401 土層断面（南から）
P397 土層断面（南から）
SX388 土層断面（北東から）
SR342 土層断面（南西から）
SR390 完掘状況（南から）
SR390 土層断面（西から）
SR389 土層断面（西から）

写真図版 9

SX388 検出状況（北東から）
SR342 完掘状況（南から）
SR389・390 土層断面（北西から）

写真図版 10

第2面 調査区全景（南から）
第2面 調査区全景（南東から）

写真図版 11

SH1 全景（南から）
SK332 土器出土状況（南から）
SK359 土器出土状況（北から）

写真図版 12

SK372 土層断面（東から）
SK372 完掘状況（西から）
SH1 P364 土器出土状況（南から）

SH1 P364 土層断面（南西から）
SH1 P349 土層断面（南東から）
SH1 P326 土層断面（南東から）
SH1 P353 土層断面（南東から）
SH1 P327 土層断面（南東から）

写真図版 13

SD377 土層断面（南から）
SK308 土層断面（南から）
SK321 土層断面（南西から）
SK358 土層断面（南東から）
SK332 土層断面（南から）
SK359 土層断面（北から）
P356 土器出土状況（北から）
P337 根石検出状況（南から）

写真図版 14

第1面 調査区全景（上から東）
第1面 調査区全景（南東から）

写真図版 15

SB1 検出状況（南から）
SB1 全景（北から）

写真図版 16

SB1 P2 土層断面（南から）
SB1 P2 完掘状況（南から）
SB1 P3 土層断面（南から）
SB1 P3 完掘状況（南から）
SB1 P4 土層断面（東から）
SB1 P4 完掘状況（東から）
SB1 P5 土層断面（東から）
SB1 P5 完掘状況（東から）

写真図版 17

SB1 P6 土層断面（東から）
SB1 P6 完掘状況（東から）
SB1 P7 土層断面（北から）
SB1 P8 土層断面（北から）
SB1 P237 土層断面（西から）
SB1 P237 土層断面（北から）
SB1 P238 土層断面（西から）
SB1 P11 土層断面（北から）

写真図版 18

- SB1 P12 土層断面（北から）
 SB1 P13 土層断面（北から）
 SA3 P16・SB1 P17 土層断面（東から）
 SB1 P82 土層断面（西から）
 SB1 P84 土層断面（北から）
 SB1 P86 土層断面（北から）
 SB1 P233 土層断面（北から）
 SB1 P9 土層断面（北から）

写真図版 19

- SB2 全景（南西から）
 SB2 P167 礎盤石検出状況（南西から）
 SB2 P163 土層断面（南東から）

写真図版 20

- SB2 P253 土層断面（北西から）
 SB2 P252 土層断面（北西から）
 SB2 P167 土層断面（南西から）
 SB2 P248 土層断面（南西から）
 SB2 P246 土層断面（南東から）
 SB2 P163 唐居敷検出状況（南東から）
 SB2 P161 土層断面（南東から）
 SB2 P161 礎盤石検出状況（南西から）

写真図版 21

- SB3 全景（南から）
 SB3 P146 土層断面（北から）
 SB3 P146 礎盤石検出状況（北から）
 SB3 P276 土層断面（北から）
 SB3 P152 土層断面（北から）
 SB3 P152 礎盤石検出状況（北から）
 SB3 P150 土層断面（北から）

写真図版 22

- SB3 P277 土層断面（北から）
 SB3 P53 土層断面（南から）
 SB3 P62 土層断面（南から）
 SB3 P129 土層断面（南から）
 SB3 P126 土層断面（南から）
 SB3 P116 土層断面（南から）
 SB3 P94 土層断面（南から）
 SD273（左）・SD213（右）土層断面（西から）

写真図版 23

- SD279・SX280 礎検出状況（北から）
 SD45・SA1 全景（南西から）

写真図版 24

- SD279 礎検出状況（西から）
 SD279・280 土層断面（南から）
 SD279・280 土層断面（北半）（西から）
 SD279・280 土層断面（南半）（西から）
 SD279 土層断面（南から）
 SD45 土層断面（南から）
 SX39 土層断面（南から）
 SX33 土層断面（南東から）

写真図版 25

- SD159 土層断面（西から）
 SD117 土層断面（南から）
 SD85 土層断面（東から）
 SD81 土層断面（東から）
 SB4 全景（東から）

写真図版 26

- SK250 土層断面（南から）
 SK247 土層断面（南から）
 SK218 土器出土状況（南から）
 P109 上層 土器出土状況（南西から）
 P109 下層 土器出土状況（北東から）
 P109 最下層 土器出土状況（北西から）
 P100 土器出土状況（北から）
 P182 土器出土状況（南から）

写真図版 27

- 弥生時代中期後葉の土器
 古墳時代の出土遺物

写真図版 28

- 弥生時代中期前葉 土器
 弥生時代中期後葉 土器（1）

写真図版 29

- 弥生時代中期後葉 土器（2）

写真図版 30

- 弥生時代中期後葉 土器（3）

写真図版 31

弥生時代中期後葉 土器 (4)

写真図版 32

弥生時代中期後葉 土器 (5)

写真図版 33

弥生時代中期後葉 土器 (6)

写真図版 34

弥生時代中期後葉 土器 (7)

写真図版 35

弥生時代中期後葉・後期頃 土器

写真図版 36

古墳時代 土器

古墳時代 唐敷石

写真図版 37

古墳時代・中世 SD46 土器

写真図版 38

中世 SD46 土器

中世 SD279 土器 (1)

写真図版 39

中世 SD279 土器 (2)

写真図版 40

中世 SD279 土器 (3)

写真図版 41

中世 SD279 土器 (4)

写真図版 42

中世 SD279 土器 (5)

写真図版 43

中世 SD279 土器 (6)

写真図版 44

中世 SD45 土器 (1)

写真図版 45

中世 SD45 土器 (2)

写真図版 46

中世 土器 (1)

写真図版 47

中世 土器 (2)

写真図版 48

中世 土器 (3)

写真図版 49

中世 土器・弥生時代 石器

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

姫路市西端に位置するJR網干駅は京阪神方面に向かう電車の始発駅となっており、その周辺は交通の利便性に優れた好立地である。姫路市はJR網干駅北側について、土地の活用を促すため、中播都市計画事業JR網干駅前土地区画整理事業を実施している。それに伴い、姫路市教育委員会は平成28(2016)年度から関ノ口遺跡の発掘調査を行っている。

令和元(2019)年度については、姫路市教育委員会の事業量が対応可能な範囲を超えており、発掘調査の遅れが土地区画整理事業全体の工程に影響する恐れが生じた。そのため、土地区画整理事業の対象地のうち、都市計画道路網干線の範囲内について、姫路市の依頼(令和元(2019)年5月30日付)を受けた兵庫県教育委員会より、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が受託し、本発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査

関ノ口遺跡では、それまでに姫路市教育委員会により6次にわたる調査が行われており、第7次調査として発掘調査を実施した。調査期間・調査担当者は次のとおりである。

調査番号 2019024

調査期間 令和元(2019)年11月22日～令和2(2020)年2月17日

調査面積 327㎡

調査担当者 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

藤原怜史・久保弘幸・西山昌孝

11月15日に株式会社広築と埋蔵文化財発掘調査工事の契約を行った。

11月26日に関係者が現地集まり、開始立会を行った。調査範囲を確定し、調査区の周囲にフェンスを設置して、12月6日に機械掘削を開始した。機械掘削は12月17日に完了した。

12月9日に第1面上の包含層の人力掘削を開始し、第1面の遺構検出、写真撮影、実測図作成を行った。12月24日に第1面の空中写真測量と全景写真撮影を行った。12月24日から、柱穴の掘削や断ち割り調査を行い、1月16日に第1面の調査を完了した。

併行して、1月8日からは第2面上の包含層の人力掘削を開始し、第2面の遺構検出、写真撮影、実測図作成を行った。1月22日に第2面の全景写真撮影を、1月23日に空中写真測量を行った。

当初、第2面までの調査の予定であったが、1月10日に調査区北壁の精査を行った際に、さらに下層に遺構面(本書の第4面)が存在することが確認された。第2面調査後の1月23日から第2面下の人力掘削を開始した。第2面から掘りこまれた遺構であるが、平面的に検出が困難であったSR389・390・342を検出するために第3図29層の上面で掘削を停止したが、その面でもSX388が形成されており、遺構面(第3面)

であることが明らかとなった。1月29日に第3面の調査を完了し、1月30日から第4面上の包含層の掘削を開始し、遺構検出、写真撮影、実測図作成を行った。2月3日に第4面の全景写真撮影を行い、2月4日に柱穴の断ち割り調査を行った。2月7日に調査区の一部を断ち割って地層を確認して、調査を完了し、埋め戻しを開始した。

1月11日には近隣住民を対象とした地元説明会を実施し、発掘調査の成果を公開した。説明会には55名の参加者があった。

第3節 出土品整理・報告書作成

出土品整理作業は、令和4（2022）～6（2024）年度に兵庫県立考古博物館において公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。分析鑑定については、令和5（2023）年度に放射性炭素年代測定（AMS）を株式会社古環境研究所に、令和6（2024）年度に樹種同定をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。出土品整理作業の体制は、下記のとおりである。

令和4（2022）年度

作業内容 水洗い、ネーミング、接合・補強、実測

整理担当者 久保弘幸

整理保存課 深江英恵・大嶋昭海・野田優人・西口圭介

整理作業員（水洗い、ネーミング）栗山美奈・藤尾裕子・大木昌子・藤田久範

（接合・補強）小野潤子・梶原奈津子・森松沙耶香・富永愛子・岡崎真子・

香山玲子・新山王綾子・亀井彩葉

（実測）柏原美音・宮田麻子・寺西梨紗・西本奈生・松田聡子・尾鷲都美子

令和5（2023）年度

作業内容 実測、遺構・遺物トレース

整理担当者 三好元樹

整理保存課 深江英恵・大嶋昭海・野田優人・稲本悠一

整理作業員 池田悦子・柏木明子・宮田麻子・河合たみ・尾鷲都美子

令和6（2024）年度

作業内容 遺物トレース、写真撮影、レイアウト

整理担当者 三好元樹

整理保存課 深江英恵・稲本悠一・鈴木郁哉・池田旭

整理作業員 高瀬敬子・池田悦子・宮田麻子・尾鷲都美子・香山玲子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

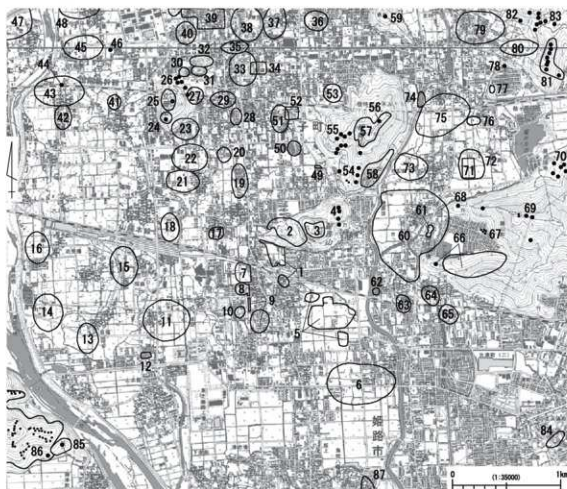
関ノ口遺跡は兵庫県姫路市網干区和久に所在する縄文時代から中世の遺跡である。姫路市域の西端に位置し、調査地の約200m西は太子町となる。姫路市の南部を横断するJR山陽本線の網干駅を挟んで南北が遺跡の範囲となっている。

兵庫県は北を日本海、南を瀬戸内海に接し、中央は中国山地東端の山地となる。山地の南には多数の河川の地積による平野が発達する。平野は、明石海峡付近で、六甲山地によって東西に分断され、東が大阪平野、西が播磨平野となる。姫路市、太子町、たつの市の市街地にあたる播磨平野西部は沖積平野の中に多くの独立丘陵が浮島状に所在する独特の景観となっている。特に平野の中央部に北から延びる京見山周辺には独立丘陵が多い。これは流紋岩で構成された山地の山麓部が沖積により埋積されたことで生み出された景観である。独立丘陵のひとつである朝日山の南東に接して、東北東-西南西方向に尾根をもつ日吉山がある。この日吉山の南麓の微高地上に関ノ口遺跡は立地する。

播磨平野西部には、攝保川、夢前川、市川をはじめとした多くの河川が流れる。関ノ口遺跡の約1km東には大津茂川が、約2.5km西には攝保川の支流の林田川がある。関ノ口遺跡周辺は両河川の沖積により形成された完新世段丘に該当する（青木 2022）。より細かい地形区分によると、日吉山と朝日山の南麓は阿曾面とされるが、1892年に生じた洪水では、阿曾面への影響は部分的であったのに対して、それ以下の地形面は全域が氾濫したことが知られる（太子町史編集専門委員会 1996）。周辺の遺跡の発掘調査では、流路の形成と埋没が繰り返されたことが明らかになっており、比較的浸水の影響が少ない土地を選んで人々が居住したものと考えられる。独立丘陵である朝日山と日吉山を北に控える関ノ口遺跡の立地は、南流する河川の影響を受けにくかったことによるとも考えられるが、関ノ口遺跡のこれまでの発掘調査でも、埋没するいくつかの河道の存在が明らかになっている。

第2節 歴史的環境

関ノ口遺跡周辺には様々な時代の多様な遺跡が認められる（第1図）。通時的な遺跡の分布の傾向としては、攝保川と夢前川の間では、京見山の南端付近より南には遺跡は希薄で、坂出遺跡（6）、辺作遺跡（84）、魚吹津構遺跡（87）、古網干遺跡の4遺跡が知られるのみである。縄文海進以降の海退に伴い砂州浜地形が形成され（成瀬 1998）、縄文時代以降の人類の活動痕跡が認められているものの、河口部に近く、河道が網目状にめぐっており、居住に適した時期が限られたことに起因するのだろう。一方、それ以北は遺跡が濃密に分布する。以下では、関ノ口遺跡のこれまでの発掘調査で分かってきたことと周辺の遺跡の状況を確認する。



- | | | |
|--------------|--------------|-------------------|
| 1 : 関ノ口遺跡 | 30 : 船塚遺跡 | 59 : 中出遺跡 |
| 2 : 朝日山遺跡 | 31 : 太子山南麓遺跡 | 60 : 丁・柳ヶ瀬遺跡 |
| 3 : 朝日山城跡 | 32 : 太子山遺跡 | 61 : 丁瓢塚古墳 |
| 4 : 朝日山古墳群 | 33 : 東南遺跡 | 62 : 恵美穂遺跡 |
| 5 : 和久遺跡 | 34 : 矢田部城跡 | 63 : 茶屋遺跡 |
| 6 : 坂出遺跡 | 35 : 鶴石田遺跡 | 64 : 山戸遺跡 |
| 7 : 鍛冶田遺跡 | 36 : 東保遺跡 | 65 : 南山戸遺跡 |
| 8 : 中筋遺跡 | 37 : 東保高田遺跡 | 66 : 山戸古墳群 |
| 9 : 前田遺跡 | 38 : 鶴遺跡 | 67 : 勝山町古墳群 |
| 10 : 地藏寺遺跡 | 39 : 鶴橋居跡 | 68 : 薬司古墳 |
| 11 : 沖代遺跡 | 40 : 斑崎寺南遺跡 | 69 : 丁古墳群 |
| 12 : 北口遺跡 | 41 : 老原遺跡 | 70 : 塚村古墳群 |
| 13 : 吉福遺跡 | 42 : 常全日蓮寺遺跡 | 71 : 下太田廃寺 |
| 14 : 吉福西遺跡 | 43 : 常全遺跡 | 72 : ツクワ遺跡 |
| 15 : 福地相坂遺跡 | 44 : 常全古墳 | 73 : 下太田遺跡 |
| 16 : 上橋遺跡 | 45 : 阿曾南遺跡 | 74 : 大津茂川床遺跡 |
| 17 : 竹広遺跡 | 46 : 阿曾古墳 | 75 : 川島遺跡 |
| 18 : 福地宮ノ前遺跡 | 47 : 片吹遺跡 | 76 : 茶ノ木遺跡 |
| 19 : 立岡笹山遺跡 | 48 : 阿曾北遺跡 | 77 : 黒岡山墳丘墓 |
| 20 : 蓮常寺東遺跡 | 49 : 大谷遺跡 | 78 : 黒岡山古墳 |
| 21 : 蓮常寺西遺跡 | 50 : 矢田部南遺跡 | 79 : 田中遺跡 |
| 22 : 蓮常寺北遺跡 | 51 : 矢田部遺跡 | 80 : 原坂遺跡 |
| 23 : 立岡南遺跡 | 52 : 矢田部城跡 | 81 : 鷺山古墳群 |
| 24 : 立岡山遺跡 | 53 : 栗原遺跡 | 82 : 黒岡11号墳 |
| 25 : 石巻峠城跡 | 54 : 檀特山古墳群 | 83 : 天神山古墳群 |
| 26 : 立岡山古墳群 | 55 : 檀特山西古墳群 | 84 : 辺作遺跡 |
| 27 : 立岡遺跡 | 56 : 檀特山東1号墳 | 85 : 中寺遺跡 |
| 28 : 矢田部西遺跡 | 57 : 檀特山山頂遺跡 | 86 : 権現山遺跡・権現山古墳群 |
| 29 : 立岡東遺跡 | 58 : 檀特山遺跡 | 87 : 魚吹津橋遺跡 |

第1図 周辺の遺跡

旧石器時代

平野部は沖積層が厚く堆積しており、旧石器時代の遺物の出土は希薄である。周辺では鍛冶田遺跡（7）で出土した翼状剥片かと考えられる剥片（久保・別府編 2022）が唯一のものである。

縄文時代

関ノ口遺跡では、第5次3区（姫路市埋蔵文化財センター 2020）、第6次1区（姫路市埋蔵文化財センター 2021）、第8次調査区南西部（福井 2021）で一乗寺K式を中心とする後期の土器や石棒などが出土している。遺構は見つかっていないが、網干駅北の関ノ口遺跡の南寄りを中心に集落が存在した可能性がある。

周辺では、前期末の土器が土坑から出土している片吹遺跡（47）（龍野市教育委員会 1985）が最も古い。

中期になると遺跡が増加する。片吹遺跡（47）では船本式の土器を伴う土坑が見つかっている（龍野市教育委員会 1985）。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）（深井・岡崎 1985、鑑・久保編 2015）では中期後葉の船本IV式・北白川C式以降の多数の土器が、東南遺跡（33）（篠宮編 2009b）では少量の中期の土器が見つかっているが、遺構は確認されていない。

後期にはさらに遺跡数が増加し、集落も確認されるようになる。片吹遺跡（47）では中津式土器を伴う複数の堅穴建物と一乗寺K式・元住吉山I式の土器を伴う堅穴建物が見つかっている（龍野市教育委員会 1985）。東南遺跡（33）では北白川上層I式を中心とする時期の多くの堅穴建物と掘立柱建物、埋甕、土坑が見つかっている（松本 1989a、海野 2008、篠宮編 2009b）。沖代遺跡（11）では土器の出土が確認されていた（波辺編 2011）が、近年の発掘調査で堅穴建物を含む集落が確認されている。坂出遺跡（6）（秋枝 2010b）、斑鳩寺南遺跡（40）（海野 2009）、大津茂川床遺跡（74）（中溝 1989）、辺作遺跡（84）（秋枝 2010a）では土器が出土している。

晩期の集落は確認されていないが、遺跡自体は少なくない。東南遺跡（33）（篠宮編 2009b）と片吹遺跡（47）（龍野市教育委員会 1985）では土坑が見つかっている。鍛冶田遺跡（7）では流路で土器が出土している（久保・別府編 2022）。常全遺跡（43）では深鉢が出土している（磯崎ほか 1971）。坂出遺跡（6）（秋枝 2010b）、立岡遺跡（27）（松本 1989a）、大津茂川床遺跡（74）（中溝 1989）、辺作遺跡（84）では後期の土器とともに晩期の土器が出土している。なお、辺作遺跡（84）では弥生時代までの遺物が残されるが、それ以降室町時代まで人類活動の痕跡が途絶えており、海浜部の居住の変化をうかがうことができる（秋枝 2010a）。

弥生時代

関ノ口遺跡では、中期前葉の遺構が最も古く、第5次1区で溝と土坑が見つかっている（姫路市埋蔵文化財センター 2020）。中期中葉から後葉にかけては、複数の堅穴建物を含む集落が形成されたと考えられる。転じて、後期の遺物は極めて希薄である。発掘調査によって、小河川が網目状に存在したことが分かってきたが、その多くが中期後葉に埋没しており、洪水により集落はいったん途絶えたものと考えられる。第8次調査区では終末期と考えられる堅穴建物（福井 2021）が、第5次2・3区では同時期の櫓（姫路市埋蔵文化財センター 2020）が見つかっている。

周辺には前期から遺跡が残されている。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）では前期後半の堅穴建物（中川 2006a）が、鍛冶田遺跡（7）では前期の水田跡（久保・別府編 2022）が見つかった。

中期では、中葉以降の集落が多数確認されている。鍛冶田遺跡（7）（久保・別府編 2022）と丁・柳ヶ瀬遺跡（60）（中川 2006a、小柴 2017b）では中葉から後葉にかけての集落が見つかった。和久遺跡（5）では後葉の集落（福井編 2013、山下・福井 2020）が、立岡遺跡（27）では後葉の堅穴建物（榎本編 1971）が見つかった。川島遺跡（75）では後葉の方形周溝墓群、土器棺とともに円形周溝墓かと考えられる遺構が見つかった。また、中葉～後葉の土器を多量に廃棄した複数の土坑が見つかった（榎本編 1971）。檀特山山頂遺跡（57）は独立丘陵上に立地する遺跡であるが、中葉と後葉の土器が見つかるとともに、堅穴建物状の落ち込みが確認されている（松本 2010a）。

後期にも多数の遺跡が認められる。和久遺跡（5）では、堅穴建物が密集する集落が見つかっており、終末期まで継続する（小柴 2010、福井編 2013、山下・福井 2020）。蓮常寺北遺跡（22）では集落（海野 2009）が、丁・柳ヶ瀬遺跡（60）では堅穴建物（中川 2006a）が見つかった。立岡遺跡（27）（榎本編 1971）では鉄斧を伴う焼失建物が、沖代遺跡（11）では有樋三角形無茎銅鏃を伴う堅穴建物が見つかった（三村・海野 2010）。常全日蓮寺遺跡（42）では土器棺4基がまとまって見つかった（三村・海野 1995）。

終末期の遺跡も引き続き多い。和久遺跡（5）では後期から集落が継続し、流路から多数の土器とともに青銅の埴塙が出土している（小柴 2010、福井編 2013、山下・福井 2020）。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）（深井・岡崎 1985、中川 2006a、小柴・関 2014、小柴 2017b、姫路市埋蔵文化財センター 2015）、沖代遺跡（11）（渡辺編 2011）、片吹遺跡（47）（龍野市教育委員会 1985）では集落が見つかった。川島遺跡（75）では、堅穴建物と土器を多量に廃棄した溝が見つかった（榎本編 1971）。東南遺跡（33）では山陰型版形土器を含む土器とともに、この時期の可能性のある集落が見つかった（篠宮編 2009b）。

古墳時代

関ノ口遺跡では、第1次2区と第9次1区にまたがって後期後半の可能性のある二面廂建物（南・三好編 2022）が、また、近年の調査で、その周辺でも同時期の掘立柱建物が見つかった。第5次1区ではこれらの建物と同じ向きの同時期の溝も確認されている（姫路市埋蔵文化財センター 2020）。これらの建物と溝は概ね日吉山と並行する軸方位となる（南・三好編 2022）。これらを含めると、古墳時代後期後半には、区画溝を持ち、多数の掘立柱建物が建ち並ぶ景観が復元でき、重要な施設であったことがうかがえる。古墳も見つかっており、第1次2区と第3次2区、第5次1区にまたがって中期後半の円墳（姫路市埋蔵文化財センター 2021）が、第1次2区で後期前半の円墳（南・三好編 2022）が見つかった。なお、関ノ口遺跡の北東に接する朝日山には朝日山古墳群（4）が所在しているが詳細は明らかでない。

周辺の古墳時代の遺跡は中期以降のものが多く、川島遺跡（75）では前期の堅穴建物や中期のカマドをもつ堅穴建物が見つかった（榎本編 1971）。鍛冶田遺跡（7）では中期から後期前半の集落が見つかった。その中には周囲の柱穴が0.6～0.8m、内側の柱穴が0.3～0.4mの総柱の掘立柱建物2棟が含まれる。

また、木棺墓群が見つかった（久保・別府編 2022）。船塚遺跡（30）では中期と考えられる集落が見つかった（三村・海野 1998）。蓮常寺北遺跡（22）では後期のカマドをもつ堅穴建物が見つかった（海野 2009）。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）では、後期の可能性がある、柱穴が0.55～0.45mの方形の掘立柱建物（小柴・関 2014）と柱穴が0.4～0.5mと0.5～0.6mの2棟の掘立柱建物（小柴 2017a）が見つかった。東南遺跡（33）（篠宮編 2009b）、鵜石田遺跡（35）（松本 1989b）、斑鳩寺南遺跡（40）（海野 2009）では後期の集落が見つかった。

周辺の古墳は前期と後期のものが中心である。西播磨最大の前方後円墳である丁瓢塚古墳（61）が最初期のもので、全長100m前後で楕形に広がる前方部をもつ（松本 2010b）。概ね同時期と考えられるのが山戸4号墳（66）で前方後円墳の可能性があり、石塚中から讃岐産の壺を用いた土器棺が出土している（松本 2010c）。同じく讃岐産の壺が出土した檀特山1号墳、さらに檀特山3号墳（54）も同じ時期の前方後円墳と考えられる（松本 2010d）。鷺山1号墳（81）は前期後半の前方後円墳と考えられる（岸本 2001）。黒岡山古墳（78）では、石室から、鏡、剣、鉄鍔、工具などが出土している（松本 1989b）。

周辺の古墳は中期になると数が減じ、規模が小さくなるが、前期前半には姫路市南東部に全長143mの前方後円墳である壇場山古墳が築かれており、古墳築造の労力が集約されたものと考えられる。全長26m程度の前方後円墳と推定される檀特山西8号墳（55）は周辺では数少ない中期の古墳である（岸本 2001）。

後期には山麓部を中心に多数の群集墳が形成される。勝山町古墳群（67）は、周辺の最初期の発掘調査事例であり、後期から終末期の15基の横穴式石室が調査された（上田編 1966）。中には後期前半の北九州系の石室も含まれており、播磨における導入期の横穴式石室と評価される（中濱 2010d）。京見山には後期中頃の前方後円墳が集中しており、薬司古墳（68）（中濱 2010a）、丁丁山1号墳（69）（中濱 2010b）、山戸12号墳（66）（上田編 1966）が知られる。全長23m程度の檀特山西5号墳（55）も同じ時期の前方後円墳と推定されている（岸本 2001）。丁山頂古墳（69）は後期後半の古墳で、渡来人との関りが深いともされる穹窿式石室を持つ（松本 1989b、中濱 2010c）。立岡山古墳群（26）の2～6号墳は横穴式石室をもつ後期後半の古墳である（松本 1989b）。平野部でも、発掘調査によっていくつかの古墳が見つかった。常全古墳（44）では沖積地の調査中に横穴式石室かと考えられる石室が見つかった（磯崎ほか 1971）。船塚遺跡（30）では後期の古墳2基の周溝が見つかった（三村・海野 1998）。

古代

関ノ口遺跡周辺は、8世紀に成立した『播磨国風土記』に記載がある揖保郡大家里に含まれると考えられている。なお、『播磨国風土記』に記載される「大法山・勝部岡」は現在の朝日山と推定されている。関ノ口遺跡では古代の遺構・遺物は乏しい。

檀特山遺跡（58）では奈良時代の竈をもつ掘立柱建物が見つかった（中川 2006b）。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）では奈良時代と考えられる掘立柱建物が見つかった（小柴 2017b）。流路からは多数の墨書土器が出土しており（深井・岡崎 1985）、官衙的な性格を持った可能性も推定される。また、平安時代の火葬墓と考えられる遺構が見つかった（篠宮編 2009a）。鍛冶田遺跡（7）では10世紀後半～13世紀前半の掘

立柱建物群と木棺墓が見つかった（久保・別府編 2022）。立岡東遺跡（29）では平安時代の正方位に軸を持つ掘立柱建物が見つかった（三村・海野 1993）。川島遺跡（75）では平安時代かと考えられる方形の柱穴をもつ掘立柱建物などが見つかった（榎本編 1971）。東南遺跡（33）では平安時代の木棺墓1基が確認されている（篠宮編 2009b）。

塔跡が県指定史跡になっている下太田廃寺（71）は、7世紀末から9世紀後半まで存続し、寺域は東西115.5m、南北130m以上で、四天王寺式の伽藍配置であったと考えられている（大谷・今里 2010）。

中世

関ノ口遺跡を含む姫路市網干区は中世には大津茂川を挟んで東西に広がる福井荘に含まれる。福井荘は姫路市域の荘園のなかでも最も資料が豊富に残されていることで知られる。福井荘の開発は北に隣接する鵜荘をはじめとする周囲の地域よりも遅いと考えられるが、8世紀終わりには開発が開始されていたとの見解もある（東郷 1973）。なお、福井荘の初出は12世紀中頃である（岩本 2004）。

関ノ口遺跡では、第10次2・3区で石組みの井戸とそれに関連する可能性がある東西方向の溝状遺構が見つかった（南・三好編 2022）。近年の調査では、主に遺跡の北端部で正方位に軸を持つ掘立柱建物が多数検出されている。関ノ口遺跡の北東に接する朝日山の山頂には朝日山城跡（3）が存在するが、関ノ口遺跡で見つかった遺構とは時期を異にすると考えられる。

和久遺跡（5）では中世のものかと考えられる正方位の掘立柱建物群が見つかった（山下・福井 2020）。沖代遺跡（11）では中世のものかと考えられる掘立柱建物が見つかったが、正方位ではない（渡辺編 2011）。前田遺跡（9）では室町時代から戦国時代にかけての、溝で区画された集落、あるいは工房群が見つかった（多田 2010）。吉福西遺跡（14）では概ね正方位の掘立柱建物による集落が見つかった（三村・海野 2010）。立岡遺跡（27）では11～12世紀頃かと考えられる、正方位の掘立柱建物による集落と土師器皿の埋納土坑が見つかった（榎本編 1971）。丁・柳ヶ瀬遺跡（60）では12～13世紀の概ね正方位の掘立柱建物（小柴 2017b）やこの時期の可能性のある井戸（小柴・関 2013）が見つかった。川島遺跡（75）では12世紀頃の青磁碗を伴う土坑墓が見つかった（榎本編 1971）。辺作遺跡（84）では室町時代の貝殻の集積が見つかり、海浜部への集落の進出がうかがえる（秋枝 2010a）。

【参考文献】

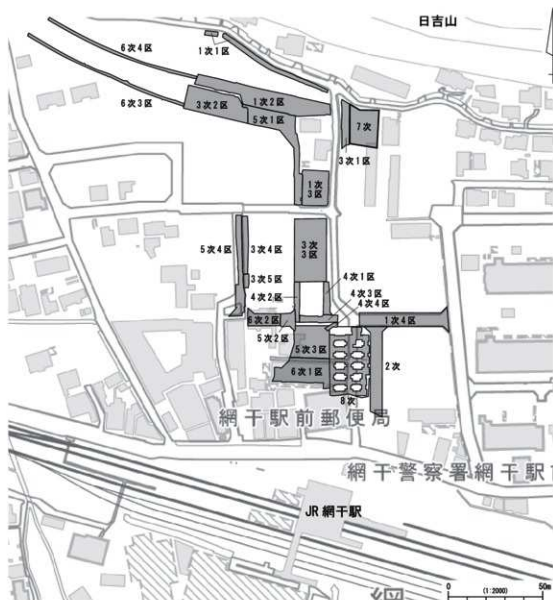
- 青木哲哉 2022『鍛冶田遺跡の地形環境』『鍛冶田遺跡』兵庫県文化財調査報告 519、兵庫県教育委員会
- 秋枝 芳 2010a『近作遺跡』『姫路市史』7下、姫路市
- 秋枝 芳 2010b『坂出遺跡』『姫路市史』7下、姫路市
- 磯崎正彦・渡辺誠・片岡肇・中谷雅治 1971『兵庫県太子町常全遺跡調査概要』『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告書 4、兵庫県教育委員会
- 岩本次郎 2004『播磨国鶴荘の条里景観に関する基礎的考察』『播磨国鶴荘 現状調査報告総集編』太子町教育委員会
- 上田哲也編 1966『姫路丁古墳群』東洋大学附属姫路高等学校
- 海野浩幸 2008『平成 17・18・19 年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料 74、太子町教育委員会
- 海野浩幸 2009『平成 14・15・16 年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料 75、太子町教育委員会
- 大谷輝彦・今里幾次 2010『下太田塚寺』『姫路市史』7下、姫路市
- 岸本道昭 2001『機特山西 5・8 号墳と鷺山古墳』『ひょうご考古』7、兵庫考古研究会
- 久保弘幸・別府洋二編 2022『鍛冶田遺跡』兵庫県文化財調査報告 519、兵庫県教育委員会
- 織 美記・久保弘幸編 2015『丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告 472、兵庫県教育委員会
- 小柴治子 2010『和久遺跡』『姫路市史』7下、姫路市
- 小柴治子 2017a『丁・柳ヶ瀬遺跡群発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 52、姫路市教育委員会
- 小柴治子 2017b『丁・柳ヶ瀬遺跡群発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 53、姫路市教育委員会
- 小柴治子・関 梓 2014『丁・柳ヶ瀬遺跡群発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 22、姫路市教育委員会
- 篠宮 正編 2009a『丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 350、兵庫県教育委員会
- 篠宮 正編 2009b『東山遺跡』兵庫県文化財調査報告 362、兵庫県教育委員会
- 太子町史編集専門委員会 1996『太子町史』1、太子町
- 多田暢久 2010『高田遺跡 2』『姫路市史』7下、姫路市
- 龍野市教育委員会 1985『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書 6
- 中川 猛 2006a『丁・柳ヶ瀬遺跡（第2次）』『TSUBOHORI 平成 15 年度（2003）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会
- 中川 猛 2006b『機特山遺跡（第1次）』『TSUBOHORI 平成 15 年度（2003）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会
- 中濱久喜 2010a『丁・薬師古墳』『姫路市史』7下、姫路市
- 中濱久喜 2010b『丁・山 1 号墳』『姫路市史』7下、姫路市
- 中濱久喜 2010c『丁・山頂古墳』『姫路市史』7下、姫路市
- 中濱久喜 2010d『丁・古墳群』『姫路市史』7下、姫路市
- 中溝康則 1989『川島川床遺跡 4』『太子町史』3、太子町
- 成瀬敏郎 1998『海岸地形』『姫路市史』7上、姫路市
- 榎本誠一編 1971『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会
- 姫路市埋蔵文化財センター 2015『TSUBOHORI 2015 姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会
- 姫路市埋蔵文化財センター 2020『姫路市埋蔵文化財調査年報 2020』
- 姫路市埋蔵文化財センター 2021『姫路市埋蔵文化財調査年報 2021』
- 東郷松郎 1973『鎌倉時代における神護寺領福井荘の荘域について』『人文論集』9・1・2、神戸商科大学学術研究会
- 深井明比古・岡崎正雄 1985『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書 30、兵庫県教育委員会
- 福井 優 2021『関ノ口遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 110、姫路市教育委員会
- 福井 優編 2013『和久遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 10、姫路市教育委員会
- 松本正信 1989a『縄文時代の太子町』『太子町史』3、太子町
- 松本正信 1989b『前方後円墳時代の太子町』『太子町史』3、太子町
- 松本正信 2010a『機特山遺跡』『姫路市史』7下、姫路市
- 松本正信 2010b『瓢塚古墳』『姫路市史』7下、姫路市
- 松本正信 2010c『山戸 4 号墳』『姫路市史』7下、姫路市
- 松本正信 2010d『機特山古墳群』『姫路市史』7下、姫路市

- 南 憲和・三好愛美編 2022『姫路市埋蔵文化財調査年報2022』姫路市埋蔵文化財センター
- 三村修次・海野浩幸 1993『立岡東道跡の調査』太子町文化財資料37、太子町教育委員会
- 三村修次・海野浩幸 1995『常全日蓮寺道跡の調査』太子町文化財資料51、太子町教育委員会
- 三村修次・海野浩幸 1998『船塚道跡の調査』太子町文化財資料52、太子町教育委員会
- 三村修次・海野浩幸 2010『平成17・18・19・20年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料76、太子町教育委員会
- 山下大輝・福井 優 2020『和久道跡』姫路市埋蔵文化財センター報告書91、姫路市教育委員会
- 渡辺 昇編 2011『沖代道跡』兵庫県文化財調査報告391、兵庫県教育委員会

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

第7次調査区は関ノ口遺跡の北端部に位置する（第2図）。東西壁は概ね正方位となっており、東西幅は約16.5mである。北壁も東半では概ね正方位であるが、西部で屈曲して北に広がる。南壁は北西-南東方向に傾斜する。西壁の長さが約21.6m、東壁の長さが約20.4mである。調査区の面積は327㎡である。調査区西端については、北端で約0.8m、南端で約1.1mが既調査の第3次1区と重複する。



第2図 調査区配置図

電子地形図 25000（国土地理院）に加筆して作成。調査区は福井 2022 による。

発掘作業は、盛土・現代の水田土の耕作土などを重機によって除去した後、以下の堆積土を人力により掘削し、精査によって遺構検出を行うという順序で実施した。第1～4面を遺構検出面として設定して順に調査した。検出した遺構・遺物については、全景写真、個別写真、平面図、断面図などで記録した。図化の記録にあたっては、電子平板、写真図化を使用して、記録精度の向上に努めた。このほか、株式会社かんこう神戸支店に委託して、無人航空機による空中写真撮影および空中写真測量を2度実施した。第1回は令和元(2019)年12月24日に第1面を、第2回は令和2(2020)年1月22日に第2面を対象に行った。

第2節 層序(写真図版3～5)

調査区の層序は、現地表面から約0.8mの厚さで宅地造成に伴う盛土(第3～5図1)が存在し、その下に耕作土(第3～5図2)と床土(第3・4図3・4、第5図3)が残されていた。

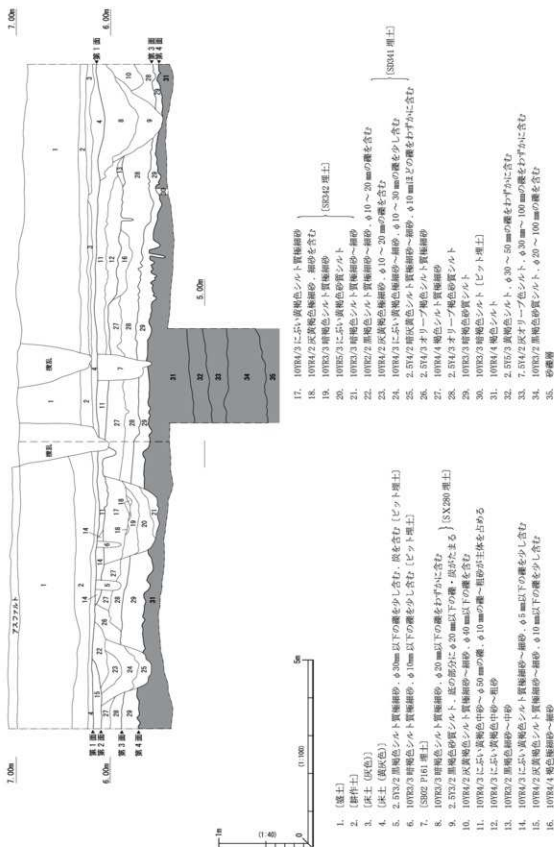
調査区の大部分では、これら現代の地層の直下が第1面の検出面であり、南東部の一部分のみに包含層(第4図5、第5図4)が残されていた。第1面の検出面は、調査区北部中央では砂礫層(第3図11)、それ以外は土壌化したシルト質極細砂層(第3図14・15、第4図20・21、第5図20)が基盤となる。第1面の標高はほぼ6.10m前後にまとも平坦である。古墳時代～中世の遺構を検出した。

第2面は第1面の基盤となる砂礫層(第3図11)と土壌層(第3図14・15、第4図20・21、第5図20)、および砂礫層(第3図11)下の土壌化した砂層(第3図12・13)を取り除いた面を検出面とした。標高は5.90～6.00m前後で東側がわずかに低い。基盤となる褐色・にぶい黄褐色・オリーブ褐色の細砂～砂質シルトの地層(第3図16・27・28、第4図35・36、第5図24・26)は複数回の堆積により形成されている。弥生時代中期後葉の遺構を検出した。なお、第2面の遺構には上面が削平されたと考えられるものがあることと、第1面の遺構に多数の弥生土器が含まれていたことから、第2面の上面は1度以上の削平を受けたと考えられる。また、第2面から掘りこまれた流路(SR342・389・390)が存在するが、埋土が第2面の基盤と同質で検出が困難であったことから、第3面で平面を捉えた。

第2面の基盤を含む、複数回の堆積で形成された約0.2～0.3mの厚さの地層を除去した面を第3面とした。第3面の基盤は土器の細片をごくわずかに含む土壌層(第3図29、第4図40、第5図27)で、東に向けて下がる。弥生時代中期後葉の遺構(SX388)と、第2面から掘りこまれた流路(SR342・389・390)を検出した。

第3面の基盤の土壌層(第3図29、第4図40、第5図27)を取り除いた面が第4面の検出面である。標高は5.50～5.70m前後で東に向けて下がる。基盤は褐色シルトの地山(第3図31、第4図41、第5図30)である。弥生時代中期後葉をさかのぼると考えられる遺構を検出された。

調査の最終段階で、調査区の一部を断ち割って地層を確認した。南壁中央付近では褐色シルト層(第5図30)の下層にはφ30～100mmの礫を主体とする礫砂層(第5図32)が広がることを確認した。一方、調査区の南東隅では褐色シルト層(第4図41、第5図30)の下層には、還元色を呈し地下水が滲み出すシルト層～砂礫層(第4図42～45、第5図33～36)が堆積しており、深くなるにつれて礫の粒径が大きくなる。



第3図 北壁土層断面図



第4図 東壁土層断面図

1. 第3図 1
2. 第3図 2
3. 第3図 3
4. 第3図 4
5. 2.573/2 黒褐色シルト質極細砂
6. 第3図 8
7. 第3図 10
8. 10782/2 黒褐色シルト質極細砂。炭を含む〔ピット埋土〕
9. 10782/2 黒褐色シルト質極細砂。φ10mm以下の礫を少し含む〔ピット埋土〕
10. 10784/2 灰黄褐色シルト質極細砂。炭を含む
11. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂。炭を含む〔ピット埋土〕
12. 2.575/2 暗灰黄色シルト。わずかに木質残存
13. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂。炭を含む〔ピット埋土〕
14. 10782/2 黒褐色シルト質極細砂。炭を含む〔ピット埋土〕
15. 10782/3 暗褐色シルト質極細砂。φ10mm以下の礫をわずかに含む〔ピット埋土〕
16. 10782/1 黒褐色シルト質極細砂。炭を含む〔ピット埋土〕
17. 10782/2 黒褐色シルト質極細砂〔ピット埋土〕
18. 10782/2 黒褐色シルト質極細砂〔ピット埋土〕
19. 10782/3 暗褐色シルト質極細砂〔ピット埋土〕
20. 2.575/3 暗オリーブ褐色シルト質極細砂
21. 10782/3 暗褐色シルト質極細砂
22. 10784/3 灰黄褐色シルト質極細砂〔ピット埋土〕
23. 2.574/3 オリーブ褐色極細砂
24. 10784/4 褐色極細砂。部分的に中砂～極細砂が層状に入る
25. 2.5782/4 暗褐色砂。φ10～50mmの礫～極細砂が主体
26. 10784/2 灰黄褐色シルト質極細砂。炭を含む。部分的に10の中砂～粗砂や暗褐色砂質シルトを含む
27. 10782/3 黒褐色シルト。部分的に40のシルト質極細砂～細砂を含む
28. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂。φ30mm以下の礫と細砂～中砂が主体〔黒埋土〕
29. 10784/2 灰黄褐色シルト質極細砂～細砂。炭を含む〔SE290埋土〕
30. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂～細砂
31. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂
32. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂
33. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂
34. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂。炭を含む
35. 第3図 28
36. 10784/4 褐色シルト質極細砂～細砂。部分的に中砂を含む。還元色強い
37. 10784/2 灰黄褐色シルト質極細砂。炭を含む
38. 10784/3 について黄褐色シルト質極細砂～細砂
39. 10784/4 褐色シルト質極細砂
40. 第3図 29
41. 第3図 31
42. 10784/3 について黄褐色シルト。φ30～50mmの礫をわずかに含む
43. 10784/4 褐色シルト質極細砂。φ30～50mmの礫を少し含む
44. 2.574/3 オリーブ褐色極細砂～粗砂。φ30～100mmの礫を含む
45. 砂礫層。574/2 灰オリーブ色中砂～。砂が主体

先述の礫砂層（第5図32）は調査区の東部で大きく落ち込むものと考えられる。北壁中央付近では褐色シルト層（第3図31）の下層に、還元色を呈するシルト層（第3図33）、黒褐色で礫を多く含む層（第3図34）、砂礫層（第3図35）が堆積することが確認された。なお、いずれの地層にも遺構・遺物は認められなかった。

第3節 遺構

遺構は、弥生時代中期後葉以前、弥生時代中期後葉、古墳時代、中世に分けて記載した。

各遺構検出面の遺構の配置状況を示した図（図版1・3・4・8）は、遺構掘削が進んだ段階の状況を図化したものであり、遺構の切り合いの表現が遺構構築の前後関係を示すものではない。遺構の切り合いによる前後関係について重要なものは本文で記載する。

個別の遺構番号は遺構の種類にかかわらず通しとなっており、1～290（欠番58・92）が第1面、291～341・343～387（欠番319・320・328）が第2面、342・388～390が第3面、391～467が第4面で検出された遺構である。なお、竪穴建物（SH）、掘立柱建物（SB）、溝（SA）については独自に番号を付けている。

1. 弥生時代中期後葉以前の遺構

第4面（図版1、写真図版6）で検出した遺構である。遺構からの出土遺物はなく、また、第3面より下位の地層に時期が特定できる遺物がなかったため、弥生時代中期後半以前の遺構であることしか分らない。この発掘調査では、弥生時代中期後葉をさかのぼる遺物として、弥生時代中期前葉の土器（1～3）が出土しているが、第4面の遺構がこの時期に該当するかは定かではない。第4面の上位に堆積していた土壌（第3図29）の放射性炭素年代測定を行ったところ、紀元前8世紀前葉～紀元前5世紀前葉の年代が得られた。この年代に従えば、第4面の遺構は弥生時代前期以前ということになる。

第4面の標高は5.50～5.70m前後で東に向けて下がる。第3面で検出された流路（SR342・389・390）の深さは第4面までおよんでおり、それにより一部の遺構は失われたものと考えられる。図版1の等高線は、流路（SR342・389・390）により失われている部分を破線とした。

第4面では溝・土坑・ピットを検出した。いずれも特定の範囲に集中せず、調査区全体にまんべんなく分布する。検出されたピットの中には、埋土の状況から、上層から掘り込まれた可能性があるものが含まれていたため、図版1で網掛けで示した。

（1）溝（図版2、写真図版6）

SD415 調査区の東部中央に位置する。北東から南東の方向に幅0.18mで0.75m延び、南西端で北方向に屈曲し幅が狭くなり、P459に切られる。検出面からの深さ0.04m。南西隅は第1面の遺構に切られる。

(2) 土坑(図版2、写真図版6)

SK465 調査区の北部中央に位置する。1.00m × 0.59m。南半が広がる。検出面からの深さ 0.05m。

SK440 調査区の南東部に位置する。0.65m × 0.60m で円形に近い。検出面からの深さ 0.08m。東部を第1面の遺構に切られる。

(3) ピット

P446(図版2、写真図版6) 調査区の北西部に位置する。0.22m × 0.18m で楕円形。検出面からの深さ 0.19m。

P448(図版2、写真図版7) 調査区の北部中央に位置する。0.22m × 0.19m で楕円形。直径 0.05m の柱痕あり。検出面からの深さ 0.19m。

P411(図版2、写真図版7) 調査区の中央部に位置する。0.20m × 0.18m で円形に近い。検出面からの深さ 0.17m。

P433(図版2、写真図版7) 調査区の中央部に位置する。直径 0.22m。東半を P432 に切られる。

P432(図版2、写真図版7) 調査区の中央部に位置する。0.24m × 0.19m で楕円形。検出面からの深さ 0.18m。P433の埋没後に形成される。

P412(図版2、写真図版7) 調査区の中央部に位置する。0.30m × 0.25m で楕円形。直径 0.14m の柱痕あり。検出面からの深さ 0.26m。

P459(図版2、写真図版7) 調査区の東部中央に位置する。0.46m × 0.34m で楕円形。検出面からの深さ 0.11m。

P414(図版2、写真図版7) 調査区の東部中央に位置する。0.25m × 0.18m で楕円形。検出面からの深さ 0.48m。他のピットと比べて深い。

P426(図版2、写真図版7) 調査区の南西部に位置する。直径 0.32m。検出面からの深さ 0.15m。西半は第2面の断ち割りで失われていた。

P466(図版2、写真図版7) 調査区の南東部に位置する。0.18m × 0.15m。検出面からの深さ 0.25m。東部を第3面の SR389 に切られる。

P442(図版2、写真図版8) 調査区の南東部に位置する。0.25m × 0.23m で円形に近い。検出面からの深さ 0.14m。

P401(図版2、写真図版8) 調査区の南部中央に位置する。0.21m × 0.20m で円形に近い。直径 0.11m の柱痕あり。検出面からの深さ 0.12m。

P397(図版2、写真図版8) 調査区の南東部に位置する。0.21m × 0.19m で円形に近い。検出面からの深さ 0.16m。

2. 弥生時代中期後葉の遺構

第3面(図版3)と第2面(図版4、写真図版10)で検出した遺構である。第3面で検出したSX388と第2面で検出した遺構の両方で弥生時代中期後葉の遺物が出土したことから、第3面と第2面の遺構はともに弥生時代中期後葉の中で形成されたと分かる。

第3面を検出面とした流路(SR342・389・390)は、第2面から掘り込まれた遺構であったが、その埋土が第2面の基盤と同質であったことから第3面で検出を行った。第2面の遺構の中には、流路(SR342・389・390)の埋没後にその埋土上に形成された遺構もあることから、弥生時代中期後葉の遺構と地層は以下の順序で形成されたと考えられる。

①土壌層(第3図29、第4図40、第5図27)の上面に不明遺構(SX388)が形成される。

②複数回の堆積で第2面の基盤を含む地層が堆積する。

③流路(SR342・389・390)が形成される。

④流路(SR342・389・390)が埋没する。

⑤流路(SR342・389・390)の埋土上の遺構が形成される。

なお、流路(SR342・389・390)と切り合い関係を持たない第2面の遺構については、上記の③～⑤のいずれかの段階に形成されたとする。

第3面では不明遺構(SX388)1基と流路(SR342・389・390)を検出した(図版3)。

第2面では調査区の南寄り中央で竪穴建物(SH1)1基を検出した。そのほかに溝、土坑、ピットを検出した。遺構は調査区全体に分布するが、南半に多い。基盤の標高は5.90～6.00m前後で東側がわずかに低い(図版4)。

(1) 不明遺構(図版3、写真図版8・9)

SX388 第3面上で形成された唯一の遺構である。調査区の東部中央に位置する。概ね楕円形で長軸の長さは3.52mである。上部に10～20mm程度の厚さの焼土・土器混じりの埋土があり、その下部に5～10mm程度の厚さで炭が堆積していた。図版3の網掛けが炭の分布範囲である。埋土から壺の口縁部(33)が出土した。

出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、紀元前2世紀前葉～紀元後1世紀前葉、中央値で紀元前1世紀前葉の年代が得られた。弥生時代中期後葉頃の年代となっており、出土した土器と整合的である。

(2) 流路

調査区の北西部でSR342、南東半でSR389とSR390が一体となった流路を検出した。これらの流路は第2面から掘り込まれた遺構であったが、その埋土が第2面の基盤と同質であったことから、第3面で検出を行った。

SR342（図版3、写真図版9） 傾斜は極めて緩やかだが、調査区北東部を南西から北東に流れていたと考えられる。第3面で検出したため、平面図では幅が狭くなっているが、北壁土層断面（第3図、写真図版8）の部分では、幅2.32m、深さ0.58mである。

SR389・390（図版3・6、写真図版8） 調査区の南東半に位置する。傾斜は極めて緩やかだが、東壁と南壁から流れる3つの流路が調査区中央付近で合流し、調査区南西隅へと流れる平面形となる。北東から流れる流路をSR390、それ以外をSR389として調査した。土層（図版6、写真図版9）からは、SR390（4～6層）が埋没してから、SR389の東から流れる流路（1～3層）が生じていることが分かり、分岐した流路は同時に存在したのではなく、埋没と流路の変更が繰り返された結果として、この形になったことが分かる。第3面で検出したため、平面図では幅が狭くなっているが、東壁土層断面（第4図、写真図版8）の部分では、SR389は幅2.50m、深さ0.50m、SR390は深くなる部分で、幅3.00m、深さ0.70mとなる。SR389の埋土から甕の底部（53）が出土した。

（3）堅穴建物（図版5、写真図版11・12）

SH1 この発掘調査で確認された堅穴建物の可能性がある遺構はこの1基のみである。埋土に炭と焼土を含む土坑（SK372）を中央に、その周囲をめぐる6基の柱穴を主柱穴と考え、SH1とした。建物の規模に対して、柱穴が浅いものが多いが、外壁の立ち上がりに加えて、本来あったことが予想される周壁溝なども残されていないことを考えれば、強く削平を受けたと考えられる。最も距離が離れたP327とP353の距離が7.10mであることから、それを上回る直径の堅穴建物だったことになる。

中央炉と考えられるSK372は残存最大長1.38mである。第1面の遺構に切られ、部分的に失われている。検出面からの深さは0.12mである。埋土中には焼土・炭を少し含む。中央最下部で160×130×80mm程度の角礫が1点出土した。

6基の柱穴はいずれも円形～楕円形で柱痕をもつ。P346はほかのものと比べて深く、検出面からの深さは0.62mである。上面で甕（6・7）がまとも出土した。P353では壺（4・5）が出土した。P379はSK308の下で検出された。

P379の柱痕で出土した柱材の放射性炭素年代測定を行ったところ10世紀後葉頃の年代が得られた。弥生時代の柱穴であったとすると、木材が混ざり込んだか、汚染を受けていたと解釈することになるが、SK308とP379が第1面で検出することができなかったより後の時代の遺構であった可能性もあるだろう。そう考えた場合、P379の付近にSH1に伴う柱穴があったが、後世のSK308とP379の掘削によって失われたと考えられることもできる。ただし、柱材は樹種同定によるとトネリコ属とされており、この調査で出土した後の時代の柱材がいずれも針葉樹であるのとは異なる傾向を示す。

（4）溝（図版6）

SD377（写真図版13） 調査区の南東部に位置し、南北方向に延びる。幅1.56m程度、長さ7.36mで、検出

面からの深さは0.10mである。SK310などのいくつかの遺構に切られる。埋土から壺（8・9）、甕（10）、高坏（11）、イイダコ壺（12）が出土した。

SD369 調査区の南東部、SD377の南に位置し、南側は調査区外に続く。幅1.20m程度で、検出面からの深さは0.16mである。

SD352 調査区の南西部に位置し、概ね東西方向に延びる。長さ1.63m、幅0.50m程度で、西側で狭くなる。検出面からの深さは0.06mである。

（5）土坑

SK308（図版7、写真図版13） 調査区の中央部に位置する。1.44m × 1.36mで円形に近い。深さ0.14m。SK308の下でSH1P379（図版5）が検出されたことから、SH1P379の埋没後に形成されたことが分かる。埋土から壺の底部（47）が出土した。なお、SH1P379出土の柱材の放射性炭素年代測定が10世紀後葉頃となっており、弥生時代のものとする、木材が混ざり込んだが、汚染を受けていたと解釈することになる。あるいは、SH1P379とSK308が第1面で検出することができなかった後世の遺構である可能性もあるだろう。

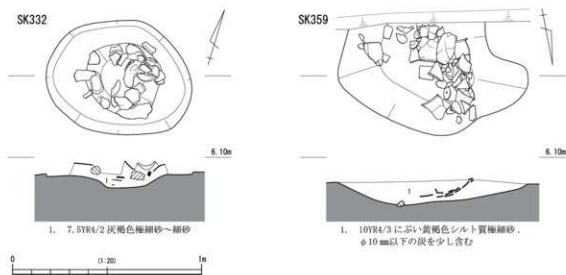
SK321（図版7、写真図版13） 調査区の南東部に位置する。0.68m × 0.54mで楕円形。深さ0.21m。第1面の遺構に南西部を切られる。埋土から高坏の脚部（67）が出土した。

SK310（図版7） 調査区の東部中央に位置する。0.64m × 0.32mで東西に長く、西側が狭くなる。検出面からの深さ0.20m。SD377を切る。

SK346（図版7） 調査区の西部中央に位置する。0.86m × 0.54mで楕円形。深さ0.16m。

SK358（図版7、写真図版13） 調査区の南西部に位置する。長さ2.46m以上、幅0.90m程度で、北西から南東方向に長い。南東端などを第1面の遺構に切られる。深さ0.41m。埋土から高坏（72）が出土した。

SK332（第6図、写真図版11・13） 調査区の南部中央に位置する。0.77m × 0.62mで楕円形。もともとは0.14m



第6図 第2面 SK332・SK359

以上の深さがあったと考えられる。埋土から礫と甕(13・14)、高坏(15・16)がまとまって出土した。SK359(第6図、写真図版11・13) 調査区の南西部に位置する。調査区内の最大長は1.00mで、南側が南壁側に延びる。平面形は不整形である。深さ0.12m。埋土から甕(17～20)と把手付鉢の脚部(21)がまとまって出土した。

(6) ピット

P356(図版4、写真図版13) 調査区の南東部に位置する。0.50m×0.45mで楕円形。柱痕をもつ。埋土から鉢(22)と甕(23)が出土した。

3. 古墳時代の掘立柱建物

第1面では古墳時代～中世の遺構を検出した(図版8、写真図版14)。第1面は、調査区北部中央では砂礫層(第3図11)、それ以外は土壌化したシルト質極細砂層(第3図14・15、第4図20・21、第5図20)の上面を検出面とした。標高はほぼ6.10m前後にまとまり平坦である。なお、第1面で検出した遺構には多くの弥生時代中期後葉の土器が含まれており、中世の土坑のなかには、弥生土器を集積したものもあった。これは第2面の遺構面の上面が削平を受け、それに伴い、弥生土器が第1面の遺構が形成された時代に表出していたことによると考えられる。

第1面で検出した遺構のうち、SB1・2は出土遺物から古墳時代後期後半のものと考えられる。両者とも重複する遺構のいずれにも切られており、第1面の中で古い遺構であることが分かる。

SB1が調査区の南西部で、SB2が北部中央で検出されており、いずれも調査区外に延びる。SB1はN-14°E、SB2はN-23°Eとなり(図版9)、若干方位を異にするが、概ね日吉山と直交する向きとなり、周辺の発掘調査で確認されている古墳時代後期後半の掘立柱建物などの遺構の方位と整合的である。中世の掘立柱建物と比べて、両者とも柱穴が極めて大きい。

SB1(図版10・11、写真図版15～18) 2間×3間の備柱の身舎の周囲に、3間×3間と考えられる外周柱がめぐる四面周建物である。なお、P0は平成29(2017)年度に姫路市が実施した第3次1区の発掘調査の範囲内にある。調査時にはSB1に伴う可能性があると考えたが、既に掘削された範囲内で確認したものであり、外周柱の西列の柱穴の配置については、第3次1区の調査成果によって確認される必要がある。

身舎は、東西5.05m、南北4.30mであり、南北列の柱間は1.70m、東西列の柱間は2.15mとなる。柱穴の平面形は、南半のものが正方形に近く、1辺が1.10m程度となる大きいものが多いのに対して、北半のものは丸みが強く、平面が0.90～0.80m程度の比較的小さいものが多い。正方形に近い平面形の柱穴のうちP2とP3などは建物の軸と向きがややずれる。柱穴の底部は標高5.10～5.30m程度にまとまるが、P238は標高5.50mと浅い。ほとんどの柱穴はシルト層下の礫砂層(第5図32)の上面まで掘り込まれていた。直径0.27～0.30m程度の柱痕をもつものが多い。

外周柱は、東西7.1m、南北6.5mである。南北列の柱間は中央が2.50m程度、両脇が2.30m程度となり

中央がやや広い。東列の柱間は2.15mとなる。身舎との距離は東と西が1.0m程度、南と北が1.1m程度離れる。柱穴の平面形は0.90～0.60m程度となり、身舎の柱穴と比べると小さい。柱穴の底部は、四隅は標高5.20～5.30m程度で、身舎と同じく礫砂層（第5図32）の上面まで掘り込んでいるのに対して、間の柱穴は標高5.30～5.60m程度と比較的浅いものが多い。柱痕は直径0.15～0.30m程度で、身舎よりばらつきが大きい。

柱穴の埋土から須恵器（83～87）が出土した。また、弥生土器（19・21・24・50・54・57・59・70）出土した。これとは別にP82の段下げ作業中に中世の須恵器の甕の底部（236）が出土しているが、後世の遺物が混ざり込んだものと判断した。

P223の柱痕で出土した柱材の放射性炭素年代測定を行ったところ、6世紀中葉～7世紀中葉、中央値で6世紀後葉の年代が得られた。古墳時代後期後半頃の年代となっており、出土した土器と整合的である。柱材は樹種同定でヒノキとされる。

SB2（図版12、写真図版19・20）東西3間、南北3間以上の欄柱の建物である。東西4.10mで柱間は1.35m、東西列の柱間は1.40mとなる。柱穴の平面形は方形に近いものから円形に近いものまで多様で、0.85～0.60m程度の大きさである。柱穴の底部は標高5.35～5.90mとばらつきが大きい。直径0.33～0.18m程度の柱痕が認められた。

P161とP167の底部からは礎盤石と考えられる石材が出土した。P161では250×230×100mm程度の亜角礫1つであったのに対して、P167では330×280×180mm程度の亜角礫を中心に複数の亜角礫が出土した。

柱穴の埋土から須恵器（88・89）と唐居敷（S4）が出土した。唐居敷はP163の柱痕から出土しており、もともとSB2で使用されていたものが、SB2の廃絶に伴い、柱を抜き取った跡に廃棄された可能性がある。また、弥生土器（3・34）が出土した。

4. 中世の遺構

第1面で検出した遺構のうち、前項で述べた古墳時代の掘立柱建物以外をここに記載する。中世以外の遺構が含まれる可能性もあるが、弥生時代中期後葉より後の時代の出土遺物は、ほとんどが中世のものであることから、第1面で検出した遺構の多くは中世のものである可能性が高いと考えられる。なお、これらの遺構について、出土遺物から時期差を見出すことはできなかった。

主要な遺構について、以下の5つの群として捉えて遺跡の変遷を検討する。

1群：掘立柱建物（SB3）とそれに伴う可能性がある溝（SD213）。方位はN-12°-W。

2群：重なり合う溝（SD46・279・45）とそれに関わる水溜めの可能性がある不明遺構（SX280）。切り合いから、SD46、SD279、SD45の順に形成されたことが分かる。

3群：3つの欄（SA1・2・3）。同時期と考える根拠は薄いですが、方位が、南北を基準とするとN-5°～8°-Wにまとまることから1つの群とみなした。

4群：勸溝。方位は概ね正方位。

5群：2棟の掘立柱建物（SB4・5）。方位はN-1～3°Wで概ね正方位。

1群と2群の関係については、1群のSD213が2群のSD279に切られることから、2群が新しい。ただし、SD213と2群のSD46の前後関係は不明である。2群と3群の関係については、2群のSD279とSX280の埋没後に3群のSA1が形成されており、3群が新しい。ただし、2群のSD45と3群のSA1は併存した可能性がある。1群と4群の関係については、1群のSB3の柱穴を4群の勸溝が切っており、4群が新しい。4群と5群の関係は、複数の箇所でも4群の勸溝を5群の柱穴が切っており、5群が新しい。以上から、1群→2群→3群と1群→4群→5群の概ねの推移が確認される。

後述のとおり、一定数の土器が出土しているのは2・4・5群で、その年代は11世紀後半～12世紀前半と推定される。1群については、出土遺物が乏しい中で、中世の遺構と判断したが、古代以前までさかのぼる可能性もある。

以下では、まず、1～5群の順に、次いでその他の遺構について述べる。

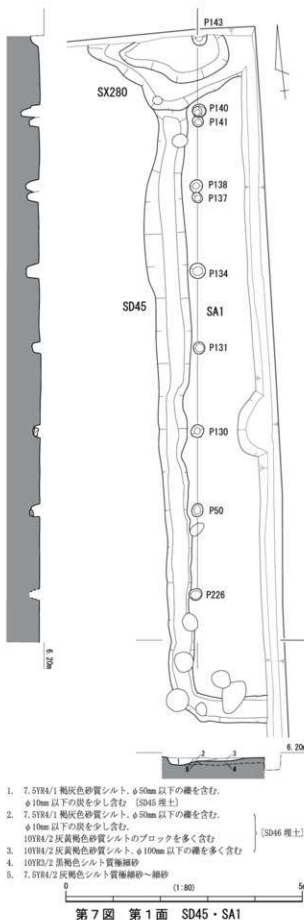
（1）1群（図版11・13、写真図版21・22）

掘立柱建物（SB3）とそれに伴う可能性がある溝（SD213）である。

SB3 調査区の中央に位置する。6間×1間で、東西は10.90mで柱間は1.80m、西辺は3.75m、東辺は4.20mとなる。北の柱列のP337は第1面ではなく、第2面で検出された遺構であるが、検出された位置と、柱穴底部に柱を支えるためと考えられる根石が出土した（写真図版13）ことから、第1面で検出し損ねたSB3に伴う柱穴の可能性が高いと判断した。

方位はN-12°Eである。柱穴の平面形は円形のものに加え、不整形のものもあり、0.55～0.35m程度の大きさで、古墳時代のSB1・2と比べると小さい。柱穴の底部はほとんどのものが標高5.70～5.75mにまとまる。直径0.24～0.15m程度の柱痕が認められた。礎盤石と考えられる角礫が、P146で1点、P152で3点出土した。P129の埋土から須恵器碗の口縁部（233）が出土した。ただし、時期を検討しうる遺物はこの1点だけであり、混入などの可能性を考慮すると、SB3が古代以前にさかのぼる可能性もある。

SD213 SB3の北辺に約0.8m離れて沿う、長さ12.80m以上、幅約0.35m、検出面からの深さ0.10m程度の溝である。この溝の埋土は、4群の勸溝との違いが明瞭ではないが、SB3の北壁に沿うことから、雨落溝の可能性があると考え、ここに掲載した。2群のSD279に切られる。遺物は出土していない。



(2) 2群

調査区の東部で検出した3条の重複する溝(SD46・279・45)とそれに関連する水溜めなどの可能性がある不明遺構(SX280)である。溝は切り合いから、SD46、SD279、SD45の順に構築されたことが分かるが、出土遺物に時間的な差は見出せない。

SD46(図版8) 南北方向に延び、北端はSD279に切られる。長さ10.80mが残存し、幅は1.30m程度である。検出面からの深さは0.10m程度(第7図の断面図)で、平面の規模に対して極めて浅い。埋土から土師器小皿(92)・碗(93・94)・托状皿(95・96)、須恵器碗(97～104)・鉢(105)・壺(106・107)・甕(108)、白磁碗(109)が出土した。また、古墳時代の須恵器(90)が出土した。

SD279(図版14、写真図版23・24) 南北方向に延び、北端はSX280と接する。SX280とSD279は複数回の掘り直しが行われながら存続したと考えられ、両者の境界は明瞭ではない。SD279の幅は2.20m程度で、調査区北端までの長さは7.60mである。

土層の状況から分かる堆積の過程は以下のとおりである。ただし、②と③の前後関係は不明である。

①SD279の下部の、比較的狭い幅1.1m程度の溝の掘削と埋没(5・6・12・13層)。この時点ではSX280は無かった可能性がある。

②SX280下部の掘削と埋没(2層)。

③SD279をより幅広い溝として掘り直し、埋没(3・4層)。

④SD279とSX280の境界部に貼り土(1層)を行い、その上に拳大から人頭大の礫を集積し

て護岸する。1層の範囲は南北1.5m程度、東西1.1m程度にとどまる。SD279南東端の傾斜部にも同様に準大から人頭大の礫を集積して護岸する。その後10・11層が埋没する。

埋土から土師器小皿(110～119)・坏(120～125)・碗(126・127)・托状皿(128)・甕(129)・火鉢(130)・高坏(131)、須恵器碗(132～150)・壺(151・152)・甕(153～155)・風字硯(156)、瓦器碗(157・158)、白磁碗(159・160)・皿(161)・円盤(162)が出土した。土師器高坏(131)は南東端に集積された礫中で出土した。また、弥生土器(79・82)と古墳時代の須恵器(91)が出土した。

SD45(第7図、写真図版23・24) N-5-Eで概ね南北方向に延び、北端はSX280と接する。SX280との前後関係は不明であり、併存した可能性もある。幅0.60～0.80m程度で、SX280との境界から南に12.70m延び、概ね直角に東に屈曲する。近年の隣接する範囲の調査では、真東に向かって長く延びる状況が確認されている。検出面からの深さは0.15m程度である。概ね方位を同じくするSD46とSD279の埋没後にその上に形成されており、これらの溝に変わるものとして掘削されたものと考えられる。3群のSA1はこの溝に沿う溝である可能性があるが、関係は明らかでない。埋土から土師器小皿(163～169)・坏(170～173)・碗(174)・托状皿(175・176)・甕(177)、須恵器碗(178～182)・鉢(183)・甕(184)、白磁碗(185)・皿(186・187)が出土した。また、須恵器鉢(105)の一部が出土したが、これは先に埋没していたSD46に含まれていたものが混ざり込んだものと考えられる。

SX280(図版14、写真図版23・24) 調査区北東端に位置し、調査区外に延びるため全体形は不明であるが、SD279と関係しつつ形成されていることから、水溜めなどであったと考えられる。遺構の形成過程はSD279の部分で記述したが、SD279の埋没後も存続し、SD45とも併存した可能性がある。埋土から須恵器碗(188)、瓦器碗(189)、白磁皿(190)が出土した。また、弥生土器(1)が出土した。遺物は全て図版14の1層よりも上位で出土している。

(3) 3群

3基の溝(SA1・2・3)である。実際には同時期のものであるかは不確かであるが、方位は南北を基準とするN5～8°Wにまとまることから1つの群とした。

SA1(第7図、写真図版23) 調査区の東部に位置する。方位はN-6-Eで、調査区内では8基の柱穴が認められ、北側は調査区外に延びる。北端の柱穴(P143)から南端の柱穴(P226)までは11.80mで、柱間は1.70mとなる。柱穴の平面形は円形で、0.35～0.25m程度と小さい。北から2・3基目の柱穴(P140・P141とP138・P137)は2基が切り合っており、建て替えられた可能性がある。柱穴の底部は概ね標高5.85～6.00m程度となる。P130とP50の底部からは礎盤石と考えられる石材が出土した。

SA1はSD45と隣接して平行しており、両者は併存した可能性がある。なお、北端のP143はSX280の埋没後に形成されている。

SA2(図版9) 調査区の中央部に位置する。方位はN-82°Wで、4間で5.80m、柱間は1.45mである。柱穴の平面形は概ね円形で、0.30～0.20m程度と極めて小さい。

SB3とは重複しており、時間を違えて存在したと考えられる。

時期を示す遺物の出土はなかったが、P59の埋土から弥生土器(11)が出土した。

SA3(図版9) 調査区の南部に位置する。方位はN-85°-Wで、3間で6.00m、柱間は2.00mである。柱穴の平面形は不整形な円形で、いずれも柱痕をもつ。

整理作業の中で認識した遺構のため、P16(図版17)のみ断面図を作成している。P16はSB1P17を切っている。直径0.37m程度で円形に近い。直径0.18m程度の柱痕をもち、柱痕の中は一部が空洞となり、その下端部にはカヤの柱材が残存していた。P16は検出面から0.48mの深さで、SA1・2の浅い柱穴とは異質である。

SA3はさらに西に位置するSB4P119とSB4P10に続く可能性があるが、SB4P119がP16と比べると極めて浅いことから、SA3に伴うものではないと判断した。

(4) 4群(図版15、写真図版25)

そのほとんどが正方位に軸をもつ掘溝である。幅は0.5～0.2m程度で、検出面からの深さはほとんどが0.1m以下である。南北方向の掘溝は比較的長いものが多いが、数は少ない。東西方向の掘溝については、調査区南半では2.2m程度の間隔となるところが多い。調査区北東部のSD272のみN-42°-Wで、その他と方位が異なり、SD273を切っている。

時期を示す土器として、SD85で土師器小皿(208)・碗(216)、須恵器鉢(235)が、SD273で土師器托状皿(218)が出土している。また、弥生土器はSD64で壺(36)、SD93で鉢(62)、SD81で蓋(78)が出土している。

(5) 5群

概ね正方位に軸をもつ掘立柱建物(SB4・5)である。4群の掘溝の埋没後に形成されている。なお、調査区の西部中央に位置するP123(図版8)は、4群のSD117を切っており、5群に近い時期の遺構の可能性がある。埋土から須恵器碗(230)が出土している。

SB4(図版16、写真図版25) 調査区の南東部に位置する。南北4間、東西3間の総柱で、方位はN-1°-Eでほぼ正方位である。建物の規模は南北9.6m、東西6.8mで、柱間は南北が2.4m、東西は東端が2.4m、西側の2間が各2.2mとなる。柱穴の平面形は円形のものが主で、0.45～0.30m程度の大きさであるが、東端の柱列は0.30～0.20mの小さいものが多い。柱穴の底部は標高5.45～5.75m程度でばらつきが大きく、東端の柱列には標高5.80m程度の浅いものも認められる。いずれの柱穴にも直径0.20～0.15m程度の柱痕が認められる。

北東部の南北3間、東西2間には2つの柱穴が重複することから建て替えを行った可能性がある。そうすると、もともと東部の南北3間、東西2間であった建物を、改築時に南北4間、東西3間に増築し、その際に東端の柱間のみを2.40mにしたと考えることができる。

時期を示す土器として、P15で土師器杯(214)、P77で瓦器碗(189)と須恵器碗(223)、P77とP108で

瓦器碗(237)、P96で土師器小皿(204)、P106で土師器小皿(199)、P128で土師器小皿(202)、P194で須恵器碗(227)が出土している。また、P214で弥生土器(73)が出土している。

P71の柱痕で出土した柱材の放射性炭素年代測定を行ったところ、8世紀後半～10世紀前葉の年代が得られた。11世紀後半～12世紀前半と考えられる出土遺物の年代と比べて古い値となっている。古材が転用された可能性もあるかもしれない。

SB5(図版17) 調査区北西部に位置し、北壁に及ぶ。東西2間、南北2間以上の欄柱で、方位はN-3°Eである。建物の規模は東西4.30m、柱間は東西が2.15m、南北が2.45mとなる。柱穴の平面形は円形から楕円形で、0.45～0.30m程度である。柱穴の底部は標高5.60～5.75m程度で、いずれの柱穴にも直径0.20～0.15m程度の柱痕が認められる。

時期を示す土器として、P153で土師器小皿(201・212)、P245で須恵器碗(228)、P254で土師器小皿(207)が出土している。また、P245で弥生土器(55)が出土している。

(6) その他

ア. 不明遺構(図版18、写真図版24)

SX39 調査区の南東部に位置する。幅0.80m、長さ1.90m以上で、概ね南北方向に延びる。北端は不整形な方形状となるが、南端は土坑に切られ不明である。検出面からの深さは0.10mで、幅に対して浅い。

SX33 調査区の南東部に位置する。1.65×1.10m。検出面からの深さは0.10mで平面の大きさに対して浅い。北端でSD46を切っており、SD46より新しい。埋土から須恵器碗(191～193)が出土した。また、弥生土器(39)が出土した。

イ. 土坑

SK250(図版18、写真図版26) 調査区の北東部に位置する。同程度の規模のSK247の西に隣接する。直径0.90m程度で円形に近く、底部の標高は5.75mである。

SK247(図版18、写真図版26) 調査区の中央部に位置する。同程度の規模のSK250の東に隣接する。直径0.85m程度の不整形な円形で、底部の標高は5.85mである。SB2を切って形成されており、SB2より新しい。埋土から土師器小皿(194・195)・坏(196)・托状皿(197)が出土した。

SK79(図版17) 調査区の南西部に位置する。調査区内の最大長は1.25mで不整形、検出面からの深さは0.07mである。SB1P238を切る。

SK218(図版17、写真図版26) 調査区の中央部に位置する。直径0.55m程度の円形に近い平面形である。4群のSD64に切られており、4群より古い。埋土から、弥生土器(31・32・36・44・49・52・58・66・74・77)が集積されたように出土した。

ウ. ビット

P109(図版17、写真図版26) 調査区の西部中央に位置する。直径0.30mの円形で、検出面からの深さは0.50mと深い。4群のSD111との切り合いは不明である。埋土の上部で弥生土器(27～30・35・42)が集積され

たように出土した。

P100 (図版 8、写真図版 26) 調査区の西部中央に位置する。直径 0.26m の円形で、SB1P233 を切る。弥生土器 (29・45・48・65) が集積されたように出土した。

P182 (図版 8、写真図版 26) 調査区の南西部に位置し、形状は不整形形である。北端の直径約 0.40m の円形に深くなる部分で弥生土器 (23・25) が集積されたように出土した。

第4節 遺物

出土遺物について、弥生時代中期前葉の土器、弥生時代中期後葉の土器、弥生時代後期頃の土器、弥生時代の石器、古墳時代の遺物、中世の遺物に分けて記載した。土器の法量、残存率、技法・その他の特徴、胎土、焼成、色調、写真図版番号については、第1表に記載している。

1. 弥生時代中期前葉の土器

少量であるが弥生時代中期後葉をさかのぼる遺物として、甕3点が出土した。

甕 (1～3) 逆し字形の口縁部のものである。1は如意形口縁との中間的な形態である。口縁部下に右から左へと6条のヘラ描直線文を描くが、途中上部の直線文と合流し、5条となるところがある。2は折り曲げた口縁部が、粘土接合痕で剥落する。

2. 弥生時代中期後葉の土器

弥生時代の土器は大部分がこの時期のものである。ほとんどは、西播磨地域の土器編年のIV期1段階 (長友・田中 2007) に該当する。

器種名については篠宮 (2007)、長友・田中 (2007) を参照した。壺と甕としたもののなかで、底部のみが残存するものについては、壺・甕・鉢の区別は明確ではないが、ここでは、底部から直線的に胴部にいたるもの、もしくはわずかに外にふくらむものを壺、底部から内湾して胴部にいたるものを甕とした。脚部のみが残存しているものについては、特殊なものを除いて高坏としたが、壺や鉢の脚部である可能性もある。

(1) SH1 出土の土器

柱穴と考えられる P353 から 4・5 が、P364 から 6・7 が出土した。

壺 (4・5) 5は壺の頸部で、断面三角形突帯は低い。

甕 (6・7) 7は口縁端部が凹面となる。

(2) SD377 出土の土器

8～12が出土した。

壺(8・9) 8は無頸壺で、直口鉢とも分類されるものである。口縁部が内折する。凹縁後にキザミ目が施されるが、上位2段もしくは3段とそれ以下の段が別々に施文されている。棒状浮文は大部分が剥落する。

壺(41)と類似し、同一個体の可能性があるが、色調は異なる。

甕(10) 口縁端部は折損しており、形状は不明である。

高坏(11) 碗形高坏の坏部である。口縁部端は内外にわずかに拡張する。

イタゴ壺(12) 口縁部下に紐孔を穿ったコップ形である。下部で屈曲する。この調査で出土したイタゴ壺はこの1点のみである。

(3) SK332 出土の土器

13～16が出土した。

甕(13・14) 13は胴部が大きく開くため、鉢の可能性もある。

高坏(15・16) 15は脚端部を上方に少し拡張する。16は坏部底に充填された粘土が接合面で剥落する。脚端部が弱い凹面となる。坏部底は円盤充填で成形される。

(4) SK359 出土の土器

17～21が出土した。

甕(17～20) 17は胴部2か所に黒斑が認められる。20は口縁部、胴部、底部が接合しない破片であるが、同一個体と考え、図化した。口縁端部が凹面となる。

鉢(21) 脚部片であるが、把手付鉢あるいは把手付壺のものと考えられる。外面の上下に千鳥で三角形の袢りが配されるがいずれも貫通しない。袢りの奥には面をもつものが多い。

(5) P356 出土の土器

22・23が出土した。

鉢(22) 口縁部から胴部の破片である。胴部上端部は、ナナメハケを強いヨコナデでナデ消す。

甕(23) 口縁部から胴部の破片である。

(6) その他の遺構・包含層出土の土器

第2・3面の遺構、第2面上の包含層出土のものもあるが、上層で出土したものの方が多い。これは上述の後世の削平により遺物の多くが巻き上げられたことによると考えられる。第2面以下で出土しているのは、第3面を検出面としたSR398で出土した甕(53)と第3面の遺構であるSX388で出土した壺(33)のみである。

壺 (24～48) 24～26は無頸壺の口縁部である。いずれも口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施す。

27～38は広口壺である。28～35は口縁が少し垂下し、端面に凹線を施す。その上に、キザミ目を施すもの (32)、棒状浮文を施すもの (28～30・33～35)、円形浮文を施すもの (31・32) がある。口縁内突帯は1条のもの (28・29・31～34) とないもの (30) がある。37・38はわずかに上下に拡張した口縁端面に、キザミ目を施し、2個一對の円形浮文を貼り付ける。頸部下端には1条の押圧突帯をめぐらすもの (28～31)、2条の断面三角形突帯をめぐらすもの (32・36)、何もないもの (27) がある。31の内面は広く剥落する。

39・40は直口壺で、口縁端部が厚く、平坦な面をもつ。頸部に3条の押圧突帯をめぐらす。

41は無頸壺で口縁部が内折する。凹線により突帯状に残された端部にキザミ目が施されるが、上位2段とそれ以下の段は別々に施文される。壺 (8) と類似し、同一個体の可能性があるが、色調は異なる。

42・43は胴部片で、44～48は底部を含む。44の櫛描刺突文の工具は竹管を連ねたようなものである。

甕 (49～59) 49～52は口縁部を含む。51は口縁端部を上下に拡張する。52は口縁端面が強く内斜する。53～59は底部を含む。53～55は外面ハケ調整、56～58は外面ヘラミガキ調整である。53は胴部が大きく開くため、鉢の可能性もある。

鉢 (60～63) 61・62は把手付鉢で、両者は極めて類似する。口縁部に2条の凹線を施し、その下に櫛描刺突文をめぐらせる。61は脚部がわずかに残るが、鉢部底は剥落する。把手の大きさは、長さ70.0mm、幅20.7mm、厚さ12.0mmである。62の把手の大きさは、長さ72.2mm、幅22.4mm、厚さ11.0mmである。63は脚部片であるが、把手付鉢あるいは把手付壺のものと考えられる。外面に上向きの三角形の袢りが配されるが、残存する6つの袢りのうち貫通するのは2つだけである。

高坏 (64～76) 64～66は水平口縁高坏である。64は口縁端部を丸く仕上げ、面をもたないが、65・66は少し垂下する。64・65の口縁内突帯は方形である。67～74は脚部を含む破片である。67は脚部下端を欠損する。69は坏部底の円盤充填の接合面のみに脚部のシボリ目が残され、それ以下の脚部内面はヘラケズリされる。このことから、円盤充填後にヘラケズリが行われたことが明らかである。脚端部は上方に拡張するもの (66・70・71・73)、脚端面が凹面となるもの (72・74)、ほとんど拡張しないもの (67・68・69) がある。75・76は坏部底から脚柱部の破片である。72・75は脚柱部に断面三角形突帯がめぐるが、72のものは低い。坏部底の整形は、確認できるものはいずれも円盤充填による。

複合土器 (77) 器台に壺かと考えられる胴部が貼り付けられたものである。器台部が剥落した部分の壺の外面にはハケ目が認められることから、壺部がある程度まで作成されてから器台部と接合したことが分かる。破片であり、全体形は明らかでないが、玉津田中遺跡の例 (甲斐編1996: 図版255の7369) は、器台に無頸壺を載せた形態となっている。

蓋 (78～80) いずれも甕とセットとなるものである。78は水平の天井部をもち大きい。口縁端部をわずかに上方に拡張する。79・80は天井部に張り出したつまみをもつ。つまみの上部は平坦である。80は内面頂部がへこみ、シボリ目が残される。つまみの側面にハケ状の工具が当たった痕跡が認められる。

把手 (81) 把手付壺、把手付甕、水差、山陰型甕形土器などに付けられた把手である。把手以外の部分はほとんど残されており、把手が取り付け角度も不確かであることから、器種の特定はできなかった。把手は器壁に対して水平方向に取り付けられている。残されている部分はすべてナデ調整である。把手部を先に作り、把手を取り込むように器壁が作られている。把手部は長さ79.0mm、幅24.9mm、厚さ13.8mmである。図は、山陰型甕形土器である可能性を考え、左右の把手として図化した。

3. 弥生時代後期頃の土器

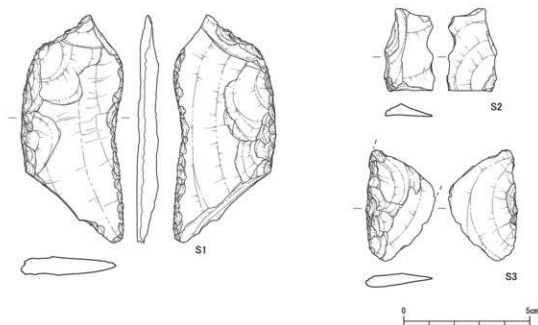
1点のみであるが、弥生時代後期頃のものと考えられる高坏が出土した。これまでの関ノ口遺跡の調査ではこの時期の遺物は確認されていない。出土したのは小片であり評価が難しい。

高坏 (82) 坏部下半の破片である。坏部は屈曲し立ち上がる。坏部の底は円盤充填で形成される。

4. 弥生時代の石器 (第8図)

3点を図化した。いずれもガラス質安山岩を用いており、肉眼観察ではS1・S2は金山産、S3は二上山産かと推定される。S3は風化が進行しており、時期を異にする可能性がある。

S1は打製石庖丁である。長さ40.5mm、幅89.4mm、厚さ9.0mm、重さ28.3g。背面に広い剥離面をもつ、板状の横長剥片を素材とする。主要剥離の末端部側に細かい剥離により両刃の刃部を作出する。刃部は内湾する。背部には素材の打面の厚さを減じるために二次加工が行われ、最終的に鋭い縁辺を潰している。左側面は二次加工あるいは使用の段階で折損するが、背面側の細かい剥離には折損の後になされたものがあり、折損の後にも使用されたことが分かる。背腹両面の剥離の痕には部分的に使用にともなうと考えら



第8図 弥生時代 石器

れる摩滅が認められる。SR390の埋土から出土した。

S2は使用痕ある剥片である。長さ199mm、幅32.7mm、厚さ5.0mm、重さ3.0g。左右両側の折れと末端部の弧状の折れは主要剥離時に生じたものであろう。打面は線状で潰れる。末端部に、微細な剥離が連続し、弧状に内湾する。第2面上の包含層から出土した。

S3は剥片である。長さ274mm、幅43.9mm、厚さ5.2mm、重さ5.1g。横長で、背面の末端部には素材の平坦な剥離面が取り込まれている。線状の打面は細かい多数の剥離で潰れることから、楔形石器から剥離されたか、あるいは打製石庖丁などの二次加工の際に生じたと考えられる。第1面上の包含層から出土した。

5. 古墳時代の遺物

出土している土器は全て須恵器である。遺構出土のものは破片が多く、時期の特定が困難であるが、全体としてTK209型式期頃と考えられそうである。

(1) SB1 出土の土器

四面廂建物の身舎柱穴であるP3から83、P238から84、P237から86、P5から87、外周柱穴であるP9から85が出土した。

須恵器環(83・84) 83は坏身の受部片で、立ち上がり欠損する。受部は小さく、おそらく短い立ち上がりであったと推定される。84は坏身の底部の破片と考えたが、異なる器種の可能性もある。外面に回転ヘラケズリが認められる。

須恵器高坏(85～87) 85は外面に弱い沈線が認められることから、無蓋高坏の坏部と考えたが、異なる器種の可能性もある。86は口縁部片であるが、外面に櫛描の斜線文が施される。無蓋高坏の坏部と考えたが、異なる器種の可能性もある。87は短脚の高坏の脚端部である。端部に面をもつ。

(2) SB2 出土の遺物

柱穴のP252から88・89、P163からS4が出土した。

須恵器高坏(88) 脚端部である。端部はわずかに拡張し、面をもつ。

須恵器脚付壺(89) 内湾する脚端部である。長方形のスカシの下端が認められ、その下に少し間をあけて沈線がめぐる。

唐居敷(S4) 概ね6つの面をもつ立方体状の角礫の上下2面に凹みを設けたものである。扉の支柱を据えるための軸摺穴をもつ唐居敷かと考えたが、用途の断定は難しい。長さ1752mm、幅1495mm、厚さ1505mm、重さ4620g。上面の凹みは直径66mm、深さ33mm。下面の凹みは直径27mm、深さ10mm。

凹みは敲打により形成されたと考えられ、磨滅などは認められない。上面の凹みは中央からずれており、凹みの縁は1つの側面との稜線に接するが、これはその側面が、凹みが作られた後の割れによって生じたことによるかもしれない。これが妥当とすると、当初上面の凹みを使用していたが、側面の割れにより使

用が難しくなったため、裏面中央に新たに新たな凹みを作ったということも考えられるだろう。

側面の1面は自然面である。一部に煤状のものの付着がみられ、赤化しているようにみえる部分もあることから、被熱している可能性がある。石材は凝灰岩と考えられる。

(3) その他の遺構出土の土器

90・91とも中世の溝で出土した。

須恵器壺(90) 短頸壺である。下部は欠損するが、回転ヘラケズリが認められる。胴部と口縁部の境界の屈曲が極めて弱い。口唇部は摩滅し平坦面をもつ。

須恵器高坏(91) 無蓋高坏で、脚部には2方向に長方形2段のスカシがあげられる。上段スカシの下と下段スカシの上下、坏部にそれぞれ1条の沈線がめぐる。

6. 中世の遺物

(1) SD46 出土の土器

92～109が出土した。

土師器小皿(92) 底部から口縁部にかけての破片で底部は回転ヘラ切りである。

土師器碗(93・94) 平高台碗である。94は見込みが大きく凹む。内面底部はエビオサエで調整されるが不整形である。

土師器托状皿(95・96) 柱状高台で、皿部端部は欠損する。

須恵器碗(97～104) 底部を含む97～102はいずれも底部は回転系切りで、低い平高台となるが、102は平底に近い。100の高台は直径45mm程度でその他のものと比べて小さい。98は内面見込みが落ち込む。

須恵器鉢(105) 口縁部近くで外向きに屈曲し、口縁端部に面をもつ。

須恵器壺(106・107) 肩部に突帯をもつ双耳壺の肩部片である。断面三角形の突帯は端部が丸みを帯びる。107の突帯は三角形の頂部が上に片寄る。両者とも焼成が不良で、表面だけが黒みが強い、瓦質土器のような焼きとなっている。

須恵器甕(108) 口縁部は短く、口縁端部に面をもつ。体部外面は平行タキである。

白磁碗(109) 口縁部片である。大宰府編年(山本2000、以下同)の碗Ⅱ-1類である。

(2) SD279 出土の遺物

110～162が出土した。

土師器小皿(110～119) 110は手づくね整形で、口縁部が「て」の字状になる。底部は111～117が回転ヘラ切り、118・119が回転系切りである。

土師器坏(120～125) 底部は120～122が回転ヘラ切り、123～125が回転系切りである。

土師器碗(126・127) 平高台碗である。126は回転系切りによる高台をもつ。127は見込みが大きく凹む。

内面底部は丁寧にナデ調整され、なめらかである。部分的にハケのような調整が認められる。

土師器托状皿 (128) 出土した托状皿のうち、底部が回転ヘラ切りでなく、回転糸切りのものはこの1点のみである。

土師器甕 (129) 内面にはヨコナデが認められるが、外面は器壁が荒れて調整が確認できない。口唇部に面をもつ。口縁部は「く」の字に屈曲し、内面には粘土接合痕が見られる。

土師器火鉢 (130) 脚部と口縁部の破片が出土した。接合しなかったが、想定される高さで復元して図化したため、器高は実際と異なる可能性がある。内面下部は弱いヘラケズリが施され、その後ハケがなされるところもある。脚部は外に向けて広がり、ナデ調整で不整形である。内面下部には炭化物の付着が顕著である。

土師器高坏 (131) SD279の南東端に集積された礫中で脚柱部のみが出土した。φ約15mmの棒に粘土を巻きつけて作られており、中央の孔は中心から少しずれる。脚部を作成したのちに杯部を取付けており、その接合面で剥落している。断面形はいびつな八角形となる。

須恵器碗 (132～150) 大・中型の132～146と小型の147～150に分けられる。

132～143の底部はいずれも回転糸切りである。132～140は低い平高台をもつが、141～143は平底である。高台の大きさは136が直径45mm、138が直径48mmで、他と比べて小さい。132の内面には薄く漆膜が付着している。図では網掛けでその範囲を示した。漆塗りの容器などとして使用されたと考えられる。

144は輪高台をもつ。回転糸切りで切り離した平高台状の突出の縁辺に粘土を貼り足すかたちで輪高台が形成される。輪高台をナデ付ける際に、回転糸切り痕の周辺はナデ消される。高台の端部は外斜するように磨減しており、もともと高さがあったものと考えられる。輪高台内を含む外面には墨が附着しており、硯に転用された可能性があるが、輪高台内に磨減は認められない。

小型の147～150の底部は、147が回転ヘラ切りで、148～150が回転糸切りである。147～149は低い平高台をもつが、150は平底である。147～149は内面見込みが落ち込む。149は焼成時に生じたと考えられる、底部に生じた亀裂が貫通しており、液体を入れることはできなかったと考えられる。

須恵器壺 (151・152) 151は底部片である。底部の縁は粘土を継ぎ足して形成されているが、底の回転糸切り痕は平高台全体に認められ、粘土の継ぎ足しは切り離し前になされたことが分かる。152は肩部より上の破片である。口縁端部は弱くつまみあげる。頸部は垂直に立ち上がり、内面にはシボリ目が認められる。肩部は水平に広がり、器壁が厚い。全体に強いナデで調整されており、肩部ではナデの単位が稜状になるところがある。

須恵器甕 (153～155) 153は口縁部片で、口縁端部は断面三角形に肥厚する。その下の面には2条の弱い沈線がめぐる。頸部には沈線による斜線文が描かれ、その上部には2条の弱い沈線がめぐる。154は頸部から口縁部の破片である。口縁端部は上方に拡張し、端面は凹面となる。頸部は格子タタキを薄くナデ消す。155は肩部片である。内面の当具痕は数条の線が扇形に広がる模様になっており特徴的である。

須恵器硯 (156) 風字硯の硯尻側右隅の破片である。全体が厚さ13.0mm程度の板状となる。硯面の中

中央に縦方向の突帯を貼り付ける二面風字硯であるが、突帯は接合面で剥落する。硯尻側の左右に角柱形の脚が付くものだが、脚部も接合面で剥落し、長方形の接合痕のみが残る。これらの接合面は周囲よりわずかに高まっており、接合後にヘラケズリで周囲の厚さが減じられたことが分かる。右側縁はわずかに反るだけで、立ち上がらない。硯面には様々な方向の線条痕が認められるが、墨を摺るために意図的につけられたものかは不明である。復元される硯尻の横幅は16.3mmである。

瓦器碗 (157・158) 底部片である。断面形が丸みを帯びた三角形の低い高台をもつ。

白磁碗 (159・160) 159は碗の底部片である。大宰府編年の碗IV-2a類かと考えられる。160は大宰府編年の碗IV-1aである。

白磁皿 (161) 口縁部片である。大宰府編年の皿XI-4類である。

白磁円盤 (162) 碗の体部片の縁辺を内外面から挟み打ちで剥離して、直径約3.6cmの円盤状に加工したものである。下端には碗が割れた際に生じたと考えられる広い割れ面が残されている。左上部を新しく欠損する。

(3) SD45出土の土器

163～187が出土した。

土師器小皿 (163～169) 163は手づくね成形で、口縁部が「て」の字状になる。164～169の底部はいずれも回転糸切りである。

土師器杯 (170～173) 底部はいずれも回転糸切りである。

土師器碗 (174) 見込みが大きく凹む平高台碗である。内面底部は荒い回転ナデの跡が残され、不整形である。

土師器托状皿 (175・176) 柱状高台で、皿部端部は欠損する。

土師器甕 (177) 口縁部の破片で、頸部の内面は強く「く」の字に屈曲する。外面はユビオサエで調整される。

須恵器碗 (178～182) 大・中型の178～180と小型の181・182がある。179～182は底部が回転糸切りで、低い平高台をもつ。

須恵器鉢 (183) 口縁部片である。わずかに内湾し、立ち上がる胴部が、口縁部近くで強く外反する。口縁端部は上下に拡張し、扁平な玉縁形となる。器壁は鉢としては薄い。大陣原3号窯跡の鉢(吉田・種定編1995:第29図の283)が類似の資料と言えようである。

須恵器甕 (184) 底部と胴部の境界は角をもたず、丸みをおびる。外面は板ナデ、内面にはハケ調整の始点が認められる。ハケ調整を用いた甕は初期の備前焼によく見られる。また、器形は異なるが、内面底部をハケ調整する甕は竹原9号窯跡(山田編2022:図版12の263)にも認められる。

白磁碗 (185) 体部片である。下端部にわずかに高台部が残されている。大宰府編年の碗VI類かと考えられる。

白磁皿 (186・187) 186は皿の口縁部である。外面のヘラ押圧縦線によって輪花とする。大宰府編年の皿

XI-4類である。187は皿の底部である。底部は回転ヘラケズリにより、くぼむ。大宰府編年の皿V類である。

(4) SX280 出土の土器

188～190が出土した。いずれも遺構の上部で出土したものである。

須恵器碗(188) 平高台は極めて低く、平底に近い。

瓦器碗(189) 断面形が丸みを帯びた三角形の低い高台をもつ。体部は丸みが強い。口縁端部に横方向から沈線を施す楠葉型である。

白磁皿(190) 口縁部片である。大宰府編年の皿XI-3類である。

(5) SX33 出土の土器

191～193が出土した。平高台は比較的明瞭なものが多く、SD46とともに古い様相のものが多く。

須恵器碗(191～193) いずれも底部は回転糸切りで、低い明瞭な平高台をもつ。191と192は内面見込みが落ち込む。191は焼成が不良で土師器の可能性もあるが、形から須恵器と考えた。

(6) SK247 出土の土器

194～197が出土した。

土師器小皿(194・195) 194は手づくね成形で、口縁部が「て」の字状になる。195は底部が完存しないため不確定ではあるが、手づくね成形と考えられる。

土師器坏(196) 口縁部片で、直線的にひらく。

土師器托状皿(197) 柱状高台で、皿部端部は欠損する。

(7) その他の遺構・包含層出土の土器

その他の遺構・包含層出土の土器である。なお、4群の遺構としたSD85から208・216・235が、SD273から218が出土した。5群の遺構としたSB4から189・199・202・204・214・223・227・237が、SB5から201・207・212・228が出土した。

土師器皿(198) 手づくね整形である。この調査で出土した土師器皿はこの1点のみである。

土師器小皿(199～212) 199・200は手づくね成形で、口縁部が「て」の字状になる。底部は201～203が回転ヘラ切り、204～206・212が回転糸切りである。212には回転糸切りで切り離された粘土柱が残されている。199の内面の口縁部には2ヶ所に黒色の膠着物が認められ、灯明皿として使用されたと考えられる。

土師器坏(213～215) 215はわずかに平高台状の突出が認められ、碗の可能性もある。

土師器碗(216・217) 平高台碗である。217は見込みが大きく凹む。内面底部は粗い回転ナデの跡が残され、不整形である。

土師器托状皿(218・219) 柱状高台をもつ。218は皿部が短く、端部は丸い。この調査で見つかった托状皿で皿部が残存するのはこの1点のみである。

須恵器坏(220) 残存部が少なく、皿の可能性も考えられるが坏とした。底部は回転ヘラ切り。内面底部は使用に伴うと考えられる摩滅が顕著である。

須恵器碗(221～233) 221～228は底部が回転糸切りで、低い平高台をもつ。226～228は高台がきわめて低く、平底とも捉えられる。229は断面台形の輪高台を貼り付ける。

須恵器鉢(234・235) 234は片口鉢の口部分の脇の破片である。回転ナデで整形したのちに、口を作り出す際に生じたユビオサエが残されている。緩やかな湾形に開く体部は、口縁部付近で外反し、口縁端部を上方に大きくつまみ上げる。大陣原3号窯跡の鉢(吉田・種定編1995:第28図270)に類似する。235は口縁端面が器壁に概ね直交し、端面を下方に少し拡張する。

須恵器甕(236) 平底で底部はナデ調整される。内面には一部に粘土帯の接合痕が残されている。外面には底部と体部の間にヒビ割れが生じ、円盤状の底部の上に粘土を積み上げて成形されたことが分かる。内面底部に付着した粘土層は丸まっており、内面をケズリ調整した際に生じたものが残されたと考えられる。

瓦器碗(237) 断面形が丸みを帯びた三角形の低い高台をもつ。体部はやや開き気味で、口縁部が外反する。口縁端部に横方向から沈線を施す桶型である。外面にもヘラミガキが認められる。高台の内側にシボリ目状の痕跡が認められるが、どのような作業によって残されたかは不明である。

白磁皿(238) 皿の口縁～体部である。大宰府編年の皿Ⅱ-1a類である。

白磁碗(239) 碗の底部である。高く直立する高台をもち、破断面の粘土接合痕からは、まず高台と体部を一体で作り、底に円盤状の粘土を充填しているように見られる。大宰府編年の碗Ⅴ類である。

【参考文献】

- 甲斐昭光編 1996『玉津田中遺跡』第5分冊〔図版編〕、兵庫県文化財調査報告135-5、兵庫県教育委員会
 篠宮 正 2007『東播磨地域の編年』『弥生土器集成と編年―播磨編―』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告5、大手前大学史学研究所
 長友朋子・田中元浩 2007『西播磨地域の編年』『弥生土器集成と編年―播磨編―』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告5、大手前大学史学研究所
 山田清朝編 2022『竹原1号窯跡・9号窯跡』兵庫県文化財調査報告520、兵庫県教育委員会
 山本信夫 2000『大宰府条坊跡区』陶磁器分類編、太宰府市の文化財49、太宰府市教育委員会
 吉田 昇・種定淳介編 1995『大陣原古窯跡群』兵庫県文化財調査報告140、兵庫県教育委員会

第1表 出土土器観察表(1)

番号	種類	器種	遺構・部位	法量 (cm)			形状・その他の特徴	胎土	焼成	色調	内底	写真 図版	
				口径	器高	底径							
1	弥生土器	甕	SK280	(195)	(736)		口頸部にキズミ目。外面：タテハタ後、口縁部下に5〜6本のへう状直線文。内面：土曜にヨコハタ	φ〜2mmの長石・チャートを含む	良	内：にぶい黄 外：にぶい黄・黒	19	28	
2	弥生土器	甕	第2面上包含層		(736)		外面：口縁部下に6本1単位の2単位へのう状直線文。内面：イタナデ	φ〜2mmのチャート・長石を多く含む	普通	内：浅黄褐色 外：にぶい黄褐色	19	28	
3	弥生土器	甕	SH2248	(346)			外面：口縁部下に横線直線文4条以上	φ〜1mmのチャートを少し含む	普通	内：浅黄褐色 外：灰白	19	28	
4	弥生土器	甕	SH15F033	(1445)	(259)	8.0	外面：下部縦方向へうミギナ後、中央部縦方向へうミギナ。下部縦方向ナデ。内面：ハタ	φ〜2mmの長石・石英・霞石を含む	普通	内：灰白・黄灰 外：黄灰・黄灰・黒	19	28	
5	弥生土器	甕	SH15F033/第4面上包含層(黒人カ)		(579)		外面：頸部に3条の断面三角形突起	φ〜25mmの長石・石英を含む	やや不良	内：灰白・黄 外：にぶい黄褐色・黄	19	29	
6	弥生土器	甕	SH15F064	(1045)		6.5	外面：ヘウミギナ。内面：ヘウミズリ	φ〜2mmの長石・石英・霞石を含む	やや不良	内：灰白 外：にぶい黄・黄灰	19	29	
7	弥生土器	甕	SH15F064	(144)	26.9	(188)	(596)	外面：口縁部に縦かい条線。胴部上部タテハタ。下部ヘウミギナ。底面：黄褐色。内面：胴部上部縦方向のイタナデ、中央部タテハタ。下部ヘウミズリ	φ〜25mmの長石・石英・チャートを含む	普通	内：黄灰・黄 外：黄・にぶい黄	19	29
8	弥生土器	甕	SK377	(270)	(60)	(308)		外面：胴部から胴部に6本の凹線、キズミ目後、4本セツの棒状浮文、最上段の凹線下に凹線浮文	φ〜2mmの長石・石英・チャート・角閃石を含む	普通	内：浅黄褐色 外：黄	19	29
9	弥生土器	甕	SK377	(42)		9.6	外面：ヘウミギナ	φ〜2mmの長石・石英を含む	やや不良	内：灰白	19	29	
10	弥生土器	甕	SK377	(36)			内面：ヘウミズリ。底面：黒点多数あり	φ1mm以下の長石・チャートを含む	普通	内：にぶい黄褐色	19	29	
11	弥生土器	高杯	SK377/SA259上部	(218)	(67)		外面：口縁部面に縦い化腐1条。口縁部下に3本の凹線文。胴部下部縦方向のへうミギナ後、中央部下部縦方向のへうミギナ。内面：ヘウミギナ。ヘウミズリ	φ〜1mmの長石・霞石を含む	普通	内外：浅黄褐色	19	29	
12	弥生土器	イイダコ型	SK377	(40)	(70)	(60)		内面：ユビオサエ。φ約9mmの穿孔	φ〜2mmの長石・霞石を含む	やや不良	内外：灰白	19	29
13	弥生土器	甕	SK332/第2面上包含層	(95)		9.9	外面：ヘウミギナ。内面：ヘウミズリ	φ〜2mmの長石・霞石を含む	普通	内：にぶい黄褐色 外：黄灰・黄灰	19	29	
14	弥生土器	甕	SK332	(139)	(37)		内面：ヘウミズリ	φ〜0.5mmの長石・霞石を少し含む	やや不良	内外：灰白	19	29	
15	弥生土器	高杯	SK332/第2面上包含層	(736)		10.0	外面：ヘウミギナ	φ〜25mmのチャート・石英・長石・霞石を含む	やや不良	内：浅黄褐色 外：浅黄褐色・灰	19	29	
16	弥生土器	高杯	SK332	(113)		14.15	円形底に4方内。内面：胴部ヘウミズリ。シロ目	φ〜2mmの長石・チャート・長石を含む	やや不良	内外：赤褐色	19	29	
17	弥生土器	甕	SK369/第2面上包含層	17.1	31.7	22.9	7.06	口縁部3/4。外面：胴部上部タテハタ。下部ヘウミギナ。内面：タテハタ。下部ヘウミズリ	φ〜1mmの長石・角閃石を含む	普通	内：浅黄褐色 外：浅黄褐色・灰黄褐色・灰	19	30
18	弥生土器	甕	SK369	(134)	(172)	(172)		外面：口縁部に縦かい条線。上部タテハタ後、下部ヘウミギナ。内面：タテハタ	φ〜1mmの長石・チャートを含む	普通	内：灰白 外：灰白・黄灰	19	30
19	弥生土器	甕	SK330/SH15F2/第2面上包含層	19.2	(113)	(259)		外面：ハタ。内面：ハタ	φ〜1mmの長石・チャート・底面を含む	普通	内：浅黄褐色・灰 外：にぶい黄・黄	19	29
20	弥生土器	甕	SK369	(158)	(210)	(162)	6.2	外面：口縁部面に縦かい条線。上部タテハタ。下部ヘウミギナ。内面：上部タテハタ。下部ヘウミズリ	φ〜2mmの長石・チャート・石英・霞石を含む	普通	内：にぶい黄・灰褐色・黒 外：浅黄褐色・黒	19	30
21	弥生土器	鉢	SK330/SH15F7	(35)		(122)	1.5	内面：イタナデ	φ〜2mmのチャート・長石・霞石を含む	普通	内外：灰白	19	29
22	弥生土器	鉢	P356	(286)	(65)	(283)		外面：口縁部面に2条の凹線。胴部タテハタ。内面：タテハタ後、上縁をヨコハタ	φ〜2mmの長石・石英・チャート・霞石・角閃石を含む	普通	内：にぶい黄褐色 外：にぶい黄・灰白	20	30
23	弥生土器	甕	P356/P382	(278)	(263)	(349)		外面：口縁部面上に1条の凹線。胴部上部タテハタ後、下部ヘウミギナ。内面：口縁部ハタ。胴部上部ハタ。下部ヘウミズリ	φ〜2mmのチャート・長石・石英・霞石・角閃石を含む	普通	内：にぶい黄褐色・灰黄褐色 外：浅黄褐色・にぶい黄褐色・黄	20	30
24	弥生土器	甕	SH15F7	(162)	(35)		口縁部1.6	外面：上下に拡張した口縁部面に2条の凹線。キズミ目。胴部ハタ	φ〜2mmの長石・チャートを含む	不良	内外：灰白	30	32
25	弥生土器	甕	P382	(160)	(43)		口縁部1.5	外面：上下に拡張した口縁部面に2条の凹線。底、3条セツの円形浮文(4方内)。赤彩	φ〜2mmのチャート・長石・霞石を含む	普通	内：灰白 外：灰白・黄	30	32
26	弥生土器	甕	P286	(145)	(37)		口縁部1.4	外面：上下に拡張した口縁部面に6条の凹線。胴部タテハタ	φ〜2mmのチャート・長石・霞石を含む	やや不良	内外：灰白	30	32
27	弥生土器	甕	P359		(283)		9.6	外面：胴部から胴部上部にハタ後、胴部上部は上から横線の2条程度の直線文、3条程度の直線文、5条程度の直線文、4条程度の直線文、3条程度の直線文、2条の斜格子文、8条程度の直線文、下2分の直線直線文(15方内)に4条セツの円形浮文。胴部下部ヘウミギナ。内面：胴部ヘウミギナ。胴部ハタ	φ〜2mmの長石・チャート・石英・霞石を含む	普通	内：灰白・黄灰 外：にぶい黄褐色・にぶい黄	30	31

第1表 出土土器観察表(2)

番号	種類	器種	通体・部位	法長 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	採取	写真 掲載
				口径	器高	腹径							
28	弥生土器	甕	P109	(15.8)	29.2	(24.8)	7.0	内面：垂下口縁直下に3条の凹線後、4方向に4本セットの横状浮文。胴部タテハタ後、胴部下縁に1条の内凹状突起。胴部上縁にタテハタ後、胴部中央に1列の横線列点文。胴部下部は縦方向のへつミギキ。胴部の底に縦方向のへつミギキ。内面：口縁内突部1条。胴部へつミギキ。胴部タテハタ。上部のみナメハタ	δ-1mmのチャート・長石を含む	普通	内特：灰白	20	31
29	弥生土器	甕	P100-P109	16.25	(23.5)			内面：垂下口縁直下に4条の凹線後、5方向に3本セットの横状浮文。胴部タテハタ後、胴部下縁に1条の内凹状突起。胴部上縁に2列の横線列点文。胴部下部へつミギキ。内面：口縁内突部1条。胴部タテハタ後、ヨコハタ	δ-1mmの石英・チャート・長石・角閃石・石英片を含む	普通	内：浅黄褐色 外：白・黄褐色 / 浅黄褐色	20	31
30	弥生土器	甕	P109	17.40	(33.0)			内面：垂下口縁直下に4条の凹線後、6方向に3本セットの横状浮文。胴部タテハタ後、胴部下縁に1条の内凹状突起。胴部上縁にハタによる列点文。内面：胴部ヨコハタ	δ-2mmの石英・チャート・長石・角閃石・石英片を含む	普通	内：浅黄褐色 / 白 外：黄褐色 / 浅黄褐色	20	31
31	弥生土器	甕	SK218	(16.6)	7.6			内面：垂下口縁直下に3条の凹線後、縦に3本セットの横状浮文。胴部タテハタ後、胴部下縁に1条の内凹状突起。胴部上縁にハタによる列点文。内面：胴部ヨコハタ	δ-3mmの長石・石英を含む	やや不貞	内：灰白 / 黄褐色 外：白 / 白・黄褐色 / 黒褐色	20	32
32	弥生土器	甕	SK218	(16.5)	(7.0)			内面：垂下口縁直下に2条以上の凹線後、キズミ目後、3本セットの横状浮文。胴部タテハタ後、胴部下縁に2条の横状浮文。胴部上縁にハタによる列点文。内面：胴部ヨコハタ	δ-0.5mmの雲母・角閃石を少し含む	普通	内：灰白 / 黒褐色 外：黄 / 灰白	21	31
33	弥生土器	甕	SK388	(16.2)	(2.0)			内面：垂下口縁直下に3条の凹線後、3本セットの横状浮文。内面：口縁内突部1条の内、2本セットの孔	δ-1mmの長石・石英・雲母を含む	普通	内：灰黄褐色 外：白・黄褐色	21	32
34	弥生土器	甕	SK2248	(17.7)	(2.3)			内面：垂下口縁直下に3条の凹線後、3本セットの横状浮文。胴部タテハタ。内面：口縁内突部1条	δ-1.5mmのチャート・長石・角閃石を含む	やや不貞	内特：灰白	21	32
35	弥生土器	甕	P109		(2.3)			内面：垂下口縁直下に5条の凹線後、4条以上の横状浮文。内面：口縁内突部1条以上	δ-0.5mmの長石を含む	普通	内：黄褐色 外：灰白 / 灰	21	32
36	弥生土器	甕	SK218-S204	(14.8)	(31.3)			内面：胴部下縁に2条以上の凹線・三角状突起。胴部上縁にタテハタ後、上から縦線の8・9条の直線文、6・7条の横状文、9条の直線文、5条の斜格子文、8条の直線文。胴部列点文、3条の斜格子文に4本セット、最下段の直線文上に5個以上の横状浮文。胴部中央に1列の横線列点文。内面：胴部ヨコハタ	δ-1.5mmの石英・長石・チャート・角閃石を含む	普通	内：灰白 / 浅黄褐色 / 黄褐色 外：白・黄褐色 / 白・黄褐色 / 灰白 / 浅黄褐色	21	31
37	弥生土器	甕	SK141	(13.8)	(3.0)			内面：上下に拡張した口縁直下にキズミ目後、4方向に2本セットの横状浮文。内面：胴部ヨコハタ	δ-1mm以上の砂粒と塵砂を多量に含む	普通	内：浅黄褐色 外：浅黄褐色 / 浅黄褐色	21	32
38	弥生土器	甕	SK316	(15.7)	(5.2)			内面：下に拡張した口縁直下にキズミ目後、2本セットの横状浮文。胴部タテハタ	δ-2mmの長石・チャートを含む	やや不貞	内：暗黄褐色 外：灰白	21	32
39	弥生土器	甕	SK33	(14.9)	(7.7)			内面：胴部に3条の横状突起。胴部上縁に8・9条程度の横線直線文。内面：胴部イタナデ	δ-2mmの長石・チャート・角閃石を含む	普通	内：灰白 外：浅黄褐色	21	32
40	弥生土器	甕	第2図上皿 蓋	(13.2)	(4.5)			内面：胴部に3条の横状突起	δ-1.5mmの長石・チャートを含む	普通	内：灰白 外：灰褐色	21	32
41	弥生土器	甕	第2図上皿 蓋	(16.6)	(7.5)			内面：胴部から胴部に6条の凹線後、キズミ目後、4本セットの横状浮文。最上段の凹線上に横状浮文	δ-2mmのチャート・石英・長石・角閃石を含む	やや不貞	内特：浅黄褐色	21	32
42	弥生土器	甕	P109		(8.5)			内面：上から1条以上の凹線、3条程度の横線直線文、3条程度の横線直線文	δ-2mmの長石・チャート・角閃石・雲母を含む	やや不貞	内：黄 / 外：灰白	21	32
43	弥生土器	甕	SK124		(9.6)			内面：上から3条程度の横線直線格子文、3条程度の横線直線文、3条以上の横状浮文、1列の横線列点文	δ-2mmの石英・チャート・長石・角閃石を含む	やや不貞	内：灰白 外：灰白 / 浅黄褐色	21	32
44	弥生土器	甕	SK218	(15.9)	(24.8)	6.9		内面：上部類似ナメハタ後、縦線列点文、下部縦方向へつミギキ。胴部中央に縦方向へつミギキ。内面：下部タテハタ。上部ナメハタ	δ-3.5mmの長石・チャート・角閃石・雲母を含む	普通	内：白・黄褐色 / 黒褐色 外：黄 / 灰白 / 灰白	21	33
45	弥生土器	甕	P109	(11.7)	8.75			内面：上部縦方向へつミギキ。下部縦方向へつミギキ。内面：ハタ	δ-2.5mmの石英・チャート・長石・角閃石・雲母を含む	普通	内特：灰白 / 黄	21	33
46	弥生土器	甕	P321		(6.8)			内面：下部縦方向へつミギキ。上部縦方向へつミギキ。内面：ハタ後、イタナデ	δ-0.5mmの雲母・長石・チャートを含む	普通	内：黄褐色 外：白・黄褐色 / 黄褐色 / 黒褐色	21	33
47	弥生土器	甕	SK308	(14.9)	(7.2)			内面：へつミギキ。内面：イタナデ	δ-1.5mmの長石・チャート・角閃石を含む	普通	内：白・黄褐色 / 黒褐色 外：白・黄褐色 / 黒褐色	21	33
48	弥生土器	甕	P109	(14.8)	(8.5)			内面：へつミギキ	δ-2.5mmの石英・チャート・長石・角閃石を含む	やや不貞	内特：灰白 / 黄	21	33
49	弥生土器	甕	SK218	(13.8)	(22.1)	(17.0)		内面：口縁直下に縦に1条。胴部上部類似ナメハタ後、下部へつミギキ。内面：胴部上部類似ナメハタ後、下部へつミギキ	δ-1.5mmの長石・石英・角閃石・雲母を含む	普通	内：灰白 / 白・黄褐色 / 黄褐色 外：灰白 / 黄 / 黄褐色	21	33
50	弥生土器	甕	SK127 甕 上部	(13.2)	(5.5)			内面：胴部ハタ。黄化物付着。内面：胴部ヨコハタ	δ-1.5mmの長石・チャート・雲母を含む	やや不貞	内：白・黄褐色 外：灰白	21	33

第1表 出土土器観察表(3)

番号	種別	器種	遺構・部位	法量 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	図取	写真 図取
				口径	器高	底径							
53	弥生土器	甕	第2面上部 合層	(187)	6(3)		口縁部 1/8	外面に口縁部周りに2本の凹線。胴部タテハケ後、 縁部刻文。内面：胴部ハケ。灰化物付着	φ-1mmのチャート・長石・ 石英・黒母を含む	普通	内：浅黄褐色 / 灰白 外：灰白 / 灰白	21	33
52	弥生土器	甕	SK218	(223)	7(5)		口縁部 1/8	外面：胴部タテハケ。内面：胴部ハケ	φ-15mmのチャート・長石・ 角閃石・黒母を含む	やや 不良	内：灰白 / 灰白 外：灰白 / 灰白	21	33
53	弥生土器	甕	SK389		13(5)		底部 完全	外面：ハケ。内面：イタナデ	φ-5mmのチャート・長石・ 石英・角閃石・黒母・ 灰片を含む	やや 不良	内：浅黄褐色 / 灰白 外：灰白 / 黒	21	33
54	弥生土器	甕	SH127		12(8)		底部 1/4	外面：タテハケ	φ-2mmの長石・チャート・ 石英・角閃石・黒母・ 灰片を含む	普通	内：灰白 / 灰白 外：黒褐色 / 灰白	22	34
55	弥生土器	甕	SH216		14(29)		底部 1/4	外面：ハケか。内面：ハケ後、イタナデか	φ-25mmの長石・チャート・ 石英・黒母・灰片を含む	やや 不良	内：暗灰 外：明暗灰	22	34
56	弥生土器	甕	SB1182 上部		13(4)		底部 1/4	外面：ヘラミギキ	φ-2mmの長石・石英・ チャート・黒母・角閃石を含む	普通	内外：黒	22	34
57	弥生土器	甕	無蓋		14(4)		底部 1/2	底部穿孔。外面：胴部ヘラミギキ。底部ナデ、 一部イタナデ	φ-2mmの長石・チャート・ 角閃石を含む	普通	内：灰白・黄褐色 / 黒 外：赤褐色 / 灰黄褐色	22	34
58	弥生土器	甕	SK218		14(3)		底部 3/4	外面：ヘラミギキ。内面：ヘラミギキ	φ-15mmの長石・石英・ チャート・黒母を含む	普通	内：赤褐色 / 灰黄 外：赤褐色	22	34
59	弥生土器	甕	SB1186 腹方		13(6)		底部 1/2		φ-1mmの長石・チャート・ 黒母・灰片を含む	やや 不良	内：灰白・黄褐色 外：黒	22	34
60	弥生土器	鉢	第2面上部 合層	(266)	6(15)	(256)	口縁部 1/10	内面：ハケか	φ-1mmの長石・チャート・ 角閃石を含む	やや 不良	内外：灰白	22	34
61	弥生土器	鉢	第2面上部 合層	(149)	10(8)		口縁部 若干	外面：口縁部に2本の凹線。その直下に1条の 縁部刻文。胴部ヘラミギキ。把手部に赤 彩。内面：ハケ	φ-0.5mmのチャート・長石・ 角閃石・黒母を少し含む	普通	内：浅黄褐色 外：灰白	22	34
62	弥生土器	鉢	SK63 上部	(151)	6(7)		口縁部 1/6	外面：口縁部に2本の凹線。その直下に1条の 縁部刻文。胴部ヘラミギキ。内面：ハケ	φ-0.5mmの長石・角閃石・ 黒母を少し含む	やや 不良	内：灰白 / 黄 外：浅黄褐色	22	34
63	弥生土器	鉢	第2面上部 合層		12(2)		底部 若干		φ-25mmの長石・チャート・ 石英・灰片を含む	やや 不良	内：浅黄褐色 外：灰白	22	34
64	弥生土器	高杯	第2面上部 合層	(346)	15(6)		口縁部 1/12	外面：杯部ヘラミギキ。内面：水平口縁部 ヘラミギキ。杯部ヘラミギキ	φ-2mmの長石・チャート・ 石英・黒母・角閃石を含む	やや 不良	内：黄 / 灰白 外：黄 / 灰白	22	35
65	弥生土器	高杯	F100	(284.9)	15(3)		口縁部 1/4	外面：垂下口縁部に3本の凹線。縁部刻文。 内面：杯部周りに1条の凹線	φ-3mmのチャート・長石・ 石英・黒母・角閃石を含む	やや 不良	内：黄 外：浅黄褐色 / 黄	22	34
66	弥生土器	高杯	SK218	(367)	23(5)		口縁部 1/4	外面：垂下口縁部。杯部、脚部にヘラミギキ。 内面：杯部からヘラミギキ。脚部シロリ目	φ-2mmの長石・長石・ チャート・角閃石を含む	普通	内：黄 外：黄 / 灰白	22	34
67	弥生土器	高杯	SK321		10(10)		口縁部 1/8	外面：ヘラミギキ。内面：シロリ目	φ-15mmの長石・石英・ 角閃石を含む	普通	内外：赤褐色	22	35
68	弥生土器	高杯	F286		10(35)		脚部 若干	内盤突端の接合面にイタナデか。外面：杯部 ハケ。胴部ヘラミギキ。内面：杯部イタナデ 胴部ヘラミギキ	φ-3mmの長石・石英・ 角閃石・灰片を含む	やや 不良	内：灰白・黄褐色 外：浅黄褐色	22	34
69	弥生土器	高杯	第2面上部 合層		10(6)		脚部 1/2	内盤突端の接合面にシロリ目。外面：脚部 にシロリ目。胴部上部から杯部にヘラミギキ。 内面：胴部ヘラミギキ	φ-1mmの長石・石英・ 角閃石・黒母を少し含む	普通	内外：黄	22	34
70	弥生土器	高杯	SH115 上部		15(1)		口縁部 1/4	外面：ヘラミギキ。内面：ヘラミギキ	φ-2mmの長石・石英を含む	普通	内：灰白 / 灰白 外：灰白 / 灰白	22	34
71	弥生土器	高杯	第1面上部 合層		8(55)		脚部 1/4	内口縁部。外面：ヘラミギキ。内面：シロリ 目。脚部にヘラミギキ	φ-0.5mmの角閃石・長石・ 黒母を含む	普通	内：灰白 外：浅黄褐色	22	34
72	弥生土器	高杯	SK358		10(3)		脚部 完全	内口縁部。外面：脚部上部に4本の浅い 凹線。脚部ヘラミギキ。内面：胴部ヘラミギキ	φ-1mmの長石・チャート・ 石英・黒母を含む	やや 不良	内：浅黄褐色 / 灰白 外：浅黄褐色 / 黒	22	35
73	弥生土器	高杯	SH4214		14(7)		脚部 1/6	外面：ハケ。内面：ヘラミギキ	φ-1mmの長石・石英・ 角閃石・黒母を含む	やや 不良	内外：灰白	22	35
74	弥生土器	高杯	SK218		16(6)		脚部 5/6	外面：上から、へら部2条以上の赤褐色。 断面文。内面：ヘラミギキ	φ-3mmの長石・長石・ 角閃石を含む	やや 不良	内：黄褐色 / 黄 / 灰 外：黄褐色 / 黄	22	35
75	弥生土器	高杯	F286		15(6)		脚部 完全	外面：杯部ヘラミギキ。胴部に3条以上の縦 線。内面：杯部ハケ。胴部ヘラミギキ	φ-2mmの長石・長石・ 石英・角閃石・黒母を含む	普通	内：浅黄褐色 外：灰白・黄褐色	22	35
76	弥生土器	高杯	F28		14(36)		杯部 1/2	外面：ヘラミギキ。内面：脚部上部シロリ目 後。脚部ヘラミギキ	φ-2mmの長石・石英・ チャートを含む	やや 不良	内：浅黄褐色 外：黄	22	35
77	弥生土器	複合土 器	SK218		8(4)		口縁部 1/6	底部と器台部の接合面の器台部にハケ。外面 器台部の口縁部に2条の凹線。キザミ目 の口縁部。内口縁部。2方向には縦セツの孔。 器台部に上から、へら部の断面文。2条の直 線文。斜線文。内面：ナデ。一部イタナデ	φ-0.5mmの黒母・長石を 含む	普通	内外：灰白	22	35
78	弥生土器	蓋	SD89 上部 / PI21 底部	(167)	7(2)		口縁部 1/6	外面：タテハケ。内面：イタナデ	φ-1.5mmのチャート・石 英・長石・角閃石を含む	やや 不良	内外：灰白・黄褐色 / 灰黄褐色	22	35
79	弥生土器	蓋	SK229		12(33)		つまみ 7/8		φ-1mmの長石・石英・ チャート・角閃石を含む	やや 不良	内：浅黄褐色 外：灰白 / 灰	22	35
80	弥生土器	蓋	SK309		13(3)		つまみ 完全	外面：ハケか。内面：シロリ目	φ-0.5mmの長石・石英・ 黒母・角閃石を含む	やや 不良	内：灰白 外：灰白	22	35
81	弥生土器	把手	SK322				把手 完全		φ-1mmのチャート・石英・ 長石を含む	やや 不良	内：灰白 外：黄 / 灰白	22	35

第1表 出土土器観察表(4)

番号	種類	器種	通体・部位	法量 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	採取	写真 10枚
				口径	器高	腹径							
82	弥生土器	高杯	SD2910 肩		12.7			外底：環状部へうしガキ。杯上り部ハケカ	φ～1.5mmのチャート・長石・石英・角閃石を含む	やや不良	内：灰白 外：にぶい黄褐色	22	35
83	煎茶器	坏缶	SD19 柱状土部		0.6	12.6	受部 1.9	外底：環状部へうしガキ	φ～1.5mmの長石・石英を含む	普通	内底：灰	23	36
84	煎茶器	坏缶	SD1238 側方		1.05		底面 1.2	外底：環状部へうしガキ	φ～1.5mmの長石・石英を含む	普通	内：灰白 / 灰 外：灰白 / 黄褐色	23	36
85	煎茶器	高杯	SD19	(13.2)	12.6		口縁部 1.10	外底：1条の沈線	φ～1mmの長石を含む	普通	内底：灰	23	36
86	煎茶器	高杯	SD1237 柱状土部		12.0		口縁部 若干	外底：横線の斜線文	φ～1mmの長石を含む	普通	内底：灰	23	36
87	煎茶器	高杯	SD15		1.2		頸部 若干		φ～1mmの長石・石英を含む	普通	内底：灰白	23	36
88	煎茶器	高杯	SD252 上部		12.0		頸部 1.10		φ～0.5mmの長石・石英を含む	普通	内底：灰白 / 灰	23	36
89	煎茶器	野付盃	SD252 上部		13.1		頸部 1.4	方形透かしの下に1条の沈線	φ～0.5mmの長石を含む	普通	内：灰白 外：灰白 / 灰	23	36
90	煎茶器	野付盃	SD46	(10.8)	15.7	(15.1)	口縁部 1.8	口唇部破面。外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・チャート・石英を含む	普通	内底：灰	23	36
91	煎茶器	高杯	SD278 / SK149	(14.0)	14.6		口縁部 1.5 脚部 2.5	外底：環状部1条の沈線。環状部底部に斜線へうしガキ。脚部に2条、脚部底部に1条の沈線後、それに合わせて、2方向に2段の長方形透かし。内底：脚部部にシボリ目	φ～2mmの長石・石英・チャートを含む	普通	内底：灰	23	37
92	土師器	小皿	SD46	19.3	1.75		口縁部 1.8 底面 1.4	外底：環状部へうしガキ	φ～1mmの長石・石英・角閃石・珪片を含む	普通	内底：にぶい黄褐色	23	37
93	土師器	碗	SD46		1.99		底面 3.4	外底：環状部へうしガキ後、イタナデカ	φ～4.5mmの石英・長石・チャート・角閃石・珪片を含む	普通	内：黄褐色 / にぶい黄褐色 外：灰白	23	37
94	土師器	碗	SD46		12.1		底面 3.5	外底：環状部へうしガキ後、イタナデカ	φ～1mmの長石を含む	普通	内：黄褐色 外：にぶい黄褐色	23	37
95	土師器	片持皿	SD46		12.3		底面 1.3	外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・角閃石を含む	普通	内：黄褐色 外：黄	23	37
96	土師器	片持皿	SD46		12.5		底面 3.4	外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・石英・角閃石を含む	やや不良	内：黄褐色 外：にぶい黄褐色	23	37
97	煎茶器	碗	SD46		13.4		底面 5.3	外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・チャート・角閃石を含む	不良	内底：灰白	23	37
98	煎茶器	碗	SD46		13.0		底面 5.3	外底：環状部へうしガキ後、イタナデカ。内底：環状部に重なる沈線。環状部破面	φ～1mmの長石・石英を含む	普通	内底：灰白 / 灰	23	37
99	煎茶器	碗	SD46		12.5		底面 5.7	外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・石英・チャートを含む	やや不良	内：灰 外：灰白	23	37
100	煎茶器	碗	SD46		14.1		底面 4.4	外底：環状部へうしガキ	φ～1mmの長石・長石・チャートを含む	普通	内底：灰	23	37
101	煎茶器	碗	SD46		13.2		底面 5.7	外底：環状部へうしガキ。内底：環状部に重なる沈線の土器片付着	φ～1.5mmの長石・チャートを含む	普通	内底：灰白 / 灰	23	37
102	煎茶器	碗	SD46	(14.2)	5.85		口縁部 若干 底面 1.2	外底：環状部へうしガキ	φ～0.5mmの長石を含む	普通	内：灰白 外：灰	23	37
103	煎茶器	碗	SD46	(15.6)	11.8		口縁部 1.5	外底：環状部へうしガキ	φ～1mmの長石・長石・石英を含む	普通	内底：灰白 / 灰	23	38
104	煎茶器	碗	SD46	(14.9)	(14.9)		口縁部 1.6	外底：口縁部に重なる沈線の沈線	φ～2mmの長石・石英を含む	普通	内底：灰	23	38
105	煎茶器	鉢	SD46 / SD45	(23.0)	10.8		口縁部 1.6	外底：環状部へうしガキ	φ～1.5mmの長石・長石を含む	普通	内：灰白 / 灰 外：灰白 / 灰 / 黄褐色	23	38
106	煎茶器	鉢	SD46		16.1		口縁部 1.6	外底：環状部に重なる沈線の沈線	φ～7mmのチャート・長石・石英・角閃石を含む	不良	内：黄褐色 外：灰	23	37
107	煎茶器	鉢	SD46		16.2		口縁部 1.4	外底：環状部に重なる沈線の沈線。内底：土部に点状沈線	φ～2mmの長石を少し含む	不良	内底：灰 / 灰白	23	37
108	煎茶器	鉢	SD46	(25.7)	16.6	(11.2)	口縁部 1.6	外底：環状部へうしガキ。内底：環状部に重なる沈線の沈線。内底：環状部に重なる沈線の沈線。内底：環状部に重なる沈線の沈線	φ～1mmの長石・チャートを含む	普通	内：灰 外：灰白 / 灰 外：灰白 / 灰	23	37
109	白磁	碗	SD46	(14.8)	13.8		口縁部 1.16	外底：環状部に重なる沈線の沈線。内底：環状部に重なる沈線の沈線	胎土：淡灰色 釉：灰黄色	良	胎土：淡灰色 釉：灰黄色	23	38
110	土師器	小皿	SD2910 肩	19.3	1.50		口縁部 1.4	手づくね。ての字取口縁	φ～1mmの長石・チャートを含む	普通	内底：灰白	24	38
111	土師器	小皿	SD2913-6 肩	(8.1)	0.9		口縁部 1/4 底面 1/4	外底：環状部へうしガキ	φ～2mmの長石・チャート・長石・角閃石を含む	やや不良	内底：黄 / 灰白	24	38
112	土師器	小皿	SD279	8.2	1.25		口縁部 3/4 底面 7/8	外底：環状部へうしガキ	φ～0.5mmの長石・角閃石を少し含む	普通	内底：にぶい黄褐色	24	39
113	土師器	小皿	SD2913-6 肩	(8.3)	1.45		口縁部 2/5 底面 1/2	外底：環状部へうしガキ後、イタナデカ	φ～1.5mmの長石・長石・チャート・角閃石を含む	普通	内底：黄 / 灰白	24	38

第1表 出土土器観察表(5)

番号	種類	器種	通体・部位	法量 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	図版	写真 図版
				口径	器高	底径							
114	土器部	小皿	SD2797 皿	8(6)	15	6.8	口縁部 1/5 底 部1/2	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの長石・石英・雲母・角閃石を含む	普通	内：浅黄褐色 外：灰白	24	39
115	土器部	小皿	SD2798 皿	8.5(5)	12(5)	6.6	完形	外面：底部回転ヘラ切り後、粘土割付着	φ～1.5mmの長石・石英・雲母・角閃石を含む	普通	内：浅黄褐色 外：浅黄褐色/にぶい黄	24	39
116	土器部	小皿	SD27911～ 13 皿	8(6)	17	6(5)	口縁部 1/4 底 部1/4	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの石英・長石・角閃石を含む	やや 不良	内外：灰白	24	38
117	土器部	小皿	SD27910 皿	8(2)	16(5)	6(4)	口縁部 1/4 底 部1/4	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・チャート・角閃石・雲母を含む	普通	内：にぶい黄 外：灰黄褐色	24	38
118	土器部	小皿	SD27919 皿	7(3)	12(5)	6(4)	口縁部 1/4 底 部1/4	外面：底部回転ヘラ切り後、粘土割付着	φ～0.5mmの長石・石英・角閃石を含む	普通	内：にぶい黄褐色 外：にぶい黄	24	38
119	土器部	小皿	SD27910 皿	8(7)	16	6(4)	口縁部 1/5 底 部1/2	外面：底部回転ヘラ切り後、粘土割付着	φ～0.5mmの長石・チャート・角閃石・雲母を含む	やや 不良	内：にぶい黄 外：にぶい黄	24	38
120	土器部	杯	SD2793～6 皿	(147)	36(5)	87	口縁部 1/4 底 部完形	外面：底部回転ヘラ切り	φ～2mmのチャート・石英・長石・角閃石を多く含む	やや 不良	内：灰白/黒褐色 外：黄/灰白/黒褐色	24	39
121	土器部	杯	SD279		1(8.5)	81	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・チャート・角閃石を含む	やや 不良	内：にぶい黄/浅黄褐色 外：浅黄褐色	24	40
122	土器部	杯	SD279		6(8)	82	底面 3/4	外面：底部回転ヘラ切り後、イタナデ	φ～2mmの長石・チャート・角閃石を含む	やや 不良	内：にぶい黄 外：灰白	24	40
123	土器部	杯	SD27910 皿	(116)	37	53	口縁部 1/4 底 部1/2	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの角閃石・チャート・長石を含む	やや 不良	内：灰白 外：浅黄褐色	24	40
124	土器部	杯	SD279		6(2.3)	79	底面 2/3	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・チャート・角閃石を含む	やや 不良	内外：浅黄褐色	24	40
125	土器部	杯	SD2793～6 皿		6(9.9)	78	底面 7/8	杯・蓋注ぎ。外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・角閃石を少し含む。底面にφ0.5mmの岩片付着	やや 不良	内外：黄/浅黄褐色	24	40
126	土器部	碗	SD27911～ 13 皿		1(7)	6(6)	口縁部 1/4	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・角閃石を少し含む	やや 不良	内：にぶい黄褐色 外：灰黄褐色/にぶい黄褐色	24	40
127	土器部	碗	SD27910 皿		3(8.5)	76(5)	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り。内面：ハケか	φ～1mmの長石・雲母・角閃石を含む	普通	内：灰白 外：灰白	24	39
128	土器部	碗状皿	SD279		6(2.2)	43(5)	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り	φ～0.5mmの長石・角閃石・雲母・チャートを含む	やや 不良	内：灰白 外：浅黄褐色	24	39
129	土器部	甕	SD27910 皿			1(6.5)	口縁部 若干 底面 若干	内面：下部にケズリ痕。ハケ。炭化物付着	φ～0.5mmのチャート・石英・長石を多く含む	良	内：灰黄褐色 外：黒褐色	24	40
130	土器部	大鉢	SD2793～6 皿 SA1P222		(12.65)		口縁部 若干 底面 若干	内面：下部にケズリ痕。ハケ。炭化物付着	φ～0.5mmの長石・石英・チャート・岩片を多く含む	普通	内：にぶい黄/黒 外：黒褐色/黄	24	40
131	土器部	高杯	SD27911 皿		1(13.9)		口縁部 1/4 底 部完形	中央の孔はφ15mm。上縁の杯蓋との接合面にユビ状すき。外面：ヘラケズリ	φ～2mmの長石・チャート・石英・角閃石を含む	やや 不良	内外：明褐色/黄	24	40
132	煎茶器	碗	SD27910 皿		2(5.5)	46	口縁部 1/2	外面：底部回転ヘラ切り。黒色の揮着物付着。内面：塗付着	φ～2mmの長石・石英を含む	普通	内：灰白 外：灰	24	40
133	煎茶器	碗	SD279		2(8.5)	63(5)	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り。杯・布圧痕。内面：底面に重ね焼きの土器片付着	φ～1mmの長石・石英を含む	普通	内外：灰	24	41
134	煎茶器	碗	SD2797 皿		1(4)	59	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの石英を含む	普通	内外：灰白	24	41
135	煎茶器	碗	SD2797 皿		6(7)	58	底面 2/3	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの石英・長石・岩片を含む	普通	内：灰 外：灰白	24	41
136	煎茶器	碗	SD27910 皿		1(8)	6(6)	口縁部 1/3	外面：底部回転ヘラ切り後、イタナデ	φ～2mmの長石を含む	普通	内外：灰	24	41
137	煎茶器	碗	SD27911 皿	(144)	58	6(5)	口縁部 1/4 底 部完形	口縁部に重ね焼きの色調差。外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの石英を少し含む	普通	内：灰白 外：灰白/灰	24	42
138	煎茶器	碗	SD27910 皿		1(8)	49	底面 3/4	外面：底部回転ヘラ切り	φ～2mmの石粒を含む	普通	内外：灰白	24	41
139	煎茶器	碗	SD2793～6 皿		1(8)	57	底面 2/5	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの石英・チャートを含む	やや 不良	内外：灰白	24	41
140	煎茶器	碗	SD2793～6 皿		3(8.5)	6(1)	底面 1/3	外面：底部回転ヘラ切り後、イタナデ。内面：底面磨減	φ～0.4mmのチャート・長石・石英を多く含む	普通	内外：灰白	24	41
141	煎茶器	碗	SD2793～6 皿		3(8)	64	底面 完形	外面：底部回転ヘラ切り。内面：底面磨減	φ～1mmの石英・長石を含む	不良	内外：灰白	24	41
142	煎茶器	碗	SD2793～6 皿		1(9.5)	54	底面 3/5	外面：底部回転ヘラ切り	φ～2mmの長石・石英・岩片を含む	普通	内外：灰白	24	41
143	煎茶器	碗	SD2793～6 皿		1(1.29)	62	底面 1/2	外面：底部回転ヘラ切り	φ～1mmの長石・石英を少し含む	普通	内外：灰白	24	41
144	煎茶器	碗	SD279		6(2.2)	64(5)	底面 7/8	外面：底部回転ヘラ切り後、輪高ナデ付。底面磨減。塗付着	φ～1mmの長石・石英を含む	普通	内外：灰白	24	41
145	煎茶器	碗	SD2793～6 皿	(13.9)	3(2.5)		口縁部 1/8	外面：口縁部に重ね焼きの色調差	φ～0.5mmの石英・チャート・長石を含む	やや 不良	内外：灰白	24	41

第1表 出土土器観察表(6)

番号	種類	器種	通体・部位	法量 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	採取	写真 10枚
				口径	高さ	腹径							
146	煎茶器	碗	SD279	(16.0)	6.0			口縁部 1.6	外面：口縁部に黒い焼むき色調差	普通	内緑：灰	24	41
147	煎茶器	碗	SD279	(10.2)	3.45		5.05	口縁部 1/4 底部 底面	外面：底部回転へう切り	普通	内緑：灰白	24	42
148	煎茶器	碗	SD2910 10	9.8	3.5		4.75	口縁部 7/8 底部 底面	外面：底部回転へう切り	普通	内緑：灰 / 灰白	24	42
149	煎茶器	碗	SD279/ SK149	9.0	3.15		4.0	口縁部 1/2 底部 底面	外面：底部回転へう切り	普通	内緑：灰	24	42
150	煎茶器	碗	SD293-6 14	(8.3)	2.25		(4.8)	口縁部 1/4 底部 1/4	外面：底部回転へう切り	普通	内：灰白 外：灰白 / 灰 / 焼灰	24	41
151	煎茶器	盃	SD2911-13 13		(2.8)		(9.8)	底部 1.9	外面：底部回転へう切り	普通	内：灰白 外：灰	24	41
152	煎茶器	盃	SD279	7.8	(10.4)			口縁部 2.3	内面：腹部シワの目	普通	内：灰白 外：灰	24	42
153	煎茶器	茶	SD279		(5.3)			口縁部 右	外面：口縁部縁の下に面をもち、2条の沈線、 底部にヨコウケ後、沈線の斜線文。その上に 沈線で2条の曲線文	普通	内緑：灰	24	42
154	煎茶器	茶	SD293-6 14	(9.7)	(9.5)			口縁部 若干	外面：腹部格子タタキ後、ナナ割し。腹部格 子タタキ。	やや 不良	内緑：灰白	24	42
155	煎茶器	茶	SD297 14		(9.4)			口縁部 1.1	外面：腹部格子タタキ後、ナナ割し。腹部格 子タタキ。内面：腹部格子タタキ後、 ナナ割し。内面：腹部格子タタキ後、 ナナ割し。	普通	内：灰白 外：灰	24	42
156	煎茶器	風子碗	SD2911-13 13	長 (10.8)	幅 (9.4)	厚 1.30		1/4	全面ヘラケツリ。裏面：押圧痕	普通	内：灰白 外：灰白 / 灰	25	43
157	瓦器	碗	SD297 14		(1.1)		(6.8)	口縁部 1.3	外面：底部に台形の輪高台をナメ付け	やや 不良	内緑：灰	25	43
158	瓦器	碗	SD297 14		(1.25)		4.4	口縁部 3.4	外面：底部に輪高台をナメ付け	不良	内緑：灰白	25	43
159	白磁	碗	SD297 14		(3.5)		6.6	口縁部 1.2	外面：全体に平行タタキ状の痕跡。底部割り 出し高台。内面：底部に沈線	良	胎土：灰白色 釉：灰白色の透明	25	43
160	白磁	碗	SD2910 10		(1.4)		3.8	口縁部 1.2	外面：底部割り出しの輪高台。内面：足込み 外縁に口縁部が薄くなる段	良	胎土：灰白色 釉：灰白色の透明	25	43
161	白磁	皿	SD297 14	(11.9)	(3.4)			口縁部 1.6	外面：6方向にへう押し状の痕跡。下部回転ヘラ ケツリ。内面：口縁部縁が薄くなる段	良	胎土：淡灰色 釉：淡灰色	25	43
162	白磁	円盤	SD2911-13 13		(3.6)			若干	口縁部を内面から割離し、φ3.6cmの円筒状 に加工。縁に細かな割れ。外面：押圧痕	良	胎土：淡灰色 釉：淡灰色	25	43
163	土器	小皿	SD45	(8.0)	1.25			口縁部 2.5	手づくね。で字状口縁。外面：押圧痕	普通	内緑：灰白 / 灰 外：洗青	25	44
164	土器	小皿	SD45	(8.2)	1.55		(6.5)	口縁部 若干 底部 1.2	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
165	土器	小皿	SD45	(8.7)	1.55		(6.6)	口縁部 1/4 底部 1/4	外面：底部回転へう切り	普通	内：洗青 外：灰白	25	44
166	土器	小皿	SD45	(9.1)	1.5		6.1	口縁部 1/7 底部 底面	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
167	土器	小皿	SD45	(8.7)	1.4		6.4	口縁部 若干 底部 底面	外面：底部回転へう切り	普通	内：灰白 外：洗青	25	44
168	土器	小皿	SD45	(9.0)	1.5		(6.8)	口縁部 1/8 底部 1/4	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
169	土器	小皿	SD45	(9.9)			6.2	口縁部 2.3	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
170	土器	杯	SD45	(2.4)			8.4	口縁部 1.4	外面：底部回転へう切り後、イタナサカ	普通	内：洗青 外：灰白	25	44
171	土器	杯	SD45	(2.5)			(8.1)	口縁部 1.4	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
172	土器	杯	SD45	(2.1)			(7.4)	口縁部 1.6	外面：底部回転へう切り	不良	内：洗青 外：灰白	25	44
173	土器	杯	SD45	(11.3)			8.0	口縁部 1.2	外面：底部回転へう切り	普通	内：洗青 外：灰白	25	44
174	土器	杯	SD45	(1.8)			6.9	口縁部 1.2	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：洗青 / 灰	25	44
175	土器	民具	SD45	(2.3)			(6.4)	口縁部 1.4	外面：底部回転へう切り	やや 不良	内：洗青 外：灰白	25	44
176	土器	民具	SD45	(1.9)			4.35	口縁部 2.3	外面：底部回転へう切り	普通	内：洗青 外：洗青 / 灰白	25	44
177	土器	茶	SD45	(2.5)	(5.5)			口縁部 1.12	内面：口縁部イタナサカ	良	内：洗青 / 灰 外：洗青 / 灰白	25	44

第1表 出土土器観察表(7)

番号	種別	器種	遺構・部位	法量 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	内装	写真 図版
				口径	器高	腹径							
178	煎茶器	碗	SD45	(156)	35		口縁部1/5	口縁部に重ね焼きの色調差	φ-1mmの石英・チャート・長石・角閃石を含む	やや不良	内：灰白/灰 外：灰白/暗灰	25	45
179	煎茶器	碗	SD45		28		底面1/2	外面：底部同軸糸切り。内面：底部に重ね焼きの土器片付着	φ-1mmの長石を含む	普通	内：灰・青・灰白	25	45
180	煎茶器	碗	SD45		135	85	底面2/5	外面：底部同軸糸切り後、イタナデ。内面：底部同軸	φ-1mmの長石・チャートを含む	普通	内外：灰	25	45
181	煎茶器	碗	SD45		26		底面1/4	外面：底部同軸糸切り	φ-1.5mmの長石・石英を含む	普通	内外：灰 外：灰白/灰	25	45
182	煎茶器	碗	SD45		135		底面1/3	外面：底部同軸糸切り	φ-1.5mmの長石・チャートを含む	普通	内外：灰	25	45
183	煎茶器	鉢	SD45	(238)	38	(221)	口縁部1/12	内面：口縁部に重ね焼きの色調差	φ-2.5mmのチャート・長石を含む	普通	内外：灰	25	45
184	煎茶器	茶	SD45		55		底面若干	外面：イタナデ。上端部平行タタキ。内面：ハケ	φ-1mmの長石・角閃石を含む	普通	内：にぶい黄腹 外：灰白	25	45
185	白磁	碗	SD45		25		底部若干	外側に貫入。外面：下端部縁起。内面：短い横目文	粗。微少な黒腹あり	良	胎土：灰白色 釉：灰緑色味の透明	25	45
186	白磁	皿	SD45	(119)	24		口縁部1/12	輪に細かい貫入。外面：へう状縁起。内面：口縁部縁起が薄くなる段	密。微少な黒腹あり	良	胎土：淡黄灰色 釉：少し水色味をおよぶ白色	25	45
187	白磁	皿	SD45		106		口縁部1/2	輪に細かい貫入。外面：全面施釉。底部同軸ヘラタタキ。内面：口縁部縁起が薄くなる段	粗。微少な黒腹あり	良	胎土：灰白色 釉：黄灰色	25	45
188	煎茶器	碗	SD45		175		底面2/5	外面：底部同軸糸切り。内面：底部に重ね焼きの土器片付着	φ-1mmの石英・チャート・長石を含む	普通	内外：灰白	25	46
189	瓦器	碗	SD45/SB477	(166)	59		底面若干	外面：底部に台形の輪高台をナデ付け。内面：口縁部に1条の横方向からの深い沈線	φ-0.5mmの黒目少し含む	やや不良	内外：灰	25	46
190	白磁	皿	SD45	(107)	24		口縁部1/4	外面：口縁近くまで同軸ヘラタタキ。内面：口縁部縁起が薄くなる段	密。気泡あり	良	胎土：淡灰色 釉：少し水色味をおよぶ白色	25	46
191	煎茶器	碗	SD45		135		底面2/5	外面：底部同軸糸切り	φ-1mmの石英・チャートを含む	不良	内外：灰白	25	46
192	煎茶器	碗	SD45		175		底面1/5	外面：底部同軸糸切り	φ-2mmの長石・チャートを含む	普通	内外：灰白	25	46
193	煎茶器	碗	SD45	(146)	53		口縁部1/8 底面若干	外面：底部同軸糸切り。口縁部に重ね焼きの色調差	φ-2mmの石英を含む	普通	内外：灰白	25	46
194	土器	小皿	SD47	98	13		口縁部1/6	手づくね。ての字状口縁	φ-1mmの石英・長石・角閃石・黒目を含む	やや不良	内外：淡黄	26	46
195	土器	小皿	SD47 上部	97	14		口縁部1/5	手づくね	φ-0.5mmの角閃石・黒目を含む	普通	内外：灰白	26	46
196	土器	小皿	SD47	(149)	38		口縁部1/6	外面：底部同軸ヘラタタキ。内面：口縁部縁起が薄くなる段	φ-0.5mmの角閃石・長石・黒目を含む	普通	内：黄腹 外：にぶい黄腹	26	46
197	土器	花状皿	SD47 上部	20	58		底面若干	外面：底部同軸ヘラタタキ	φ-1mmの長石・石英・角閃石を含む	普通	内：黄腹 外：にぶい黄腹	26	46
198	土器	皿	第1面上包合層	(156)	24		口縁部1/8	手づくね	φ-1mmの長石・長石・黒目を含む	普通	内：黄腹 外：にぶい黄腹	26	46
199	土器	小皿	SD47106	97	15		口縁部3/4	手づくね。ての字状口縁。内面：口縁部2ヶ所に黒色の帯状物付着	φ-0.5mmの黒目少し含む	普通	内外：黄腹/淡黄	26	46
200	土器	小皿	第2面上包合層(最入部)	86	18		口縁部1/4	手づくね。ての字状口縁	φ-1mmの長石・石英を含む	普通	内：にぶい黄 外：黄	26	46
201	土器	小皿	SD47153	94	18		口縁部1/4 底面1/4	外面：底部同軸ヘラタタキ。口縁部に炭化物付着	φ-1mmの石英・角閃石・角閃片を含む	やや不良	内外：灰白	26	46
202	土器	小皿	SD47128	77	135		口縁部1/3 底面1/2	外面：底部同軸ヘラタタキ後、イタナデ	φ-1mmの長石・チャート・石英・角閃石を含む	普通	内外：灰白/黄	26	46
203	土器	小皿	第1面上包合層	(896)	155		口縁部1/3 底面3/4	外面：底部同軸ヘラタタキ後、イタナデ	φ-2mmの長石・角閃石・チャート・角閃片を含む	普通	内：黄 外：にぶい黄	26	47
204	土器	小皿	SD4796	80	13		口縁部3/4 底面若干	外面：底部同軸糸切り	φ-0.5mmの長石・角閃石・石英を含む	やや不良	内外：にぶい黄	26	47
205	土器	小皿	P27	77	12		口縁部1/3 底面1/4	外面：底部同軸糸切り	φ-1mmの長石・角閃石を含む	やや不良	内外：にぶい黄	26	48
206	土器	小皿	第1面上包合層	88	17		口縁部1/3 底面2/3	外面：底部同軸糸切り	φ-2mmの長石・チャート・角閃石・石英・黒目を含む	やや不良	内：にぶい黄 外：黄/灰白	26	47
207	土器	小皿	SD47254 上部	72	125		口縁部1/4 底面1/4	口縁部に黒色の帯状物付着	φ-1.5mmの長石・角閃石・石英を含む	やや不良	内外：黄	26	48
208	土器	小皿	SD85 上部	(106)	185		口縁部1/5 底面1/4	口縁部に黒色の帯状物付着	φ-1.5mmの長石・角閃石を含む	普通	内：にぶい黄/灰腹 外：黄/黄腹	26	48

第1表 出土土器観察表(8)

番号	種類	器種	通体・部位	法長 (cm)			残存率	技法・その他の特徴	胎土	焼成	色調	採取	写真 図版
				口径	器高	腹径							
209	土器	小皿	横溝	8.25	1.6	5.6	口縁部 3/4 底 部 1/3	網目肌	φ ~ 0.5mmの長石・角閃石・ 雲母を少し含む	やや 不貞	内朽：浅黄褐色	26	47
210	土器	小皿	P225		1.08	6.8	底面 1/3		φ ~ 2mmの長石・チャート・ 角閃石を含む	普通	内朽：黄	26	48
211	土器	小皿	横溝	7.4	1.7	4.9	口縁部 1/8 底 部 1/8		φ ~ 1mmの長石・角閃石を 含む	普通	内：黄 外：浅黄褐色	26	48
212	土器	小皿	SES133	8.7	1.6	6.8	口縁部 1/6 底 部 1/3	外面：底部回転糸切り	φ ~ 1mmの長石・角閃石・ 石炭・雲母を含む	普通	内朽：にぶい黄 / 黄	26	48
213	土器	杯	華1面上部 含層	14.6	3.3	9.5	口縁部 1/4 底 部 1/2	外面：底部回転ヘラ切り後、イタナデ	φ ~ 1mmのチャート・長石・ 角閃石・雲母を含む	普通	内：黄褐色 / 灰白 外：黄	26	48
214	土器	杯	SB4P15		1.8	7.4	底面 1/2	外面：底部回転ヘラ切り	φ ~ 1mmの長石・石炭・角 閃石・雲母を含む	普通	内：にぶい黄褐色 外：浅黄褐色 / 黄	26	48
215	土器	杯	SK132	12.2	7.8	7.8	底面 1/4	外面：底部イタナデ	φ ~ 0.5mmの角閃石・雲母・ 長石を含む	やや 不貞	内：にぶい黄 外：灰白	26	48
216	土器	杯	SB4S 上部		1.8	4.95	底面 完全	外面：底部回転ヘラ切り	φ ~ 3mmのチャート・長石・ 角閃石を含む	やや 不貞	内：浅黄褐色 外：にぶい黄	26	48
217	土器	杯	P233 上部		12.49	5.9	底面 7/8	外面：底部回転ヘラ切り	φ ~ 1mmの角閃石・長石・ 石炭・雲母を含む	普通	内：にぶい黄 外：灰白 / 浅黄褐色	26	47
218	土器	杯	SL273	8.3	2.3	5.2	口縁部 1/10 底 部 1/2	外面：底部回転ヘラ切り	φ ~ 1.5mmの長石・角閃石・ 石炭を含む	普通	内：浅黄褐色 外：にぶい黄	26	47
219	土器	杯	P35	12.2	5.45	底面 完全	底面 1/4	外面：脚台部タテハケ。底部回転糸切り	φ ~ 1mmの長石・角閃石・ 石炭を含む	普通	内：浅黄褐色 外：灰白 / 浅黄褐色	26	48
220	土器	杯	P216	10.99	6.8	底面 1/4	底面 1/4	外面：底部回転ヘラ切り。内面：底部磨減	φ ~ 1mmの長石・石炭を含む	普通	内朽：灰白	26	48
221	土器	杯	華1面上部 含層	12.89	6.3	底面 1/2	底面 1/2	外面：底部回転糸切り	φ ~ 0.5mmの長石・石炭を含む	普通	内朽：灰白	26	48
222	土器	杯	華1面上部 含層	12.79	5.6	底面 1/2	底面 1/2	外面：底部回転糸切り	φ ~ 1mmの長石を少し含む	普通	内朽：灰白	26	48
223	土器	杯	SB4P77	12.2	5.4	底面 1/2	底面 1/2	外面：底部回転糸切り	φ ~ 3mmの石炭を多く含む	やや 不貞	内朽：灰白	26	48
224	土器	杯	華1面上部 含層	12.19	6.15	底面 2/3	底面 2/3	厚付。外面：底部回転糸切り	φ ~ 1mmの石炭・長石を含む	内：灰 / 灰白 外：灰白	26	48	
225	土器	杯	P162	12.8	6.9	底面 1/6	底面 1/6	外面：底部回転糸切り	φ ~ 1mmの石炭を多く含む	やや 不貞	内朽：灰白	26	48
226	土器	杯	横溝	12.49	5.9	底面 2/3	底面 2/3	外面：底部回転糸切り	φ ~ 2.5mmの石炭・長石・ チャート・角閃石を多く 含む	やや 不貞	内朽：灰白	26	48
227	土器	杯	SB4P194	1.89	5.05	底面 1/2	底面 1/2	外面：底部回転糸切り	φ ~ 2.5mmの石炭・長石を 含む	普通	内：灰白 外：明赤灰	26	48
228	土器	杯	SES245	12.8	6.2	底面 完全	底面 完全	外面：底部回転糸切り	φ ~ 1.5mmの角閃石・石炭 を含む	不貞	内朽：灰白	26	48
229	土器	杯	横溝	1.89	7.4	底面 完全	底面 完全	外面：底部回転糸切り後、輪高ハナデ付。内面：底部に重ね替りの色調差	φ ~ 1mmの長石・石炭を多 く含む	普通	内：灰白 外：灰白 / 灰	26	48
230	土器	杯	P123 杯面上部	13.2	12.4	口縁部 1/9	口縁部 1/9	口縁部に重ね替りの色調差	φ ~ 1mmの長石・石炭を含む	普通	内朽：灰白 / 灰 / 暗灰	26	49
231	土器	杯	華1面上部 含層	13.5	14.59	口縁部 若干	口縁部 若干		φ ~ 1.5mmの長石・石炭を 含む	普通	内：灰白 外：灰	26	49
232	土器	杯	華1面上部 含層	12.7	14.49	口縁部 1/6	口縁部 1/6		φ ~ 1mmの長石・石炭を含む	普通	内朽：灰白	26	49
233	土器	杯	SES219	13.8		口縁部 若干	口縁部 若干		φ ~ 0.5mmの長石を含む	普通	内朽：灰白 / 灰	26	49
234	土器	杯	華1面上部 含層	16.4		口縁部 若干	口縁部 若干		φ ~ 2.5mmの石炭・長石・ チャートを含む	普通	内朽：灰	26	49
235	土器	杯	SB4S 上部 / 華1面上部 含層	10.2	8.39	口縁部 1/6	口縁部 1/6		φ ~ 5mmの長石・チャート を含む	普通	内朽：灰白	26	49
236	土器	美	SB1P92 上部	6.69		18.8	底面 1/9	外面：腹部に細かい水目が入る平行タタキ。底部と腹部の接合部がひび割れ。底部に粒状の10mm程度の石片付。内面：腹部に粒状の接合部。底部に粒状のタタキ付。	φ ~ 1.5mmの長石・チャート を少し含む	普通	内：灰白 外：灰白 / 灰オリーブ	26	49
237	瓦器	杯	SB4P108 / SB4P77	13.7	4.9	5.6	口縁部 1/9 底 部 1/9	外面：腹部にタタキ目状の模様。右側の輪高ハナデ付。全体に平ハナデ付。内面：ハナデ付。口縁部に1本の横溝付。内面の上部に泥。外面：腹部にタタキ目状の模様。右側の輪高ハナデ付。全体に平ハナデ付。内面：ハナデ付。口縁部に1本の横溝付。内面の上部に泥。	φ ~ 0.5mmの雲母を少し含 む	やや 不貞	内：暗灰 / 灰 外：灰白 / 灰	26	49
238	白磁	皿	華1面上部 含層	10.0	12.7	口縁部 1/6	口縁部 1/6	外面：上部のみ輪軸。下部回転ヘラケズリ。内面：口縁部磨の滑くなる段	滑。気泡あり。微小な黒 点あり	良	胎土：灰白色 釉：黄灰色	26	49
239	白磁	杯	P119	1.89		6.9	底面 1/4	外面：腹部にタタキ目状の模様。右側の輪高ハナデ付。全体に平ハナデ付。内面：ハナデ付。口縁部に1本の横溝付。内面の上部に泥。外面：腹部にタタキ目状の模様。右側の輪高ハナデ付。全体に平ハナデ付。内面：ハナデ付。口縁部に1本の横溝付。内面の上部に泥。	粗。	良	胎土：浅黄灰色 釉：灰白色の透明	26	49

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定（AMS）

株式会社古環境研究所

1. はじめに

関ノ口遺跡は、兵庫県姫路市網干区和久地内に所在する。発掘調査において土坑やピットが検出されている。ここでは、これらの遺構で採取された試料について放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代に関する資料を得る。

2. 試料

測定の対象となった試料は、北壁 29 層より採取された堆積物、SX388 より出土した炭化材、SH1P379 より出土した木片、SB1P233 より出土した木片、SB4P71 より出土した木片の 5 点である。

第2表 測定試料及び処理

試料番号	調査番号	出土遺構	層位	試料	前処理・調整	測定法
1	2019024		29 層	土塊	酸処理 (HCl)	AMS
2	2019024	SX388		炭化材	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
3	2019024	SH1P379		木材	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
4	2019024	SB1P233	36 層	木材	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
5	2019024	SB4P71	28 層	木材	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 方法

(1) 化学処理

木片については、試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第9表に記載する。

炭化物については、試料の付着物を取り除いた後、酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。酸処理には 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用い、第9表に「HCl」と記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 測定

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置を使用し、14C の計数、13C 濃度 ($13C/12C$)、14C 濃度 ($14C/12C$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 ($HOx II$) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(3) 算出

① $\delta 13C$ は、試料炭素の 13C 濃度 ($13C/12C$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である。

② 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach, 1977)。14C 年代は $\delta 13C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

③ 暦年較正年代とは、得られた 14C 年代値と年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線とを照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta 13C$ 補正を行い、下 1 桁を丸めた 10 年単位の 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース (Reimer et al. 2020) を用い、BetaCal5.0 較正プログラムを使用する。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

4. 結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ($14C$) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第 3 表にこれらの結果を示す。

第3表 測定結果

試料番号	測定 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	未補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
1	691185	-22.96	2450 $\pm$ 30	2480 $\pm$ 30	596-543 cal BC (21.4%)	772-478 cal BC (95.4%)
					653-607 cal BC (18.0%)	
					756-719 cal BC (14.5%)	
					709-680 cal BC (11.3%)	
					670-662 cal BC (3.0%)	
2	691186	-11.73	1860 $\pm$ 30	2080 $\pm$ 30	119-46 cal BC (57.4%)	175-26 cal BC (89.3%)
					150-133 cal BC (10.8%)	19 cal BC-8 cal AD (6.1%)
3	691187	-26.52	1100 $\pm$ 30	1070 $\pm$ 30	974-1022 cal AD (53.2%)	944-1026 cal AD (71.7%)
					900-916 cal AD (15.0%)	893-928 cal AD (23.7%)
4	691188	-24.38	1480 $\pm$ 30	1490 $\pm$ 30	558-605 cal AD (64.4%)	545-642 cal AD (95.4%)
					628-633 cal AD (3.8%)	
5	691189	-26.69	1170 $\pm$ 30	1140 $\pm$ 30	914-976 cal AD (52.2%)	870-992 cal AD (82.2%)
					883-902 cal AD (16.9%)	827-862 cal AD (8.9%)
						776-788 cal AD (4.3%)

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元, BC: 紀元前

5. 所見

放射性炭素年代測定の結果、北壁 29 層の堆積物は、補正 ^{14}C 年代が 2480 ± 30 年 BP、 2σ の暦年較正值は 772 cal BC ~ 478 cal BC (95.4%) であった。SX388 で出土した炭化材は、補正 ^{14}C 年代が 2080 ± 30 年 BP、 2σ の暦年較正值は 175 cal BC ~ 26 cal BC (89.3%)、19 cal BC ~ 8 cal AD (6.1%) であった。SH1P379 で出土した木片は、補正 ^{14}C 年代が 1070 ± 30 年 BP、 2σ の暦年較正值は 944 cal AD ~ 1026 cal AD (71.7%)、893 cal AD ~ 928 cal AD (23.7%) であった。SB1P233 (36 層) で出土した木片は、補正 ^{14}C 年代が 1490 ± 30 年 BP、 2σ の暦年較正值は 545 cal AD ~ 642 cal AD (95.4%) であった。SB4P71 (28 層) で出土した木片は、補正 ^{14}C 年代が 1140 ± 30 年 BP、 2σ の暦年較正值は 870 cal AD ~ 992 cal AD (82.2%)、827 cal AD ~ 862 cal AD (8.9%)、776 cal AD ~ 788 cal AD (4.3%) であった。

【引用文献】

- Reimer, P.J. et al. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon 62(4), 725-757.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363.

第2節 樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

関ノ口遺跡は兵庫県姫路市網干区に位置する。これまでの発掘調査では弥生時代から中世の集落跡が確認されている。本分析調査では、出土した木製品の樹種同定を行うことで木材の利用や周辺の植生を考察する。

2. 試料

試料は関ノ口遺跡から出土した木製品4点である。木製品は全て柱根の一部である。試料の詳細は結果とともに第4表に示す。

3. 分析方法

材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標準および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東(1982)、Wheeler 他編(1998)、Richter 他編(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

4. 結果

結果を第4表に示す。検出された樹種はカヤ、ヒノキ、トネリコ属であった。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。W3は、材の保存状態が悪く、組織がはっきりと観察できなかったため「？」を表記している。

第4表 樹種同定結果

調査番号	資料番号	出土遺構	器種	樹種
2019024	W1	SA3P16	柱根の一部	カヤ
2019024	W2	SB4P71	柱根の一部	カヤ
2019024	W3	SB1P233	柱根の一部	ヒノキ?
2019024	W4	SH1P379	柱根の一部	トネリコ属

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ? (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher?) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔

はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。木材の保存状態が悪く、分野壁孔がはっきりしない箇所が多いことからヒノキ?にした。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

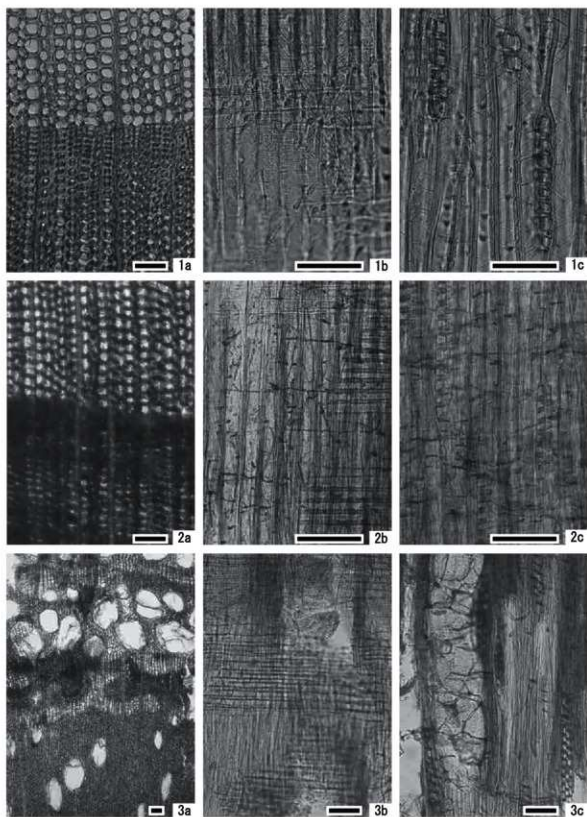
5. 考察

今回出土した木材は柱根の一部で、2点がカヤ、ヒノキとトネリコ属は1点ずつであった。カヤは、成長が遅く、木目は緻密で重硬。保存性は高い。また、水湿によく耐える。用途は広く、建築材や浴室用材などに利用されるほか、木目が緻密であることから細工や彫刻に用いられる。ヒノキは、やや軽軟で水湿に強い。樹木が高い巨木となるため、太くまっすぐな材が得やすい有用材である。そのため、用途は広く、建築材や施設材、家具材、器具材などに利用される。トネリコ属は、やや重硬で、韧性・弾力性に富み、耐朽性は普通である。弾力性に富み、木目も美しいため、器具材、土木・建築材等に使われる。弾力性が必要な木製品(野球のバット)などにつかわれることも多い。

検出された木材は、人里近くの林縁や河畔などに多い種類で、特にヒノキやトネリコ属は多湿を好む傾向にある。遺跡の立地から考えて、周辺に生育し、容易に入手可能な樹種であったと思われる。また、出土木製品用材データベース(伊東・山田編2012)をみると、県内ではカヤとヒノキは木柱として使われた事例が多数存在し、トネリコ属は柱材としての出土はないが、施設材として、多くの利用例がある。

【引用文献】

- 林 昭三.1991.日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81-181.
伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83-201.
伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.20-166.
伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47-216.
伊東隆夫・山田昌久(編)2012.木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社.449p.
Richter H.G.Grosser D.Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006.針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修).海青社.70p. [Richter H.G.Grosser D.Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
高地 謙・伊東隆夫.1982.図説木材組織.地球社.176p.
Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (編).1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修).海青社.122p. [Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. カヤ属 (No. 2 P71)
2. ヒノキ (No. 3 P233)
3. トネリコ属 (No. 4 P379)

a: 木口 b: 柾目 c: 板目
スケールは100 μ m

第9図 木材

第5章 総括

第1節 関ノ口遺跡第7次調査区の遺跡の変遷

古墳時代については次節で詳述するため、それ以外の時代の関ノ口遺跡第7次調査区について述べる。関ノ口遺跡では発掘調査が継続しており、それらの成果を踏まえて遺跡の評価を行う必要があり、今後見直される必要があるところも少なくないだろうが、現状での評価としてここでまとめる。

1. 弥生時代中期後葉以前

弥生時代中期後葉をさかのぼる遺構・遺物がいくつか確認された。遺構としては第4面で検出された溝・土坑・ピット（図版1）が該当する。遺構から出土した遺物はなく、また直上に堆積した地層（第3図29）にも混ざり込みかと考えられる少量の遺物しか含まれていなかったため、時期は特定できない。直上に堆積した地層（第3図29）の放射年代測定を行い、紀元前8世紀前葉～紀元前5世紀前葉の年代が得られたことから、この結果に基づけば、弥生時代前期以前の遺構ということになる。関ノ口遺跡の他の調査区では縄文時代の遺物も確認されており、そういった時代の遺構の可能性もあるだろう。

これとは別に、弥生時代中期前葉の土器（1～3）が出土している。

2. 弥生時代中期後葉

多くの遺構・遺物が見つかった。第2・3面で検出された遺構がこれにあたる。第3面で確認された遺構は、5～10mm程度の厚さで炭が堆積していた性格不明の遺構（SX388）だけであった。弥生時代中期後葉の壺（33）が出土するとともに、放射性炭素年代も整合的な値が得られている。

その後、約0.2～0.3mの厚さの地層が複数回の堆積によって形成され、その上面を自然流路（SR342・389・390）が流れる。主にその埋没後に形成されたのが第2面の遺構である。主要な遺構としては堅穴建物1基（SH1）があり、そのほかに短く浅い溝や土坑、ピットが見つかったが性格は明らかでない。SH1は床面より深く削平されているが、6本の支柱穴で、中央炉を持つ構造と考えられる。

遺物は土器と石器が出土しているが、掲載した遺物のうち第2・3面の遺構や第2面上の遺物包含層から出土したものは半数弱で、上層から出土したものの方が多い。これは後世の削平により遺物の多くが巻き上げられたことによると考えられる。

出土した土器は概ね西播磨地域の土器編年のⅣ期1段階（長友・田中2007）に該当し、時期幅は少ない。この期間中に第2面と第3面の間の地層の堆積があり、小さい自然流路が流れた時期があったことになるが、この時期の遺物・遺構は第7次調査区以外でも多数見つかっており、第7次調査区以外の範囲で居住は継続していたと考えるのが妥当だろう。また、打製石煙丁（S1）の存在は周囲に水田が存在した可能性を示し、イダグ壺（12）が出土したことからは海と関わる生業もあったことが推定される。

なお、これら弥生時代中期後葉の集落はその時期限りで途絶えるが、そこには洪水などの災害の影響があった可能性もある。だが、第2面の上面は後世に削平を受けていると考えられ、災害の痕跡あったとしてもその際に削り取られていると考えられる。

3. 古代

関ノ口遺跡では古代の痕跡は希薄である。第7次調査区でも古代の遺構は確認されなかったが、中世の遺物に混じって古代のものと考えられる土師器高坏(131)が出土している。近くに古代の遺跡が存在した可能性をうかがわせる。中世の掘立柱建物(SB4)の柱材が古代の年代であったことも、古代の建造物からの転用とも解釈できる。

また、中世の遺構の1群として報告したSB3は中世と判断した遺構の中では最も古く、出土遺物が乏しく時期の特定が難しいことから、古代以前にさかのぼる可能性もある。

4. 中世

(1) 遺構

多数の遺構が検出された。第3章で述べたとおり、1～5群に分けて考えると遺構の切り合いから、概ね1群→2群→3群と1群→4群→5群の順に推移したことが分かる。

1群の掘立柱建物(SB3)は出土遺物が乏しいものの、須恵器碗(233)が出土していることから中世の遺構と判断した。後続する2・4・5群が正方位であるとは異なり、N-12°-Eとなることもあり、もし中世の遺物が混入であれば、より時期をさかのぼる可能性がある。とはいえ、古墳時代のSB1・2と比べると柱穴が小さく、また、隣接するSB2とは軸をかなり異にしており、古墳時代までさかのぼる可能性は低いだろう。ただし、周囲の調査区で検出されている、古墳時代の掘立柱建物と比較をすることで、再検討を行う必要がある。

2群は調査区東部の溝である。SD46・279がN3°-Eとなるのに対して、後に掘り直されたSD45はN5°-Eとなり、より正方位から外れる。近年の調査で、SD45は南端で屈曲してからほぼ真東に伸びることが分かっており、N5°-Eの向きは異質である。SD46・279の遺存状況に影響を受けて、正方位と異なる向きになってしまったのかもしれない。3群の横列はN5～8°-Wとなるが、このSD45の方位のずれに影響を受けた可能性がある。

4群と5群はいずれも概ね正方位となる。4群から5群への移行は、土地利用が畑地から居住地に移り変わったことを示す。集落の拡大が移動があったものと考えられ、周囲の調査区の調査成果と合わせて検討する必要がある。

(2) 遺物

以下では出土遺物の年代的な位置づけについて検討する。

西播磨の土師器編年（中川 2018）をもとに土師器の年代について確認する。口縁部が「て」の字状になる手づくね整形の小皿はⅢ期新段階（12世紀前半）に客体的にみられるとされる。口縁「て」の字状の土師器小皿は、2群のSD279（110）・SD45（163）、5群のSB4（199）などで出土している。

底部系切りの小皿はⅢ期古段階（11世紀後半）以降に出現する。2群のSD279（118・119）、5群のSB4（204）・SB5（212）などで出土している。一定量の小皿の出土がありながら、底部系切りのものが出土していないのは2群のSD46とSD45である。SD45は底部系切りの小皿が出土しているSD279より後の遺構であり、伴っていてしかるべき時期のものである。SD46に底部系切りの小皿がないのは、たまたま伴わなかったか、Ⅱ期新段階（11世紀前半）以前にさかのぼるためかは不明である。

托状皿は、Ⅱ期新段階～Ⅲ期新段階に見られる。2群のSD46（95・96）・SD279（128）・SD45（175・176）、4群の動溝（218）などで出土しているが、いずれも柱状高台である。Ⅱ期新段階・Ⅲ期古段階の托状皿は柱状高台であるが、Ⅲ期新段階は内面底部が深く凹むものとなり、柱状高台の有無は不明とされる。

底部系切りの坏は西播磨では不明とされるが、東播磨の状況を考慮するとⅢ期古段階以降に現れると考えていだろう。底部系切りの坏は2群のSD279（123～125）・SD45（170～173）で出土している。SD279で底部へら切りのものと混在するのに対して、SD45では底部系切りのものだけであるのは時期差を反映しているのかもしれない。

見込みが大きく凹む平高台碗はⅡ期新段階～Ⅳ期古段階（12世紀後半）に見られる。2群のSD46（94）・SD279（127）・SD45（174）などで出土している。器高に時期差が現れるとされるが、この調査で見つかったものはいずれも底部片であり検討できない。底部調整はⅡ期新段階までへら切りが残り、Ⅱ期新段階以降に系切りが現れるとされる。SD46（94）とSD45（174）のものがへら切り、SD279（127）のものが系切りとなっており、遺構の切り合い関係を踏まえると、SD46がⅡ期新段階以前、SD279とSD45がⅡ期新段階ということになるが、その他の土器の年代観とずれる。

通常の平高台碗はⅠ期新段階（10世紀前半）～Ⅲ期古段階まで続くとされる。2群のSD46（93）・SD279（126）、4群の動溝（216）で出土している。底部調整はⅡ期新段階までへら切りが残り、Ⅱ期新段階以降に系切りが現れるとされる。SD46（93）と動溝（216）のものがへら切り、SD279（127）のものが系切りとなっている。その他の土器の年代観とずれる。

須恵器については、まず相生・龍野窯跡群の編年（池田 2003）により検討する。この調査で出土した碗に高台脇をへらナデするものは認められず、C2段階以降に位置付けられる。この調査で出土した坏は1点（220）だが、坏はC2段階までで無くなる。壺Bは2群のSD46（106・107）で断面三角形の突帯を持つものが出土しているが、断面三角形のものはC2段階以降に増加するとされる。また、竹原9号窯跡の窯体内出土土器の分析から、碗は内面見込みが明確に落ちこむ碗Aaから、平底となる碗Bへと移り変わることが示されている（山田編 2022）。碗Aaには2群のSD46（98）・SD279（132）、SX33（191）が該当する。SD279では碗Bが共伴するが、SD46とSX33には伴っておらず遺構の古さを反映する可能性がある。相生・龍野窯跡群の編年には年代の位置付けがなされていないが、野村展右の年代観（野村 2001）を参照すると、

C2段階が11世紀後半、D1段階が12世紀前半にあたる。この調査で出土した須恵器は11世紀後半～12世紀前半に相当する。

ついで太宰府編年（山本2000）をもとに、白磁の年代観を確認する。10世紀後半～11世紀中頃に位置付けられるのが2群のSD279（161）・SD45（186）・SX280（190）である。11世紀後半～12世紀前半に位置付けられるのが2群のSD46（109）・SD279（159・160）・SD45（185・187）である。いずれも2群の遺構で出土しており、先行する遺物を含みながらも、11世紀後半～12世紀前半の年代と考えることができる。

以上の遺物の年代を参照すると、この調査で出土した中世の遺構・遺物の多くは11世紀後半～12世紀前半に位置付けられる。遺構の中でも2群で最も古いSD46とSX33に古い時期の様相が見られるものが多く、土師器の年代だけを見ると、11世紀前半にさかのぼる可能性がある。

なお、須恵器については、直近の窯跡として、約9km西の相生市街地周辺の西播磨窯跡群が存在する。西播磨窯跡群には古墳時代から中世の窯跡が存在し、中世においては備前から西播磨にかけて技術を共有する生産圏を形成していたとされる（山田編2022）。関ノ口遺跡第7次調査で出土した須恵器の中にも、この生産圏の特徴の一つである内面ハケ調整の甕（184）が含まれており、西播磨窯跡群の須恵器が一定量使用されていたことがうかがえる。

5. 第8次調査区との比較

関ノ口遺跡第7次調査では、主に弥生時代中期後葉、古墳時代後期後半、中世の遺構・遺物が見つかった。中播都市計画事業JR網干駅前土地画整理事業に伴う関ノ口遺跡の発掘調査は継続中であり、令和5（2023）年度末で報告書が刊行されているのは第7次調査区の約100m南で行われた第8次調査区のみである（福井2022）。第8次調査区では、弥生時代終末期の堅穴建物、中期後葉と終末期の遺物を含む溝、中期後葉に埋没した流路とともに、谷地形への崩落土中から多数の一乗寺K式の縄文土器や石棒などが出土している。

第7次調査区の状況は第8次調査区と共通点と相違点がある。弥生時代中期後葉の流路の存在は両調査区に共通する。これは広い範囲での洪水の増加をうかがわせるものである。また、第8次調査区でも溝から弥生時代中期後葉の土器が出土しており、弥生時代中期後葉の遺跡が第8次調査区付近まで広がっていたものと考えられる。

一方で、第8次調査区では庄内式期の遺構・遺物が認められる。第7次調査区では全く確認されておらず、関ノ口遺跡の南寄りに分布するものと考えられる。同じく縄文時代後期の遺物も、第7次調査では認められなかった。第8次調査区の西に隣接する第5次3区でも縄文土器が出土しており、縄文時代の遺跡の中心は遺跡の南寄りであったと推定される。

古墳時代後期と中世の遺物は第8次調査では見つからない。この時期の遺跡は、関ノ口遺跡の北寄りに中心があると考えられる。

第2節 古墳時代の関ノ口遺跡第7次調査区

1. 関ノ口遺跡の古墳時代後期後半の掘立柱建物

この調査ではSB1とSB2の2棟の古墳時代後期後半の掘立柱建物がみつかった。方位はSB1がN-14°-E、SB2がN-23°-Eとなり若干異なるが、遺跡の北の日吉山の山裾と並行する軸といえる。どちらも比較的大きい方形のものを含む柱穴を持つ。

周囲の調査区では、正式な報告はなされていないが、第1次2区と第9次1区にまたがって、同時期の、方位がN-21°-Eとなり、二面に廂を持つ掘立柱建物が見つっている（南・三好編2022）。加えて、第5次1区ではこれらの建物と同じ向きの同時期の溝も確認されている（姫路市埋蔵文化財センター2020）。これらの調査区が位置する、関ノ口遺跡の北端中央部では、近年の調査でも同様の軸を持つ同時期の掘立柱建物が見つっている。詳細な同時性などは、それぞれの正式な報告を待って検討する必要があるが、もしその多くが同時に存在したとすると、区画溝の北に軸を同じくする掘立柱建物が並び建ち、その中に四面廂建物や二面廂建物が含まれる景観が復元される。関ノ口遺跡における古墳時代後期後半の全体像が示された時点で、機能を含めた歴史的評価がなされるべきである。

2. 古墳時代の四面廂建物

四面廂建物は身舎の周囲に外周柱列がめぐる柱穴の配置となる建物である。外周柱列の役割は、廂、裳階、縁などであったと考えられる（箱崎2012）が、遺構からその判断が難しいため、この報告では全ての可能性を含めた上で四面廂建物と呼称した。

四面廂建物は弥生時代終末期以降に認められ（梅本1997）、古墳時代のものについては首長居館や祭祀用建物であったと解釈されることが多い。古墳時代の四面廂建物として、兵庫県では朝来市柿坪遺跡が知られる。古墳時代中期の四面廂建物が4棟確認されている。全体像が明らかな2棟は廂部を含めた面積が85.5㎡と201㎡となっており、かなり大きく、首長居館であった可能性が指摘されている（吉識1998）。

四面廂建物については、廂部を含めた面積が60㎡以上を大型として分類する見方がある（青柳2003）。関ノ口遺跡の四面廂建物は46.15㎡であり、小型に分類される。大型の柿坪遺跡の四面廂建物とはその性格が異なるものであった可能性が高い。

古墳時代後期の四面廂建物と考えられる掘立柱建物は14棟が知られ、第5表はそれをまとめたものである。大型と小型の別は60㎡を境としている。原之城遺跡と都屋北遺跡が後期前半である以外はいずれも後期後半のものである。木崎遺跡、森垣外遺跡、名和飛田遺跡のものは一部が調査区外にあり、3面のみに廂部を持つ可能性もあるが含めている。数値は原則として報告書の記載によるが、記述がないものについては集成（奈良文化財研究所2012）を参照し、また、報告書の図面から計測を行ったものもある。

分布は本州の南半に広く認められるが、大型の中でも100㎡を大きく上回るものは奈良県に集中する。それ以外の大型のものは東日本に多いようである。これらの四面廂建物のうち、1m前後の大きさが角がしつ

かりとした方形の柱穴が主体となるものは奈良県の上之宮遺跡、阿部丘陵中山地区、平尾山遺跡と関ノ口遺跡だけである。関ノ口遺跡の四面廂建物を建てるにあたって、奈良県の四面廂建物を建設する技術が影響した可能性を示唆するものではあるが、この関係性については、四面廂建物以外のものを含めた掘立柱建物全体を加えて検討する必要がある。

小型の四面廂建物の周囲にいくつかの掘立柱建物が並び建つ状況は三重県の追越遺跡、京都府の八木嶋遺跡で認められている。関ノ口遺跡の四面廂建物の周辺にも同時期の掘立柱建物が認められるようであり、将来的に周囲の発掘調査の報告書が刊行され、全体像が示された際には、上記の類似の建物配置を持つ遺跡との比較を行うことで、関ノ口遺跡の古墳時代後期の後半の機能が解明されることが期待される。

第5表 古墳時代後期の四面廂建物

遺跡名	府県	遺構名	規模	柱間数		規模 (m)		廂面積 (m ²)	柱穴長 (m)	
				身舎	廂	身舎	廂		身舎	廂
原之城	群馬	第4号	大型	2×2	5?×4	61×53	84×80	672	0.9	0.9～0.6
曾杵C	石川	19号建物	小型	2×2	3×3	42×34	70×6.08	4256	0.8～0.4	0.5～0.3
木崎	福井	SB01	大型	3以上×2	4以上×4	8.00以上×6.40	10.0以上×10.4	104以上	2.18～1.50	1.08～0.74
寺家前	静岡	SH210	大型	4×4	6×6	64×64	98×9.8	96	0.8～0.7	0.8～0.7
古新田	静岡	1	大型	4×2	6以上×4	6.9×4.5	9.2以上×6.75	62.1以上	0.9～0.7	0.6～0.5
追越	三重	SB07	小型	3×2	5×4	4.9×3.8	8.2×6.6	54.12	0.6	0.7～0.4
森垣外	京都	72	?	3×3以上	4×3以上	4.8×3.5以上	7.2×5.5以上	39.6以上	0.6～0.4	0.6～0.3
八木嶋	京都	SB19	小型	2×2	3×3	4.7×4.7	7.4×7.1	52.5	1.0～0.9	1.0～0.8
鹿屋北	大阪	C6	小型	4×3	6×5?	6.82×4.57	8.32×6.48	55.21	0.8～0.5	平均0.3
関ノ口	兵庫	SB1	小型	3×2	3×3	5.05×4.30	7.1×6.5	46.15	1.1～0.8	0.9～0.6
上之宮	奈良	SB06	大型	4×3	6×5	9.36×6.5	13.6×11.4	155.04	平均1.4	平均1.0
上之宮	奈良	SB07	大型	5×4	7×6	9.1×7.1	12.9×11.1	143.19	平均0.8	平均0.6
中山	奈良	SB01	大型	5×3	7×6	19×14	22.5×18.5	416.25	平均1.3	平均1.0
平尾山	奈良		大型	4×3	6×5	8.35×5.88	12.93×10.44	135	1.1～0.6	0.6～0.5
名和飛田	鳥取	4	?	3×3?以上	5×3以上	4.8×4.0以上	7.6×?	57.7以上	0.87～0.63	0.76～0.51
矢野	鳥根	SB2156	小型	1×1	3×3	2.6×2.2	4.9×4.8	23.52	1.3～0.9	0.9～0.7

原之城：伊勢崎市教育委員会 1988『原之城遺跡発掘調査報告書』

曾杵C：石川県埋蔵文化財保存協会 1995『曾杵C遺跡』

木崎：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010『木崎山城跡・木崎遺跡』

寺家前：静岡県埋蔵文化財センター 2014『寺家前遺跡Ⅲ』

古新田：浅羽町教育委員会 2002『浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

追越：上野市教育委員会・上野市遺跡調査会 1996『追越遺跡発掘調査報告』

森垣外：京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000『京都府遺跡調査概報』91

八木嶋：京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994『京都府遺跡調査概報』56

鹿屋北：大阪府教育委員会文化財保護課 2010『鹿屋北遺跡Ⅰ』

上之宮・中山：桜井市教育委員会 1989『阿部丘陵遺跡群』

平尾山：埋蔵文化財天理教調査団 1989『平尾山遺跡発掘調査報告』

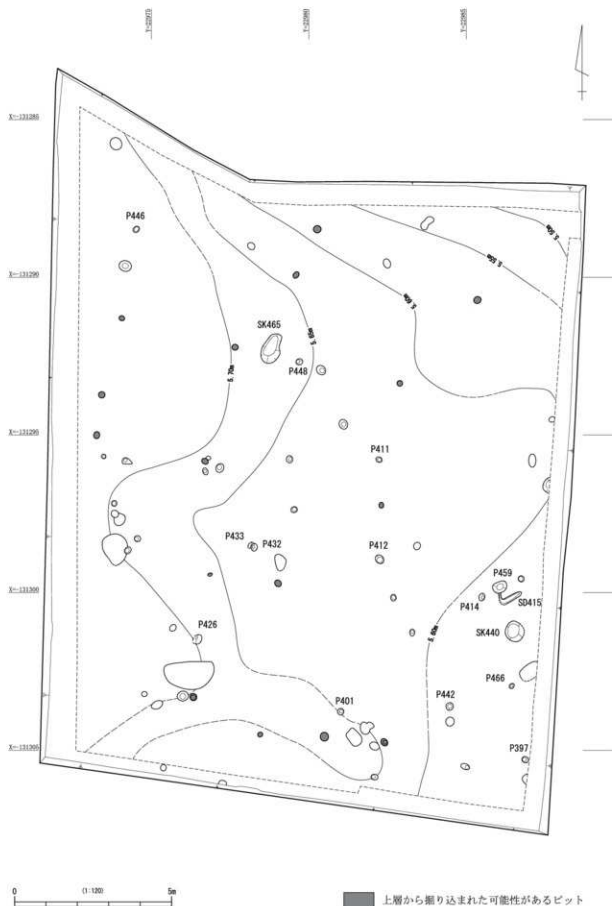
名和飛田：鳥取県教育文化財埋蔵文化財センター 2005『名和飛田遺跡』

矢野：鳥根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会 2010『矢野遺跡』

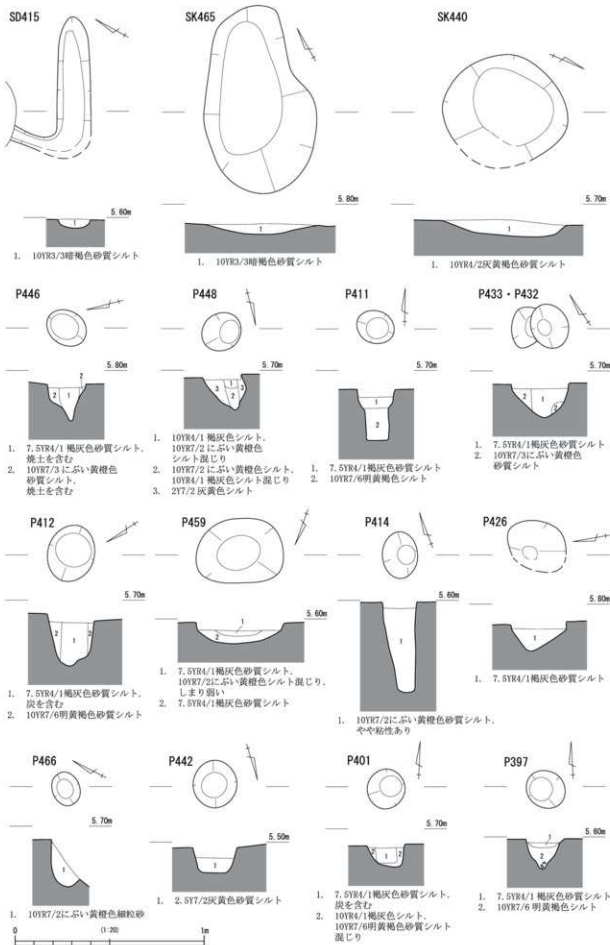
【参考文献】

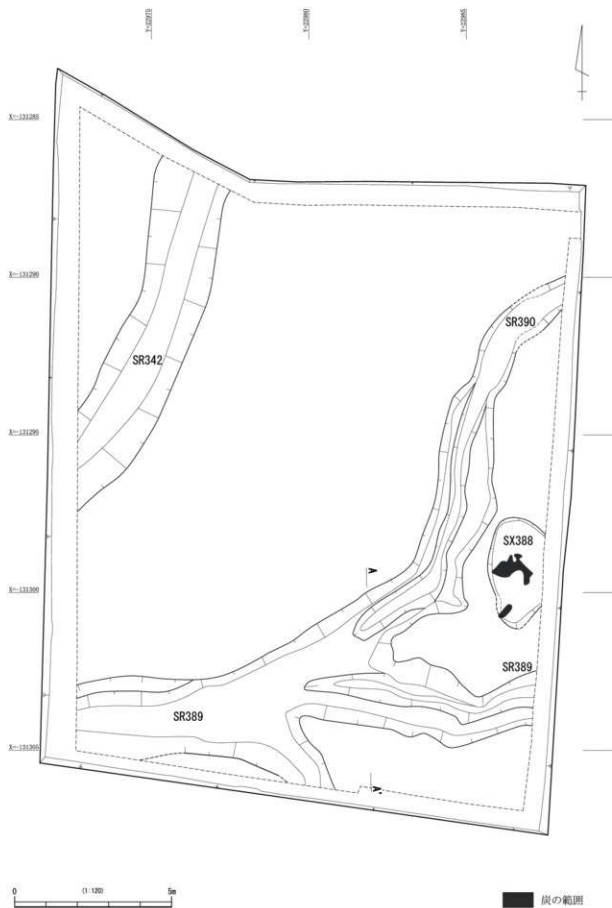
- 青柳泰介 2003「大型四面庇付き掘立柱建物について」『同志社大学考古学シリーズⅧ 考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 池田征弘 2003「まとめ」『緑ヶ丘遺址群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告 253、兵庫県教育委員会
- 梅本康広 1997「考察—遺構・遺物の評価と問題点」『向日市埋蔵文化財調査報告書』44、向日市埋蔵文化財センター
- 中川猛 2018『村東遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 56、姫路市教育委員会
- 長友朋子・田中元浩 2007「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告 5、大手前大学史学研究所
- 奈良文化財研究所 2012『第15回古代官衙・集落研究会報告書 四面廂建物を考える 資料編』奈良文化財研究所研究報告 9
- 野村展石 2001「相生・龍野古窯跡群について」『ひょうご考古』7、兵庫考古研究会
- 箱崎和久 2012「身舎外柱列の解釈と上部構造」『第15回古代官衙・集落研究会報告書 四面廂建物を考える 報告編』奈良文化財研究所研究報告 9
- 姫路市埋蔵文化財センター 2020『姫路市埋蔵文化財調査年報2020』
- 福井 優 2022『関ノ口遺跡』姫路市埋蔵文化財センター調査報告 110、姫路市教育委員会
- 南 恵和・三好愛美編 2022『姫路市埋蔵文化財調査年報2022』姫路市埋蔵文化財センター
- 山田清朝編 2022『竹原1号窯跡・9号窯跡』兵庫県文化財調査報告 520、兵庫県教育委員会
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡Ⅱ』陶磁器分類編、太宰府市の文化財 49、太宰府市教育委員会
- 吉識雅仁 1998「掘立柱建物の検討」『柿坪遺跡』本文編、兵庫県文化財調査報告 336、兵庫県教育委員会

圖版

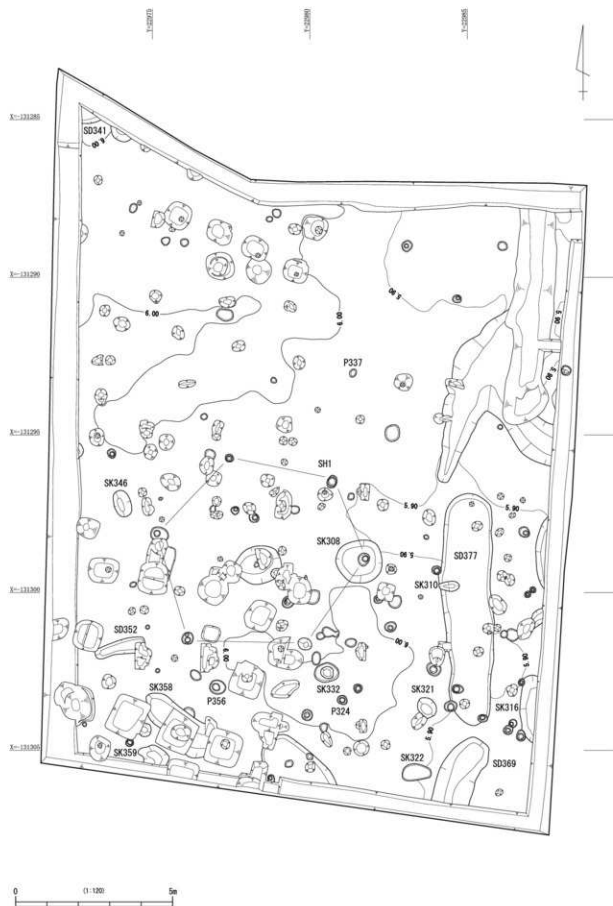


第4面（弥生時代中期以前）の遺構



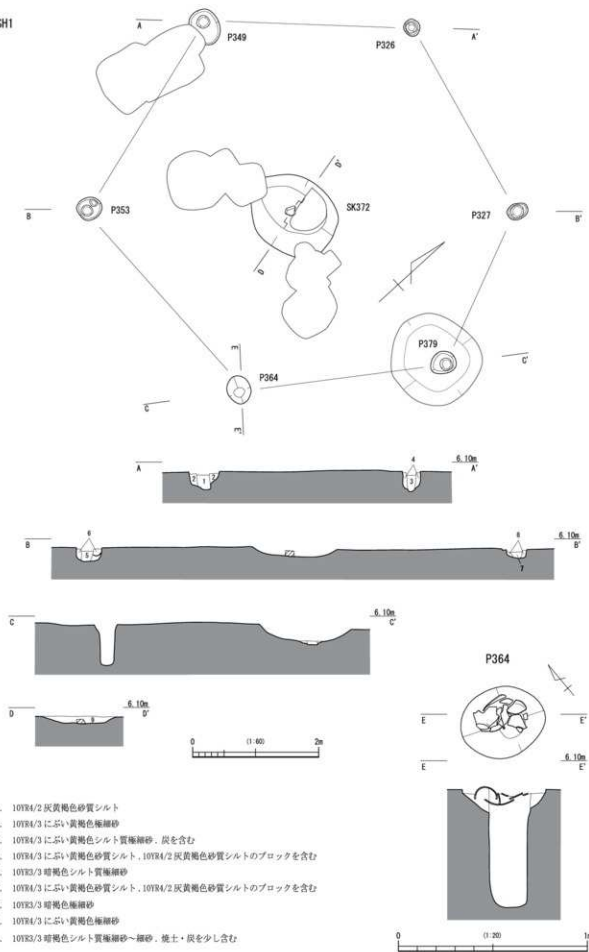


第3面（弥生時代中期下層）の遺構

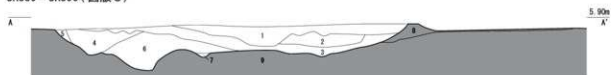


第2面（弥生時代中期上層）の遺構

SH1

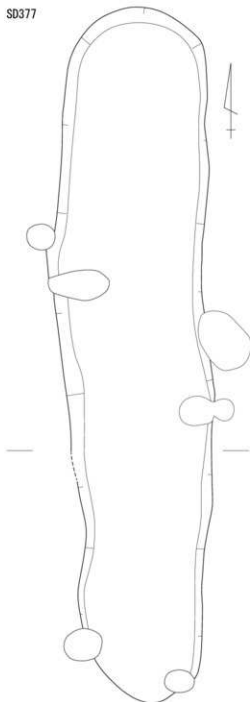


SR389・SR390 (図版 3)



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂、シルト・細砂混じる
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂、極細砂～細砂・極粗砂混じる
3. 10YR4/4 褐色シルト質極細砂～細砂
4. 10YR2/3 暗褐色細砂～中砂、 $\phi 20$ mm以下の礫を含む
5. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂、中砂混じる
6. 10YR4/2 灰黄褐色細砂～中砂、粗砂～極粗砂混じる、底部に $\phi 30 \sim 100$ mmの礫を含む
7. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫、礫は $\phi 5$ mm以下が主体
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂～細砂
9. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト

SD377



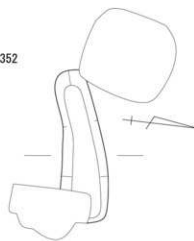
1. 7.5YR4/1 褐灰色砂質シルト
2. 10YR7/6 明黄褐色シルト

SD369



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂～粗砂、10YR2/2 黒褐色シルト質極細砂を部分的に含む

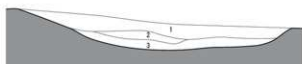
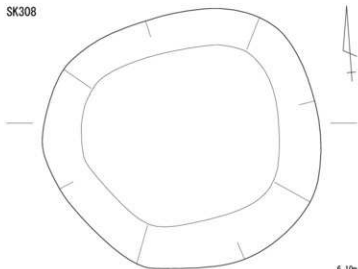
SD352



1. 10YR3/4 暗褐色シルト質極細砂、 $\phi 10$ mm以下の礫土・炭を含む

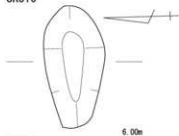


SK308



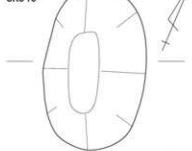
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂。
- 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂のブロックを少し含む
2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細砂。焼土ブロックを含む
3. 10YR2/2 黒褐色シルト質極細砂。炭を含む

SK310

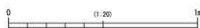


1. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂

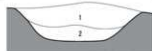
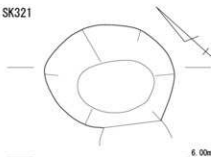
SK346



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。
- 焼土をわずかに含む

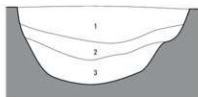
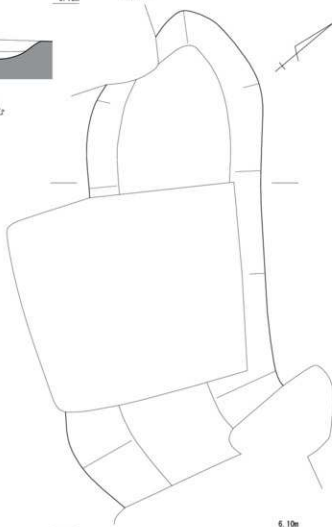


SK321

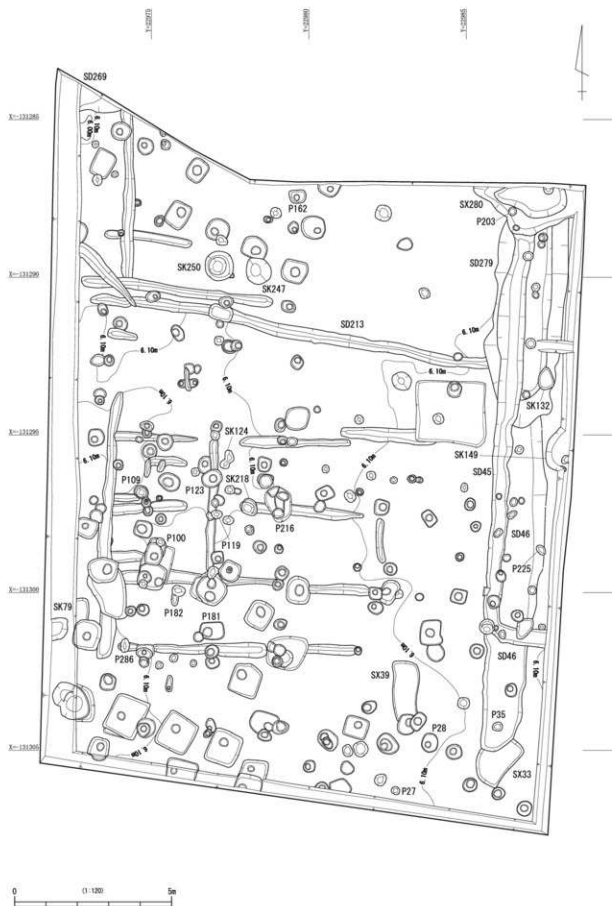


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂

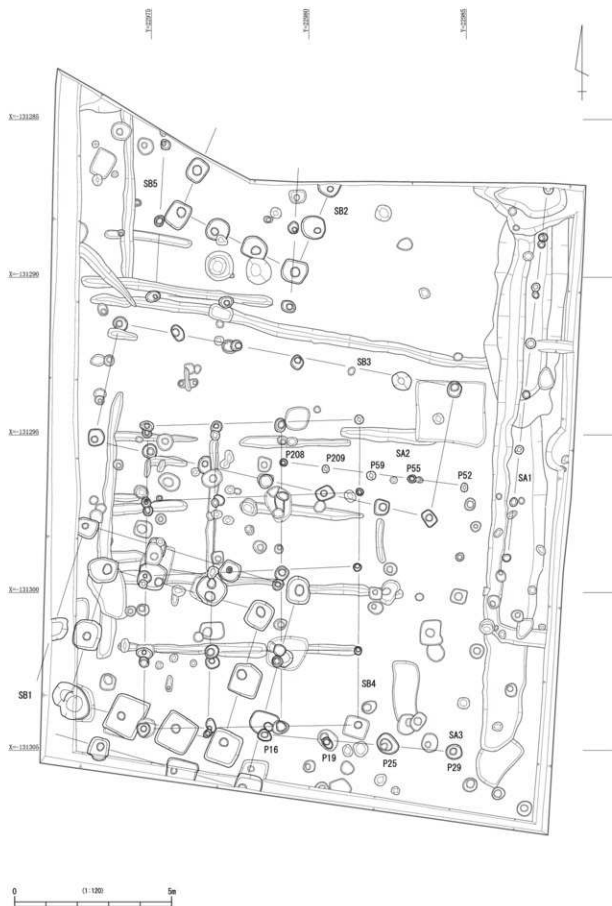
SK358



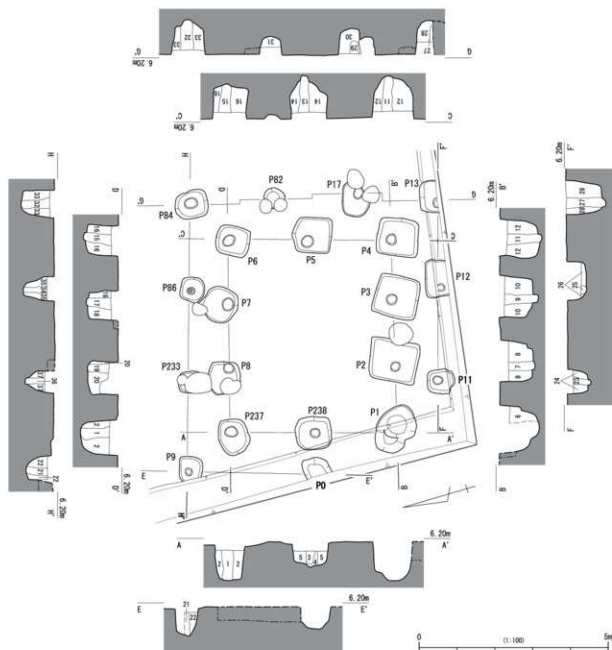
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細砂～細砂



第1面（古墳時代以降）の遺構



第1面 掘立柱建物・櫓列配置



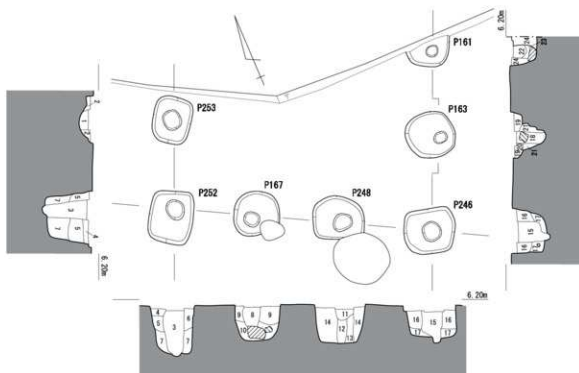
土層注記は図版 11

SB1 (図版 10)

1. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロックを含む、下底付近はやや還元色を呈する
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
3. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む
4. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
5. 4 と近似するが 10YR5/3 に近い黄褐色のブロックが多い
6. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土、下底部ほど 10YR5/3 に近い黄褐色のブロックが多い
7. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロックを多く含む、下底部は 10YR5/2 灰黄褐色の還元色を呈するシルト
8. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土、下底部ほど 10YR5/3 に近い黄褐色のブロックが多い
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロックを多く含む、下底部は 10YR5/2 灰黄褐色の還元色を呈するシルト
10. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土、下底部ほど 10YR5/3 に近い黄褐色のブロックが多い
11. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロックを多く含む、下底部は 10YR5/2 灰黄褐色の還元色を呈するシルト
12. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土、下底部ほど 10YR5/3 に近い黄褐色のブロックが多い
13. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト・10YR4/4 褐色砂質シルトのブロックを多く含む、下底付近は還元色を呈する
14. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・10YR3/2 黒褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
15. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト・10YR4/4 褐色砂質シルトのブロックを多く含む、下底付近は還元色を呈する
16. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・10YR3/2 黒褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
17. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、下底は 10YR5/2 灰黄褐色の還元色を呈する
18. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
19. 10YR1/1 黒褐色砂質シルト、下底は 10YR5/3 に近い黄褐色の還元色を呈する
20. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・10YR3/2 黒褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
21. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを含む
22. 10YR4/4 褐色砂質シルト・10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロック状堆土
23. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/4 ~ 4/6 褐色砂質シルトのブロックを少し含む
24. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/4 ~ 4/6 褐色砂質シルトのブロックを多く含む斑状を呈する
25. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト、10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロックを含む
26. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト、10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む斑状を呈する
27. 10YR1/1 黒褐色砂質シルト、10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR5/6 黄褐色砂質シルトのブロックを少し含む、下底付近は還元色を呈する
28. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト、10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む斑状を呈する
29. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト、10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを含む
30. 10YR4/4 褐色砂質シルト・10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロック状堆土
31. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト・7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト・7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトのブロック状堆土
32. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト、7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトブロックを含む
33. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロックを含む
34. 10YR4/4 褐色砂質シルト・10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロック状堆土
35. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロックを含む
36. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト、7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロックを含む
37. 10YR4/4 褐色砂質シルト・10YR2/2 黒褐色砂質シルト・10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトのブロック状堆土

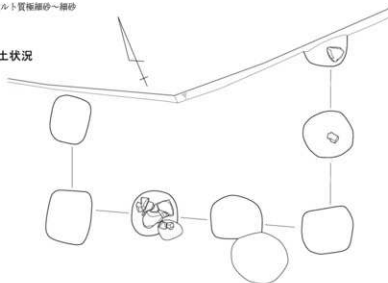
SB3 (図版 13)

1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト・
2. 10YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロック状堆土
3. 10YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロック状堆土、10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを含む
4. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト～シルト質極細砂
5. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
6. 7.5YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロックを多く含む
7. 10YR4/4 褐色砂質シルトのブロックを多く含む
8. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト、10YR3/3 暗褐色砂質シルト
9. 7.5YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロックを多く含む
10. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
11. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト・10YR3/3 暗褐色砂質シルト
12. 7.5YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロックを多く含む
13. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
14. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト、上部では粗砂～極細砂粒を多く含む
15. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト、7.5YR2/2 暗褐色砂質シルトのブロックを多く含む
16. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
17. 7.5YR3/2 暗褐色シルト質極細砂
18. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂～細砂
19. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～中砂
20. 10YR3/2 暗褐色シルト質極細砂
21. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂～粗砂
22. 10YR3/2 暗褐色極細砂～中砂、粗砂～極細砂を少し含む
23. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～中砂、粗砂～極細砂を少し含む
24. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、7.5YR3/1 暗褐色砂質シルトのブロックを含む
25. 7.5YR3/1 暗褐色砂質シルト、10YR3/2 暗褐色砂質シルトのブロックを含む
26. 7.5YR3/2 暗褐色砂質シルト
27. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
28. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、 $\phi 30$ mm 以下の礫を含む、7.5YR3/1 暗褐色砂質シルトのブロックを含む
29. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト、7.5YR3/1 暗褐色砂質シルトのブロックを含む
30. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト、7.5YR3/1 暗褐色砂質シルト、 $\phi 20$ mm 以下の礫をわずかに含む
31. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを含む
32. 10YR3/2 暗褐色砂質シルト、10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトのブロックを含む
33. 10YR3/2 暗褐色シルト質極細砂、 $\phi 30$ mm 以下の礫を含む、粗砂～極細砂を含む
34. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト、 $\phi 30$ mm 以下の礫を少し含む

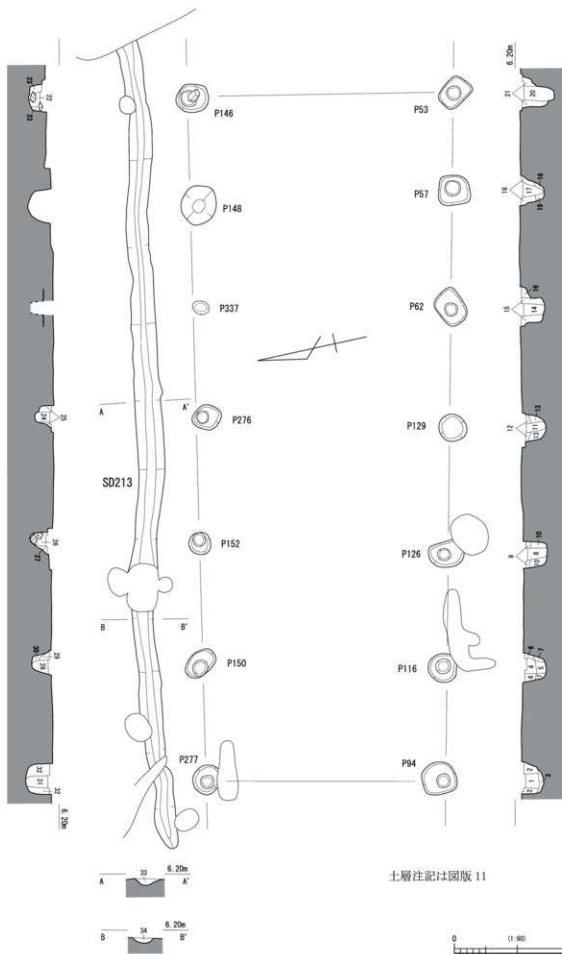


1. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト。
φ5～20mmの礫をわずかに含む。
7. 5YR4/4 褐色シルトの
ブロックを含む
2. 10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト。
φ5～20mmの礫を含む
極粗砂を多く含む。
4層よりやや暗色
4. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
極粗砂を多く含む
5. 7. 5YR3/1 黒褐色砂混じりシルト。
10YR3/2 黒褐色砂質シルトの
ブロックを多く含む
6. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
φ20mm以下の礫を含む。
粗砂～極粗砂を多く含む。
10YR2/2 黒褐色シルトの
ブロックを含む
7. 2. 5Y4/2 暗灰黄色シルト質極細砂～細砂
8. 7. 5YR3/2 黒褐色砂質シルト。
7. 5YR2/1 黒色砂質シルトのブロックを含む。
一部で織状をなす。
φ20mm以下の礫を含む
9. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。
7. 5YR2/1 黒色砂質シルトのブロックを含む
10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト
11. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。
φ5mm以下の礫～極粗砂を含む
12. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
極粗砂を少し含む
13. 7. 5YR3/2 黒褐色砂質シルト
14. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
φ30mm以下の礫を含む。
10YR3/1 黒褐色シルトの
ブロックを多く含む
15. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂。
φ10mm以下の礫を少し含む
16. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
φ20mm以下の礫をわずかに含む
17. 7. 5YR4/2 灰褐色砂質シルト
18. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂～細砂。
φ20mm以下の礫を多く含む
19. 10YR3/3 暗褐色シルト質極細砂～細砂。
φ20mm以下の礫を多く含む
20. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト。
φ10mm以下の礫～極粗砂を含む
21. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
22. 7. 5YR4/2 灰褐色砂質シルト。
φ10mm以下の礫をわずかに含む
23. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂～細砂。
φ10mm以下の礫～極粗砂を多く含む
24. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂～細砂・
10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂～細砂の
ブロック状埋土

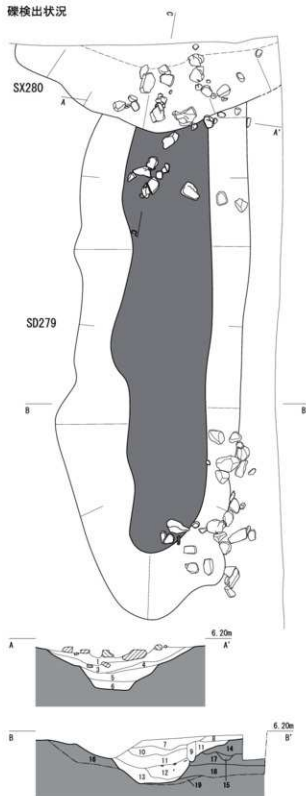
石材出土状況



0 (1:60) 3m

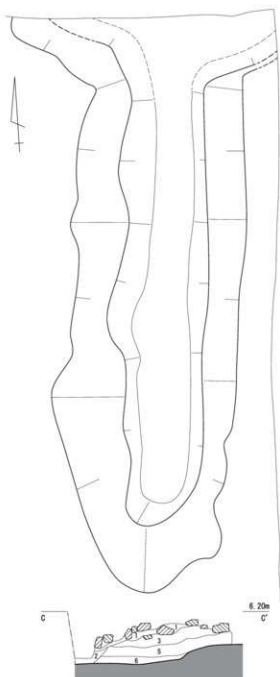


検出状況

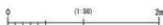


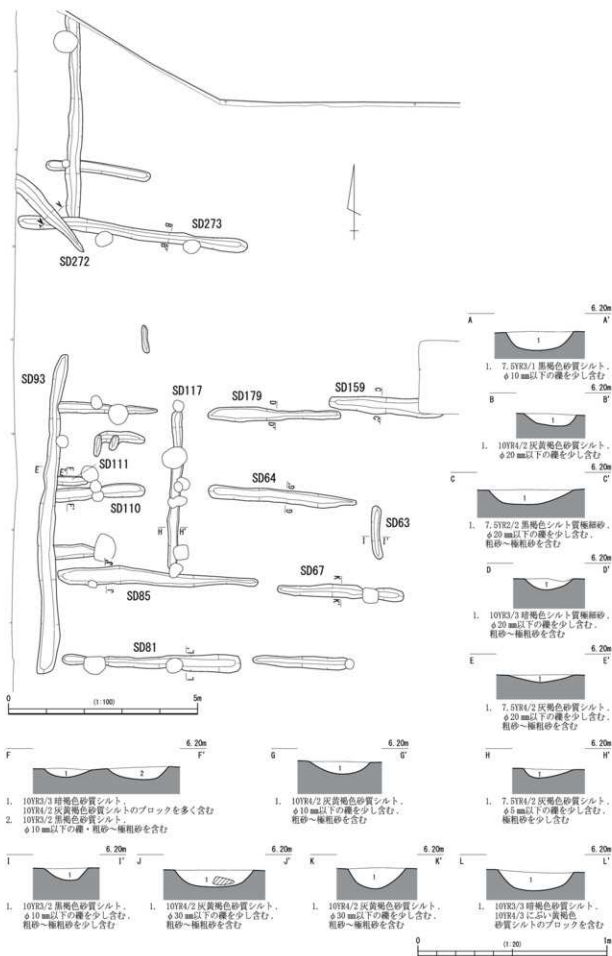
1. 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルト
2. 第3図9
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂。φ5 mm以下の炭をラミナ状にはさむ。φ20 mm以下の炭を少し含む。φ200 mm以下の角礫を含む
4. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質細砂。φ5 mm以下の炭をラミナ状にはさむ
5. 10YR4/1 灰褐色シルト質細砂。中央ほど細粒化する。φ10 mm以下の炭～粗砂粒を含む。東側にはφ20 mm程度の炭が流入する
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫。礫はφ10 mm以下が主体。マトリックスは海沈の悪いシルト質粗砂～極粗砂

完掘状況

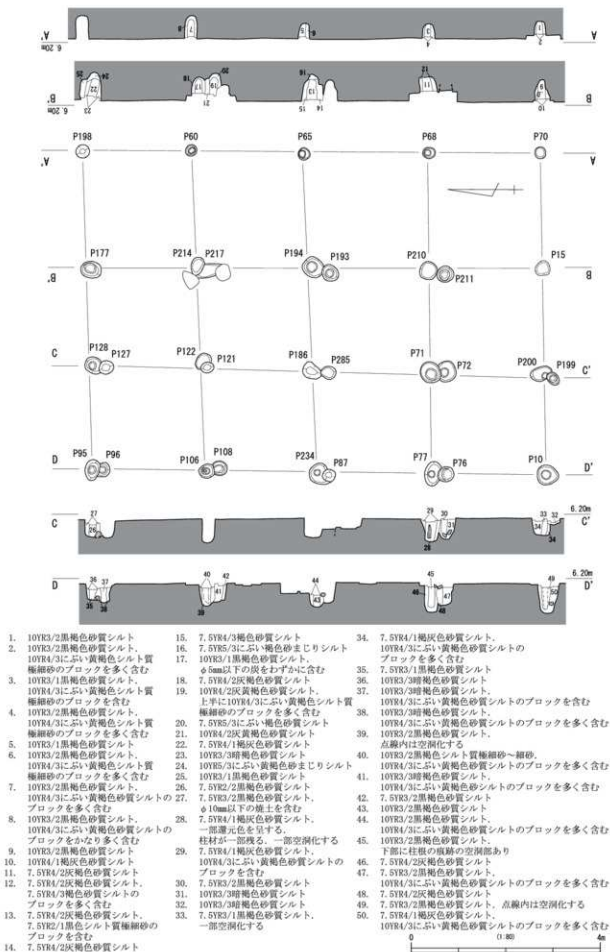


7. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質極細砂～細砂。φ10 mm以下の炭を含む（一部ラミナ状をなす）。φ30 mm以下の礫を含む
8. 第4図21
9. P134 埋土
10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂。φ5 mm以下の炭を少し含む
11. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト。φ5 mm以下の炭をわずかに含む
12. 10YR4/1 灰褐色砂質シルト。φ10 mm以下の炭をわずかに含む。φ30 mm以下の礫をわずかに含む
13. 10YR3/2 黒褐色シルト質砂礫。φ20 mm以下の礫が主体。マトリックスは海沈の悪いシルト質細砂～粗砂
14. 7.5YR3/1 黒褐色砂混じりシルト。φ10 mm以下の礫をわずかに含む
15. 7.5YR4/2 灰褐色細砂～粗砂。かなり海沈された砂
16. 10YR4/2 灰黄褐色砂礫。φ40 mm以下の礫が主体。マトリックスは海沈の悪い砂
17. 第4図35
18. 第4図39
19. 第4図40

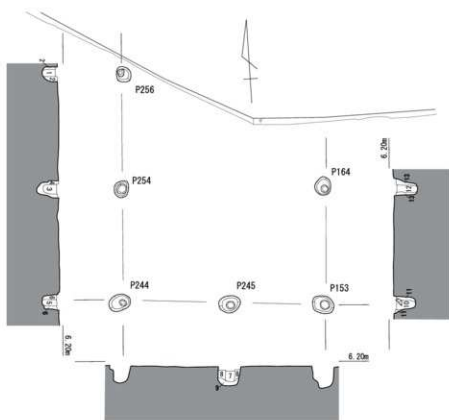




第1面 錦溝



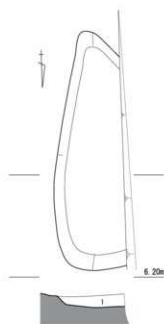
SB5



1. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト。
φ10mm以下の礫をわずかに含む
2. 10YR4/3 におい、黄褐色砂質シルト
3. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト。
10YR4/3 におい、黄褐色砂質シルトのブロック状埋土。
4. 10YR4/3 におい、黄褐色砂質シルト。
φ20mm以下の礫を少し含む
10YR3/2 黒褐色砂質シルトのブロックを含む。
φ20mm以下の礫を少し含む
5. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト。
φ20mm以下の礫をわずかに含む
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
7. 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト。
φ5mm以下の炭をわずかに含む
8. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
9. 7.5YR4/3 褐色粘土～シルト
10. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト。炭を含む
11. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂。
φ5～40mmの礫を含む
12. 10YR3/1 黒褐色砂質シルト。
φ10～20mmの礫をわずかに含む。炭を含む
13. 10YR3/2 黒褐色シルト質極細砂～細砂。
φ10～30mmの礫を少し含む

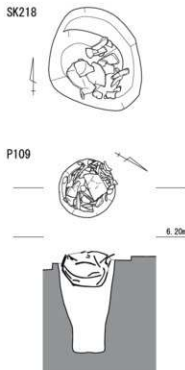


SK79



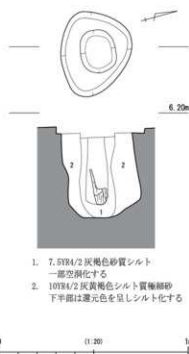
1. 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
φ10mm以下の礫～極細砂を少し含む

SK218

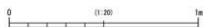


P109

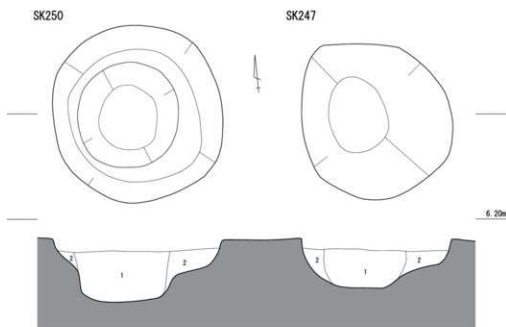
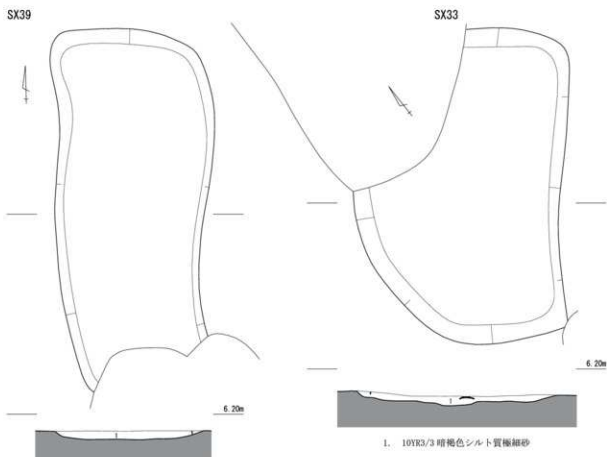
P16



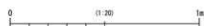
1. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
一部空洞化する
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質極細砂
下半部は還元色を呈しシルト化する

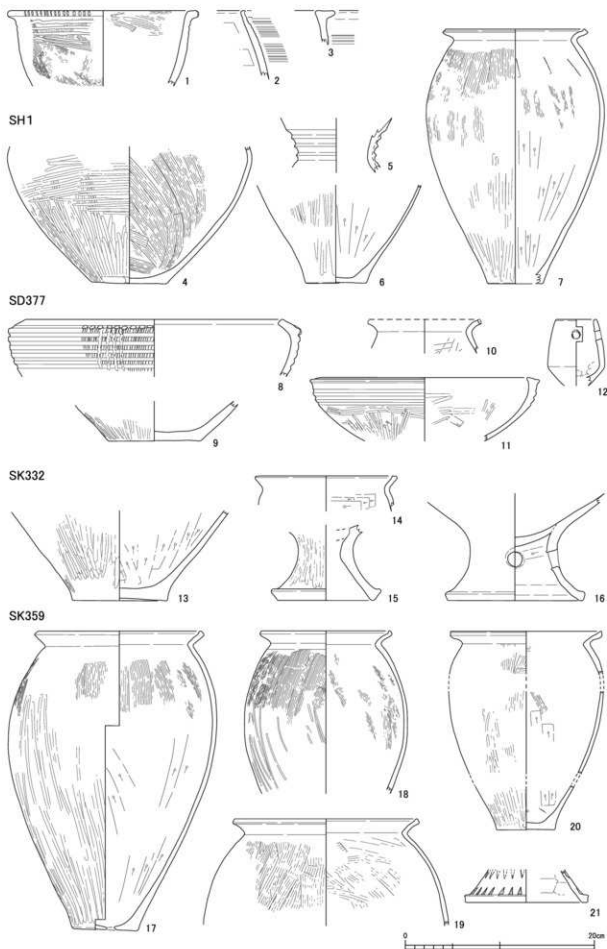


第1面 SB5・SK79・SK218・P109・P16

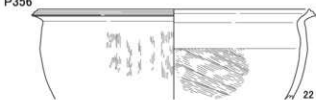


1. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト・10YR5/3 にぶい・黄褐色砂質シルトのブロック状埋土
φ10mm 以下の炭をわずかに含む、φ30mm 以下の礫を少し含む
2. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト・7.5YR4/3 褐色砂質シルトのブロック状埋土
φ20mm 以下の礫を少し含む

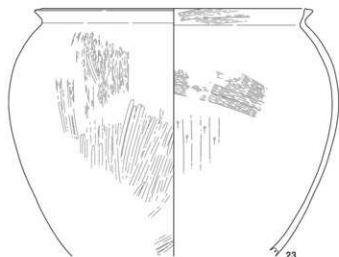




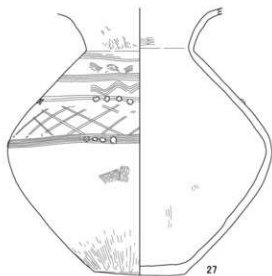
P356



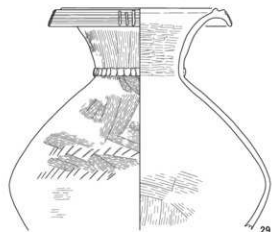
22



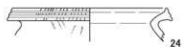
23



27



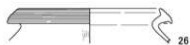
29



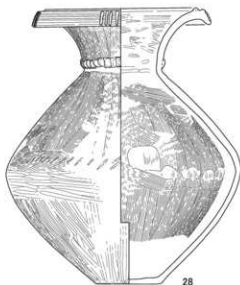
24



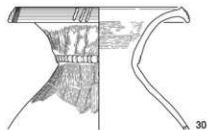
25



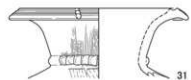
26



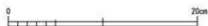
28

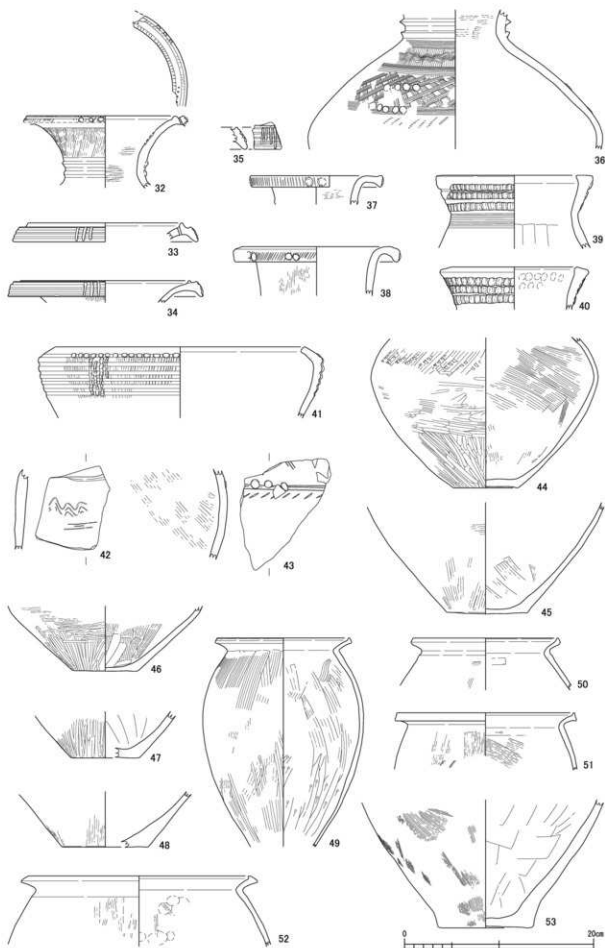


30

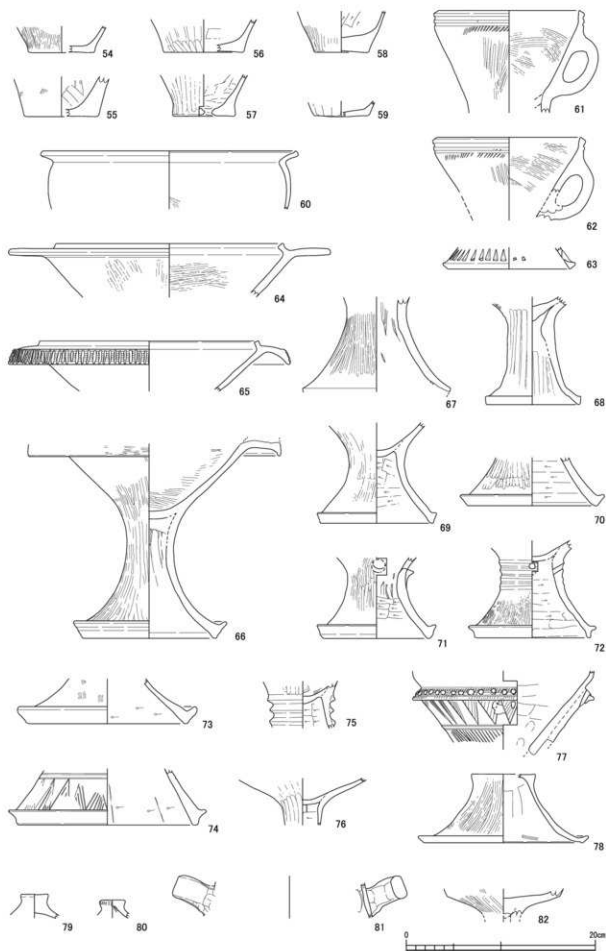


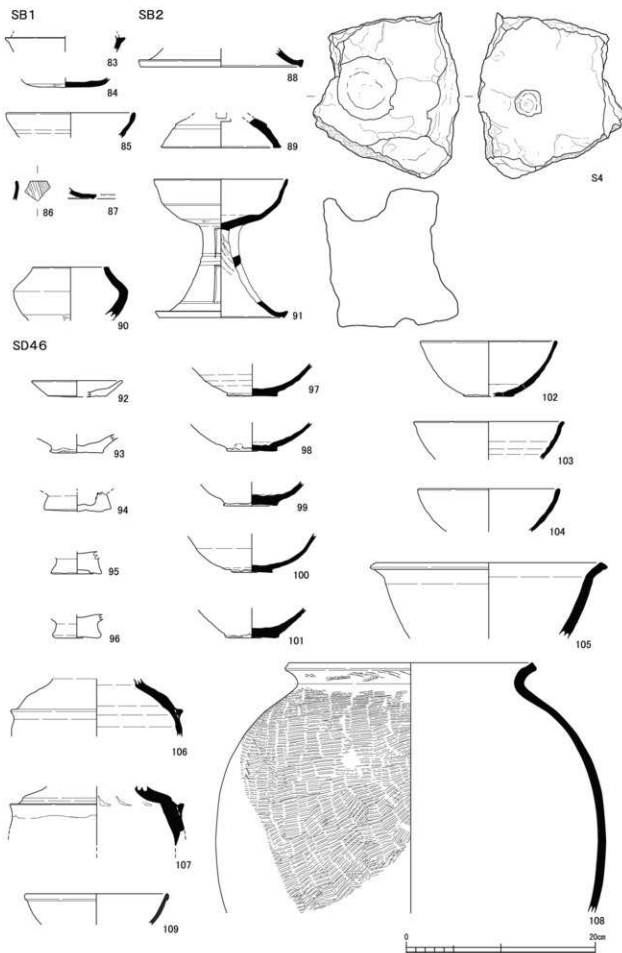
31



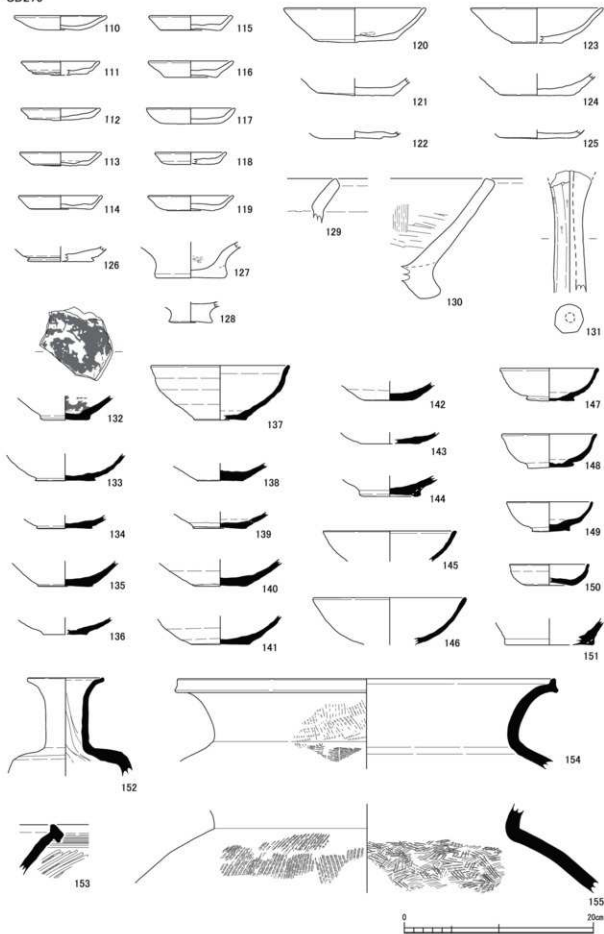


弥生時代中期後葉 土器 (2)

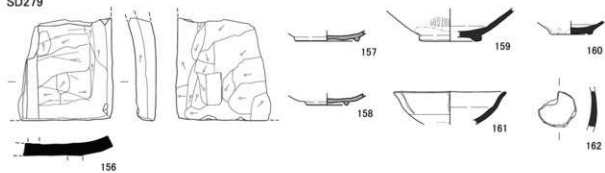




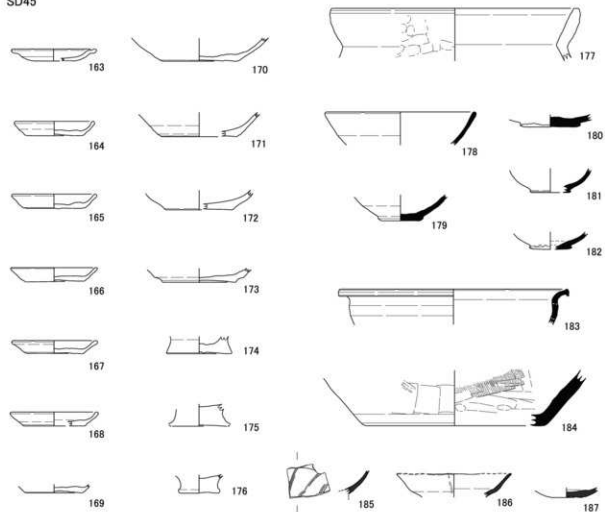
SD279



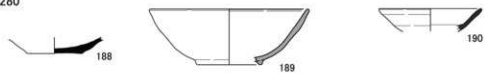
SD279



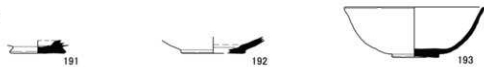
SD45



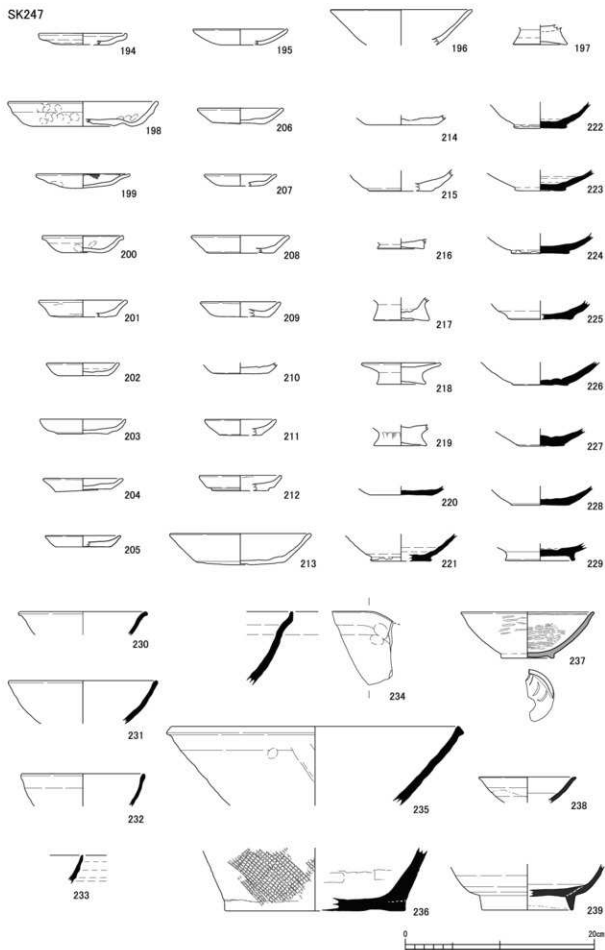
SX280



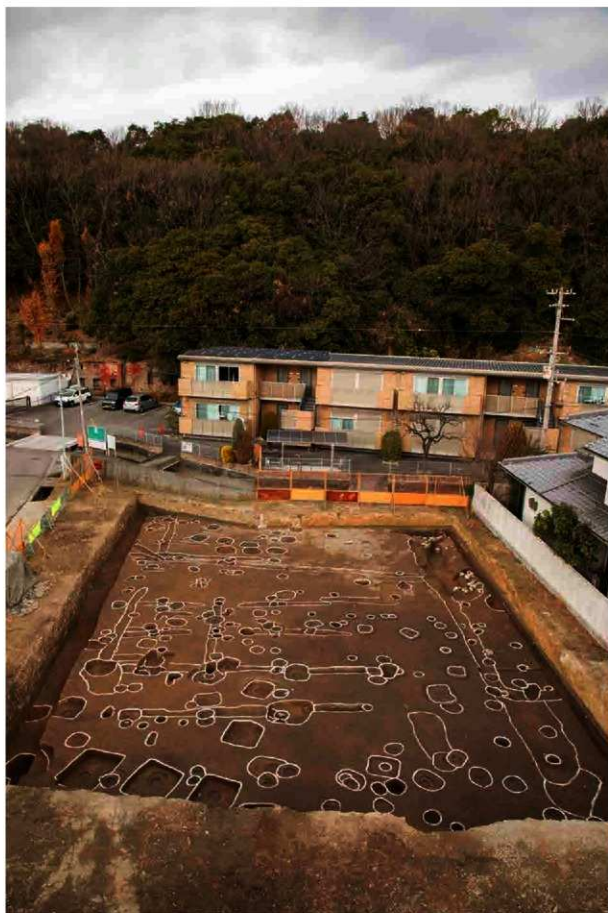
SX33



SK247



写真図版



調査区全景（南から）



朝日山と調査区（南西から）



網干駅前と調査区（北から）

調査区北壁西半土層
(南から)



調査区北壁東半土層
(南西から)



調査区北壁中央部土層
(南から)





調査区東壁土層（西から）



調査区東壁南隅土層
（西から）



調査区南壁土層（北から）

調査区南壁東半土層
(北西から)



調査区南壁西半土層
(北東から)



調査区南壁中央部土層
(北から)





第4面 調査区全景（南から）



SD415 土層断面（南西から）



SK465 土層断面（南西から）



SK440 土層断面（北東から）



P446 土層断面（西から）



P448 土層断面 (北から)



P411 土層断面 (南から)



P433・432 土層断面 (南西から)



P412 土層断面 (北西から)



P459 土層断面 (北から)



P414 土層断面 (南から)



P426 土層断面 (西から)



P466 土層断面 (南西から)



P442 土層断面 (北から)



P401 土層断面 (南から)



P397 土層断面 (南から)



SX388 土層断面 (北東から)



SR342 土層断面 (南西から)



SR390 完掘状況 (南から)



SR390 土層断面 (西から)



SR389 土層断面 (西から)

SX388 検出状況
(北東から)



SR342 完掘状況
(南から)



SR389・390 土層断面
(北西から)



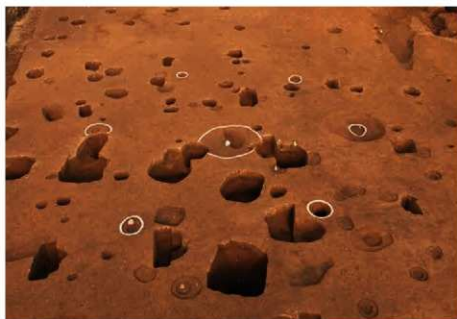


第2面 調査区全景（南から）

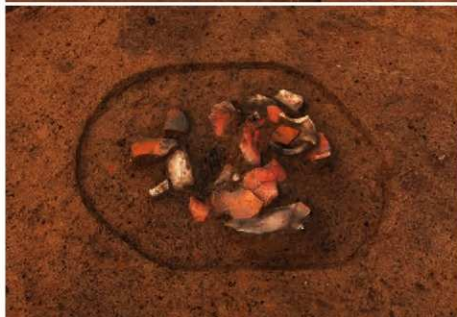


第2面 調査区全景（南東から）

SH1 全景
(南から)



SK332 土器出土状況
(南から)



SK359 土器出土状況
(北から)





SK372 土層断面 (東から)



SK372 完掘状況 (西から)



SH1 P364 土器出土状況 (南から)



SH1 P364 土層断面 (南西から)



SH1 P349 土層断面 (南東から)



SH1 P326 土層断面 (南東から)



SH1 P353 土層断面 (南東から)



SH1 P327 土層断面 (南東から)



SD377 土層断面 (南から)



SK308 土層断面 (南から)



SK321 土層断面 (南西から)



SK358 土層断面 (南東から)



SK332 土層断面 (南から)



SK359 土層断面 (北から)



P356 土器出土状況 (北から)



P337 根石検出状況 (南から)



第1面 調査区全景（上が東）



第1面 調査区全景（南東から）



SB1 検出状況（南から）



SB1 全景（北から）



SB1 P2 土層断面 (南から)



SB1 P2 完掘状況 (南から)



SB1 P3 土層断面 (南から)



SB1 P3 完掘状況 (南から)



SB1 P4 土層断面 (東から)



SB1 P4 完掘状況 (東から)



SB1 P5 土層断面 (東から)



SB1 P5 完掘状況 (東から)



SB1 P6 土層断面 (東から)



SB1 P6 完掘状況 (東から)



SB1 P7 土層断面 (北から)



SB1 P8 土層断面 (北から)



SB1 P237 土層断面 (西から)



SB1 P237 土層断面 (北から)



SB1 P238 土層断面 (西から)



SB1 P11 土層断面 (北から)



SB1 P12 土層断面 (北から)



SB1 P13 土層断面 (北から)



SA3 P16・SB1 P17 土層断面 (東から)



SB1 P82 土層断面 (西から)



SB1 P84 土層断面 (北から)



SB1 P86 土層断面 (北から)



SB1 P233 土層断面 (北から)



SB1 P9 土層断面 (北から)

SB2 全景
(南西から)



SB2 P167
礎盤石検出状況
(南西から)



SB2 P163
土層断面
(南東から)





SB2 P253 土層断面 (北西から)



SB2 P252 土層断面 (北西から)



SB2 P167 土層断面 (南西から)



SB2 P248 土層断面 (南西から)



SB2 P246 土層断面 (南東から)



SB2 P163 唐居敷検出状況 (南東から)



SB2 P161 土層断面 (南東から)



SB2 P161 礎盤石検出状況 (南西から)



SB3 全景（南から）



SB3 P146 土層断面（北から）



SB3 P146 礎盤石検出状況（北から）



SB3 P276 土層断面（北から）



SB3 P152 土層断面（北から）



SB3 P152 礎盤石検出状況（北から）



SB3 P150 土層断面（北から）



SB3 P277 土層断面 (北から)



SB3 P53 土層断面 (南から)



SB3 P62 土層断面 (南から)



SB3 P129 土層断面 (南から)



SB3 P126 土層断面 (南から)



SB3 P116 土層断面 (南から)



SB3 P94 土層断面 (南から)



SD273 (左)・SD213 (右) 土層断面 (西から)



SD279・SX280
礎検出状況
(北から)



SD45・SA1 全景
(南西から)



SD279 稜検出状況（西から）



SD279・280 土層断面（南から）



SD279・280 土層断面（北半）（西から）



SD279・280 土層断面（南半）（西から）



SD279 土層断面（南から）



SD45 土層断面（南から）



SX39 土層断面（南から）



SX33 土層断面（南東から）



SD159 土層断面 (西から)



SD117 土層断面 (南から)



SD85 土層断面 (東から)



SD81 土層断面 (東から)



SB4 全景 (東から)



SK250 土層断面 (南から)



SK247 土層断面 (南から)



SK218 土器出土状況 (南から)



P109 上層 土器出土状況 (南西から)



P109 下層 土器出土状況 (北東から)



P109 最下層 土器出土状況 (北西から)



P100 土器出土状況 (北から)



P182 土器出土状況 (南から)



弥生時代中期後葉の土器



古墳時代の出土遺物



弥生時代中期前葉 土器



弥生時代中期後葉 土器 (1)



弥生時代中期後葉 土器 (2)



18



20



22



23

弥生時代中期後葉 土器 (3)



27



28



29



30



32



36

弥生時代中期後葉 土器 (4)



弥生時代中期後葉 土器 (5)



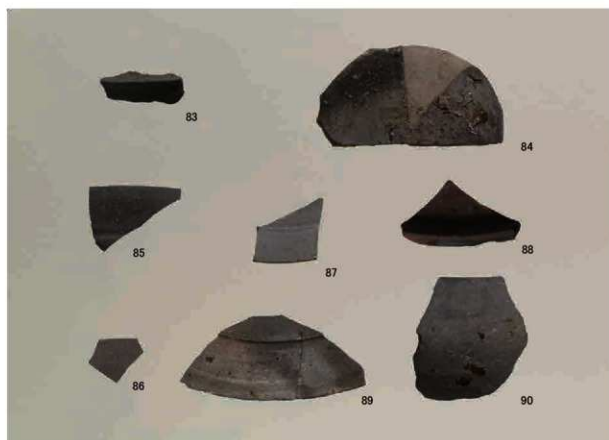
弥生時代中期後葉 土器 (6)



弥生時代中期後葉 土器 (7)



弥生時代中期後葉・後期頃 土器



古墳時代 土器



S4



S4 (裏面)

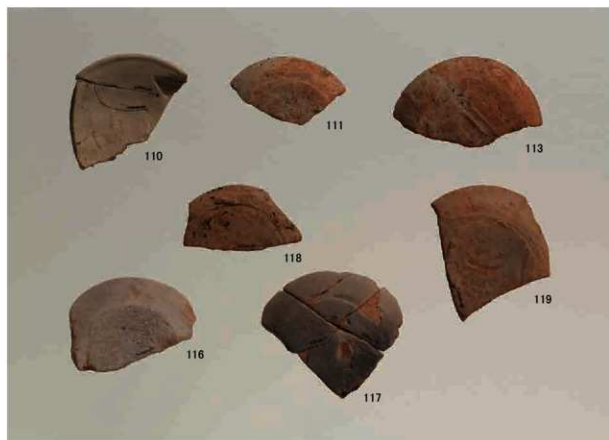
古墳時代 唐敷石



古墳時代・中世 SD46 土器



中世 SD46 土器



中世 SD279 土器 (1)



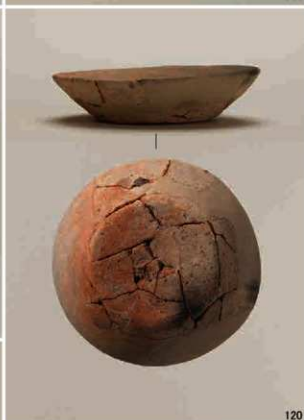
112



114



115



120



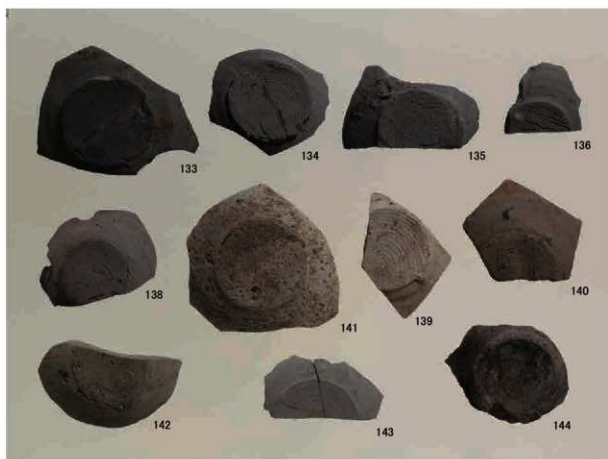
128



127



中世 SD279 土器 (3)



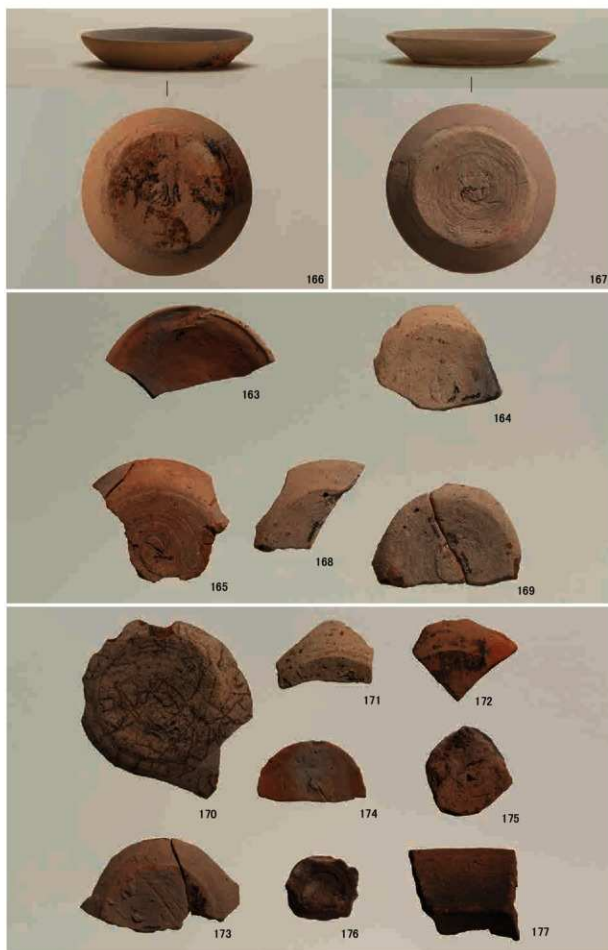
中世 SD279 土器 (4)



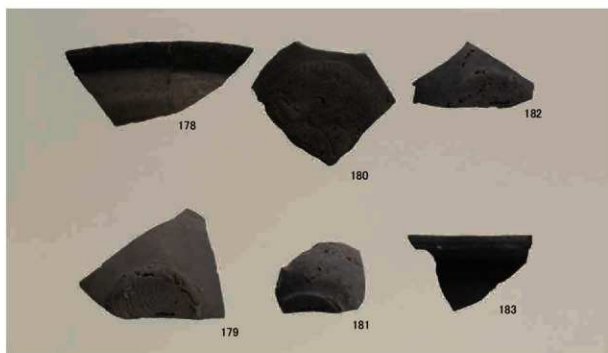
中世 SD279 土器 (5)



中世 SD279 土器 (6)



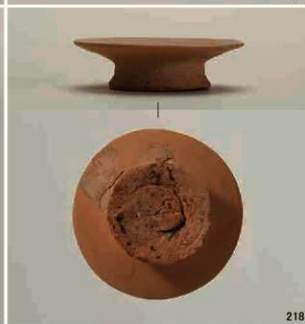
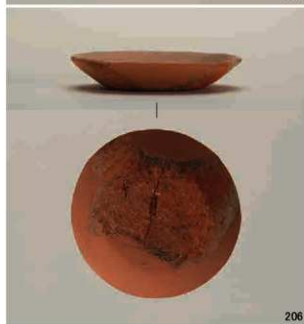
中世 SD45 土器 (1)

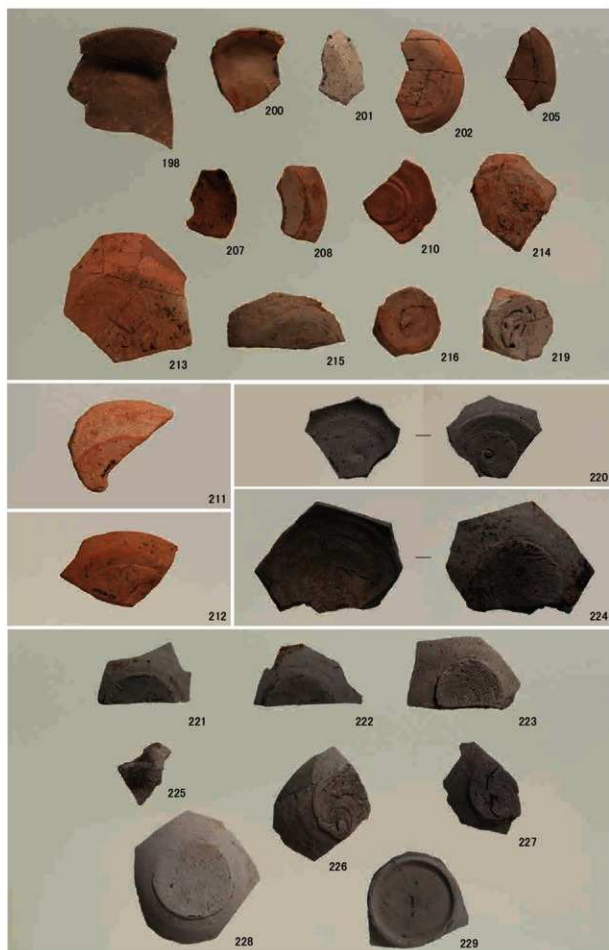


中世 SD45 土器 (2)

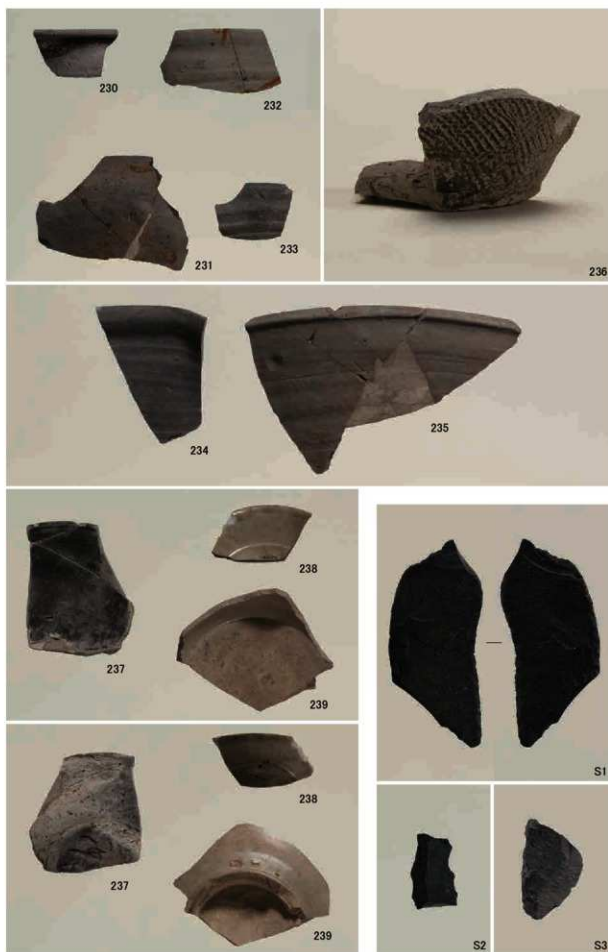


中世 土器 (1)





中世 土器 (3)



中世 土器・弥生時代 石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せきのくちせき							
書 名	関ノ口遺跡							
副 書 名	中播都市計画事業 JR 網干駅前土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第 541 冊							
編著者名	三好元樹 藤原怜史 株式会社古環境研究所 バリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所 在 地	〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号 (兵庫県立考古博物館内) Tel. 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所 在 地	〒 658-0081 兵庫県神戸市東灘区田中町 5-3-23 Tel. 078-362-3784							
発行年月日	令和 7 (2025) 年 3 月 25 日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所 在 地	〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号 Tel. 079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
関ノ口遺跡	兵庫県姫路市 網干区和久	28201	020334	34° 48' 58"	134° 35' 4"	20191122 ～ 20200217 (2019024)	327㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
関ノ口遺跡	集落	弥生時代中期後葉以前		溝、土坑、ピット				時期不明
		弥生時代中期後葉		堅穴建物 1、溝、土坑、 ピット、自然流路		弥生土器、石器		
		古墳時代後期後半		掘立柱建物 2		須恵器、唐居敷		掘立柱建物のうち 1 棟は四面廂建物
		中世		掘立柱建物 3、溝 3、鋤溝、 溝、土坑、ピット		土師器、須恵器、瓦器、 白磁、風字硯		
要約	播磨平野西部の完新世段丘に立地する関ノ口遺跡は多数の発掘調査が行われており、本書では第 7 次調査について報告する。弥生時代中期後葉以前の遺構として、溝、土坑、ピットを検出したが、遺物は伴わず時期不明である。放射性炭素年代測定に従えば弥生時代前期以前の遺構となる。弥生時代中期後葉は多数の遺物と堅穴建物、溝、土坑、ピットといった遺構が見つかった。短期間に地層の堆積、自然流路の発生と埋没が生じている。堅穴建物は中央炉と 6 本の主柱穴を持つが、床面以下まで削平されていた。弥生時代の遺構は後世に削平を受けたと考えられ、多くの弥生土器が後世の遺構と包含層から出土している。古墳時代後期後半は四面廂建物を含む掘立柱建物を検出した。周辺の調査でも、北の日吉山裾と並行する方に軸をもつ掘立柱建物が確認されており、複数の掘立柱建物が並び建つ中に四面廂建物が建つ景観が想定される。中世では正方位からずれた掘立柱建物と横列、概ね正方位の溝、鋤溝、掘立柱建物が検出された。正方位からずれた掘立柱建物は古代以前にさかのぼる可能性もあるが、その他の遺構は概ね 11 世紀後半～12 世紀前半頃にとまる。							

兵庫県文化財調査報告 第541冊

姫路市

関ノ口遺跡

－中播都市計画事業 JR 網干駅前土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

令和7年（2025）年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒658-0081 兵庫県神戸市東灘区田中町5-3-23

印刷：株式会社クレアチオ

〒672-8071 兵庫県姫路市飾磨区構4丁目140番地 baseA ビル

